

常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、立体交差事業に伴う常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

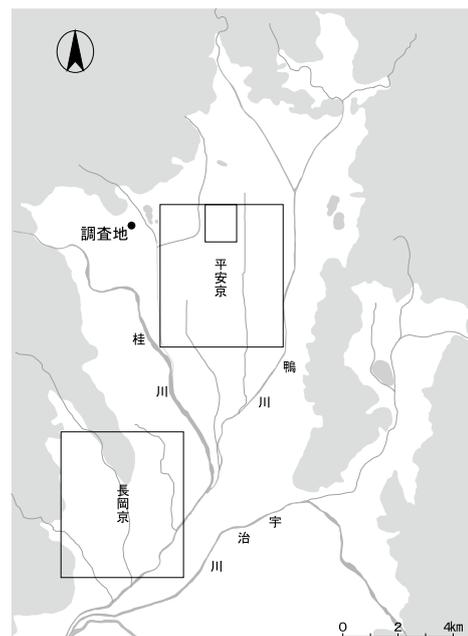
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡（文化財保護課番号 03 S 294）
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町他 地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2012年8月13日～2012年11月30日
- 5 調査面積 約660㎡
- 6 調査担当者 近藤章子・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 1～6区の各調査区毎に、1番から通し番号とし、番号の前に遺構種類を付して呼称した。本書内では、番号の前に調査区を付け、例えば1区の土坑300は土坑1-300と表記することとした。
- 12 遺物番号 土器類・瓦類・石製品・土製品・金属製品ごとに通し番号を付し、土器類以外は番号の前に遺物種を付して（例：瓦1）呼称し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子・布川豊治
執筆は第3章遺構（3）・（4）を布川が、それ以外を近藤が担当した。
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 遺跡の位置と環境	4
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	9
(1) 1区の遺構	9
(2) 2区の遺構	13
(3) 3区南の遺構	19
(4) 3区北・4区の遺構	23
(5) 5区の遺構	32
(6) 6区の遺構	34
4. 遺 物	39
(1) 遺物の概要	39
(2) 土器類	40
(3) 瓦類	47
(4) 銭貨	50
(5) 石製品	50
5. ま と め	52

図 版 目 次

図版1 遺構	1	1区北部全景（北から）
	2	1区南部全景（西から）
	3	井戸1-1・柱穴群（北西から）
図版2 遺構	1	2区南部第1面全景（西から）
	2	2区南部第2面全景（西から）
	3	2区北東部全景（北から）
	4	2区北西部全景（北から）
図版3 遺構	1	3区南全景（北から）
	2	溝3-1・3-2（西から）

	3	4区第2面全景（北西から）
図版4	遺構	1 布掘基礎4-42（北から）
	2	5区全景（北東から）
	3	6区第2面全景（東から）
図版5	遺物	1・2区出土遺物
図版6	遺物	3～6区出土遺物
図版7	遺物	出土瓦

挿 図 目 次

図1	1区調査前全景（東から）	2
図2	2・3区調査前全景（北東から）	2
図3	4区調査前全景（北西から）	2
図4	5区調査前全景（南から）	2
図5	6区調査前全景（北東から）	2
図6	2区作業風景（北東から）	2
図7	チャレンジ体験風景（北東から）	2
図8	現状復旧作業風景（北から）	2
図9	調査区配置図1（1：500）	3
図10	調査区配置図2（1：500）	4
図11	調査地と周辺の遺跡（1：5,000）	6
図12	1区実測図（1：100）	10
図13	井戸1-1実測図（1：50）	11
図14	柱穴列1-2・1-3実測図（1：50）	11
図15	溝1-30断面図（1：50）	12
図16	土坑1-35断面図（1：50）	12
図17	2区第1面平面図（1：100）	13
図18	2区第2面平面図（1：100）	14
図19	2区南壁・東壁断面図（1：50）	15
図20	土坑2-44断面図（1：50）	16
図21	溝2-45断面図（1：50）	16
図22	門2-1実測図（1：50）	17
図23	溝2-10断面図（1：50）	18

図24	3区南実測図 (1:100)	19
図25	井戸3-15 実測図 (1:50)	20
図26	溝3-16・土坑3-20 実測図 (1:50)	20
図27	溝3-17・3-18 断面図 (1:50)	21
図28	柱穴列3-3~3-7 実測図 (1:50)	22
図29	3区北・4区第1面平面図 (1:100)	24
図30	3区北・4区第2面平面図 (1:100)	25
図31	3区北・4区東壁・北壁断面図 (1:80)	26
図32	溝3-1・3-2・4-1、整地層4-46、落込4-70 断面図 (1:50)	27
図33	柱穴列4-2・4-3 実測図 (1:80)	28
図34	土坑4-57 検出状況実測図 (1:50)	29
図35	布掘基礎4-42 実測図 (1:50)	30
図36	布掘基礎4-61 実測図 (1:50)	30
図37	5区実測図 (1:100)	31
図38	溝5-20 断面図 (1:50)	32
図39	落込5-30 実測図 (1:50)	32
図40	柱穴列5-1・5-2 実測図 (1:50)	33
図41	6区平面図 (1:100)	35
図42	6区西壁・北壁断面図 (1:50)	36
図43	土坑6-44・柱穴列6-1 実測図 (1:50)	37
図44	井戸6-70 実測図 (1:50)	37
図45	1区出土土器実測図 (1:4)	40
図46	2区出土土器実測図 (1:4)	41
図47	琮形瓶模式図	42
図48	3区南出土土器実測図 (1:4)	43
図49	3区北・4区出土土器実測図 (1:4)	44
図50	5区出土土器実測図 (1:4)	45
図51	6区出土土器実測図 (1:4)	46
図52	軒瓦拓影・実測図 (1:4)	48
図53	丸瓦拓影・実測図 (1:6)	49
図54	銭貨拓影 (1:1)	50
図55	石製品拓影・実測図 (1:4)	51
図56	遺構概略図 (1:500)	53
図57	遺構変遷図 古墳時代 (1:1,500)	54
図58	遺構変遷図 飛鳥時代から奈良時代 (1:1,500)	55

図59	遺構変遷図 平安時代（1：1,500）	56
図60	遺構変遷図 鎌倉時代から室町時代（1：1,500）	57
図61	広隆寺境内と内外区別実測図および周辺調査位置図（1：5,000）	59

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	7
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	39

常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡

1. 調査経過

本調査は、市道梅津太秦線（通称城北街道）限度額立体交差事業に伴う発掘調査である。調査は京都市建設局事業推進室より委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の下、実施した。調査地は、古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする集落跡である常盤仲之町遺跡の南東端と、奈良時代から平安時代の遺物散布地である一ノ井遺跡に該当する。また、調査区の一部は飛鳥時代に創建された広隆寺旧境内に隣接する。本事業に伴う調査は2008年度より行っており、今回の調査が7次調査となる。発掘調査では周辺の既往調査の成果により、第1面は鎌倉時代から室町時代、第2面は古墳時代から平安時代と想定した。

調査区は旧敷地の境界に応じて設定した。現城北街道西側の南から1区・2区・3区・4区・5区、J R嵯峨野線高架北の東側を6区とした。調査は1区・3区・6区は2分割、2区は3分割にして実施した。重機掘削による排出土は一部場外搬出し、それ以外は場内に仮置きとした。調査に先立ち、周辺のフェンス撤去・張り替えを行い、一部アスファルトが敷設されているためカッター入れを行った。以下、調査を実施した調査区の順に概説する。

2区 近隣幼稚園の駐車場として利用されていたため、その夏休み期間中に調査・復旧工事を終了する必要がある。2区南部から着手し、調査終了後にはアスファルト復旧し、幼稚園の仮駐車場を設置した。その後、2区北西部・2区北東部を反転調査した。2区の一部は駐車場への通路となるため、埋め戻し時に土壌改良材を混入し、アスファルト復旧した。すべての調査終了後にはグリーンフェンスに張り替え、現状復旧した。

4区 重機掘削の排土は場外搬出とし、人力による排土は3区北部に仮置きした。しかし調査中の残土が予想より多くなったため、調査中にさらに場外搬出した。西隣の宅地工事との関係で、10月末までの期限で、2-1区と並行して調査を実施した。調査区の北端に埋設管があり、また北側が住宅の通路であるため、フェンスの控えを広くするなどの安全対策をとった。調査終了後は北側の一部を隣家の仮通路とし、フェンスの張り替えを行い、地表面には碎石を入れた。すべての調査終了後に、フェンスを撤去し、敷地を杭とロープによって明示した。

3区 稼働中のコインパーキングへの出入り口を確保するため、南北2分割して調査を行った。現通路部分のアスファルトのカッター入れは2区と同時に行った。まず3区北から重機掘削を開始したが、旧建物のコンクリート基礎が調査区の3/4の範囲を占め、地山面まで攪乱されているため、その部分は未調査とし、残りの4区に隣接する部分のみ、遺構を確認した。排土は調査が終了した4区に仮置きした。埋め戻し後は、地固めを行い、表面には碎石を撒き、コインパーキングへの仮通路とした。3区南の調査は、調査終了した2区北側を残土置き場とした。この部分が通路



図1 1区調査前全景（東から）



図2 2・3区調査前全景（北東から）



図3 4区調査前全景（北西から）



図4 5区調査前全景（南から）



図5 6区調査前全景（北東から）



図6 2区作業風景（北東から）



図7 チャレンジ体験風景（北東から）



図8 現状復旧作業風景（北から）

となるため、埋め戻しに際して土壌改良材を入れ、アスファルト復旧を行った。

1区 3区と並行して調査を実施した。南側の歩道との関係で、計画よりフェンスを内側に設置した。一部で基礎コンクリートがあったため、ペッカーで削割した。調査区は南・北の2分割とし、調査区南寄りに径約30cmの排水管が横断しており、この部分から南を先行して調査を終了させた。排水管より北部の重機掘削の排土は場外搬出した。南部を人力掘削の残土置き場とした。

5区 1区と並行して調査を行った。計画では2分割して調査を行う予定であったが、遺構面が浅く、人力掘削土が少量であることから、一括調査とした。北部はコンクリート基礎があり、ペッカーでコンクリートを割った。住宅に隣接するため、フェンスの控えを計画より広くとった。調査終了後はグリーンフェンスを現状復旧した。

6区 重機掘削後にフェンスで仮囲いをした。重機掘削の排土は場外搬出し、第1面調査終了後、2分割して調査を行い、人力掘削排土は、場内処理した。調査終了後は杭とロープで敷地を明示した。

すべての調査区で、出土したアスファルトやコンクリートガラなどは産業廃棄物として処分した。

遺構などの記録は、平面図を中心に適宜、断面図・個別図を併用した図面を作成し、遺構面ごとに全景と個別遺

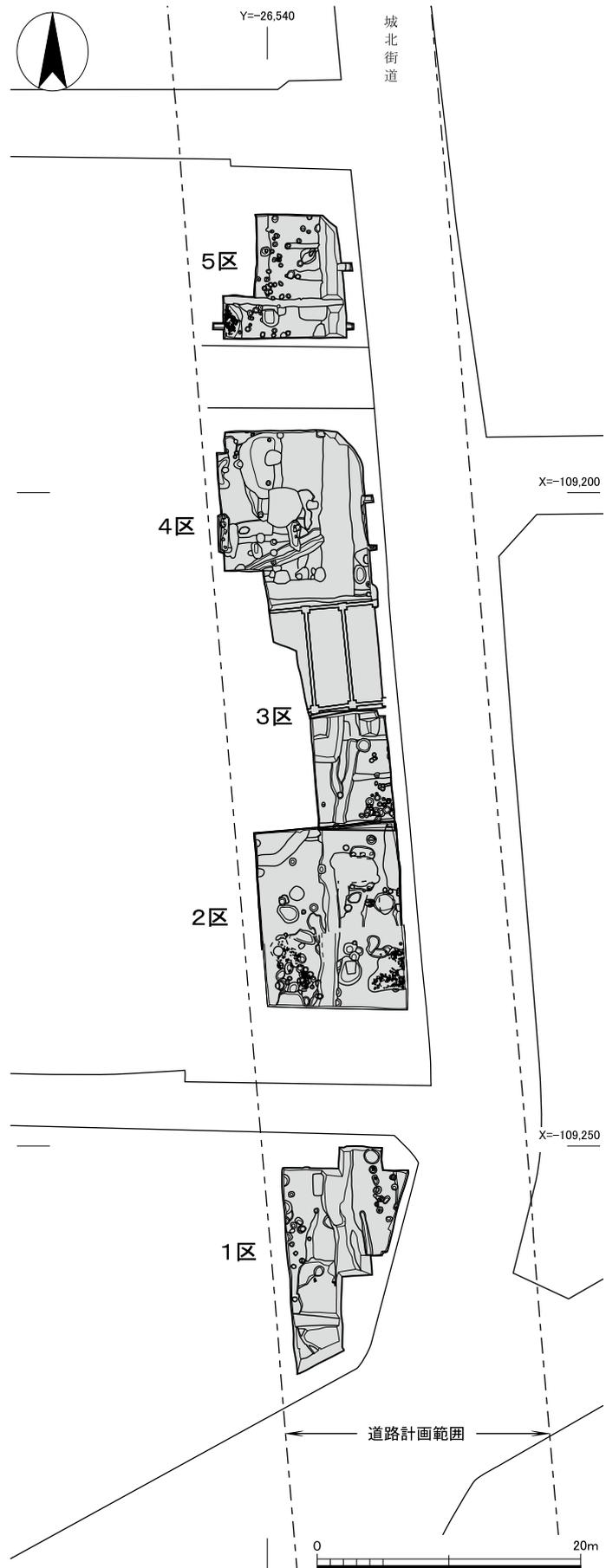


図9 調査区配置図1 (1:500)

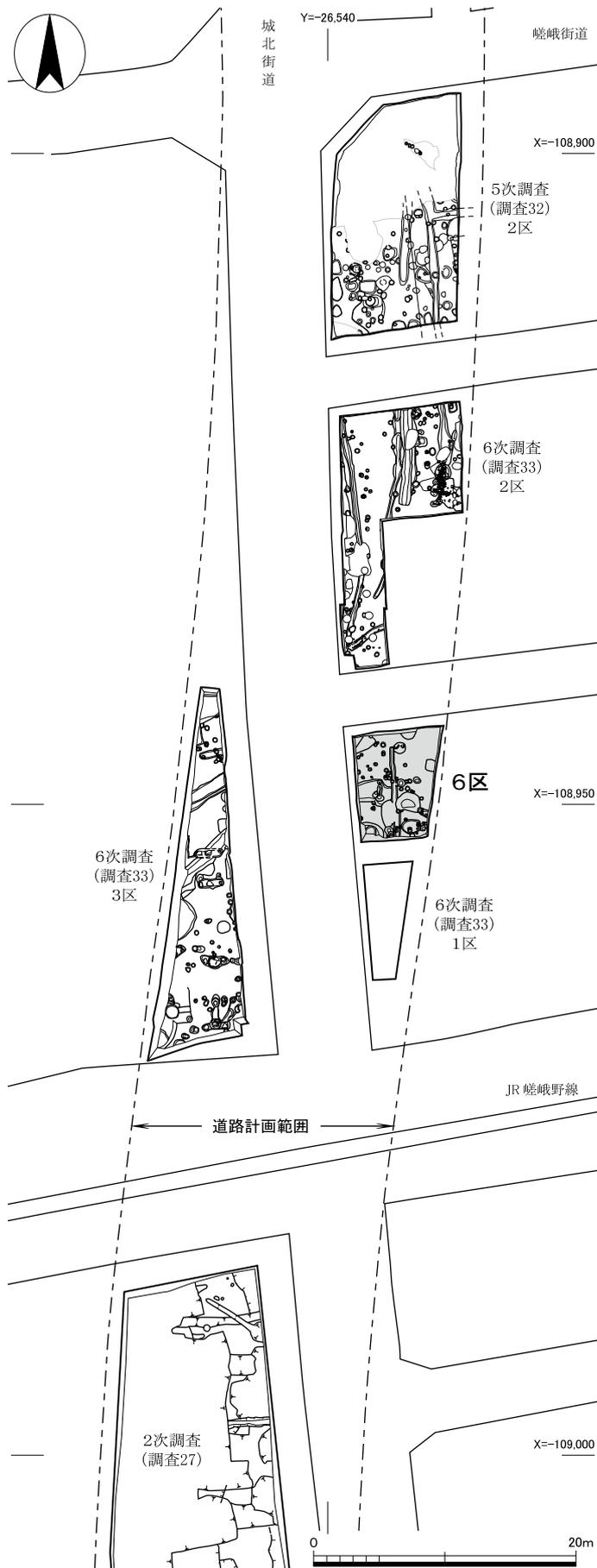


図10 調査区配置図2 (1:500)

構の写真撮影などを行った。

調査の進展に伴い、各調査区で適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、検証委員である立命館大学の高正龍教授、京都産業大学の鈴木久男教授の視察を2012年10月3日、4日に受けた。

調査期間中の2012年11月7日には、京都市教育委員会の実施する「生き方探究・チャレンジ体験」の一環として、太秦中学校2年生3名を受け入れ、現場においての発掘作業を体験してもらった。

2. 位置と環境

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は京都市の西部、桂川の左岸に位置し、北部一带には山地が広がる。丘陵裾から南西を流れる桂川へ向けて、北東が高く、南西へ低くなる緩傾斜地となる。調査地の北東には国の名勝に指定されている雙ヶ岡(双ヶ岡)があり、その西の裾を北西の鳴滝・宇多野より南東方向へ御室川が流れる。調査地が含まれる常盤仲之町遺跡および一ノ井遺跡は、古御室川が形成した扇状地上に立地する。

北部には山間部に旧石器や縄文時代の遺跡があり、古墳時代には大規模な群集墳が丘陵裾や丘陵腹、台地に築造される。西接には飛鳥時代に渡来系氏族である秦氏が造営したと伝えられる広隆寺がある。平安時代には広隆寺を

中心にして集落が発展し、また、嵯峨方面に天皇の離宮や別業、寺などが造営されると、平安京と嵯峨地域を結ぶ古道であった嵯峨街道（現下立売通）が賑わいを見せたと思われる。また、成立時期は不明であるが、調査の要因となっている城北街道が南北方向に延びる。

調査地周辺は江戸時代には太秦門前村にあたり、京都近郊の農村として定着し、現代まで至る。明治7年に太秦4村が合併して太秦村となり、広隆寺の境内地は縮小し、明治30年には旧境内地を横断して京都鉄道が開通し、やがて山陰本線として引き継がれる。またその一部には映画会社の撮影所が造られる。戦後には住宅地としての開発が進み、高度経済成長期以降、住宅やマンションが密集する市街地となる。

（2）周辺の調査（図11、表1）

調査地は、常盤仲之町遺跡と一ノ井遺跡の接点に位置している。また、広隆寺（広隆寺旧境内）の東限に隣接し、秦氏との関連が考えられる木嶋坐天照御魂神社（蚕の社）も東に位置している。当地周辺では縄文時代以降、特に古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした集落や古墳・古墳群、寺院などの遺跡が展開している。

縄文時代 北に位置する村ノ内町遺跡で土坑が検出され、中期末葉（北白川C式）の土器が出土した（調査31）。また、少量であるが、晩期の土器片も出土している。

弥生時代 村ノ内町遺跡では中期の遺構が確認されている。発掘調査（調査23・24）では竪穴住居が1棟（畿内第Ⅱ様式）、立会調査（調査11・15）では土坑や流路・遺物包含層が確認されている。また、東側の和泉式部町遺跡でも発掘調査で中期（畿内第Ⅳ様式）の竪穴住居1棟が検出された（調査16）。御室川を遡った北西約2.5kmの梅ヶ畑の丘陵（梅ヶ畑遺跡）では、埋納されていた中期の銅鐸4個体が見つかる¹⁾。

古墳時代 和泉式部町遺跡では、前期の竪穴住居が14棟、中期の竪穴住居が7棟検出された（調査16）。中期の竪穴住居にはL字状に曲がる長い煙道を備えたものがあり、また初期須恵器や韓式系土器などが出土するなど、朝鮮半島との強い関連が窺える。

常盤仲之町遺跡（調査5・9・12・21・22・25・28・29）や村ノ内町遺跡（調査31）では、後期から飛鳥時代にかけての竪穴住居が多数検出されている。やや遺跡の範囲を広げてみると、西方の上ノ段町遺跡、多藪町遺跡、西野町遺跡などでも同時期の竪穴住居が多く検出されており、後期以降に嵯峨野地域において人口の急増がみられる。

嵯峨野地域では古墳の築造開始が、同じ山城北部における他地域にくらべて遅れることが知られており、西方にある中期末葉の仲野親王墓古墳（垂箕山古墳）が最初とされる²⁾。これ以降、嵯峨野地域の首長墓と考えられる大型の古墳は当地の周辺に展開する。特に後期後葉の双ヶ岡1号墳は当地周辺を一望できる双ヶ岡の最も高い一ノ丘に築かれた円墳（直径44m）で、巨石を用いた横穴式石室は南西方向に向けて開口している³⁾。また、後期には北嵯峨丘陵の南斜面を中心に多くの群集墳（円墳直径10～20m、横穴式石室）が営まれ、当地周辺では先の双ヶ岡においても一ノ丘南側から三ノ丘にかけて双ヶ岡古墳群が、平地部にも常盤東ノ町古墳群が展開する。常盤東ノ町古墳

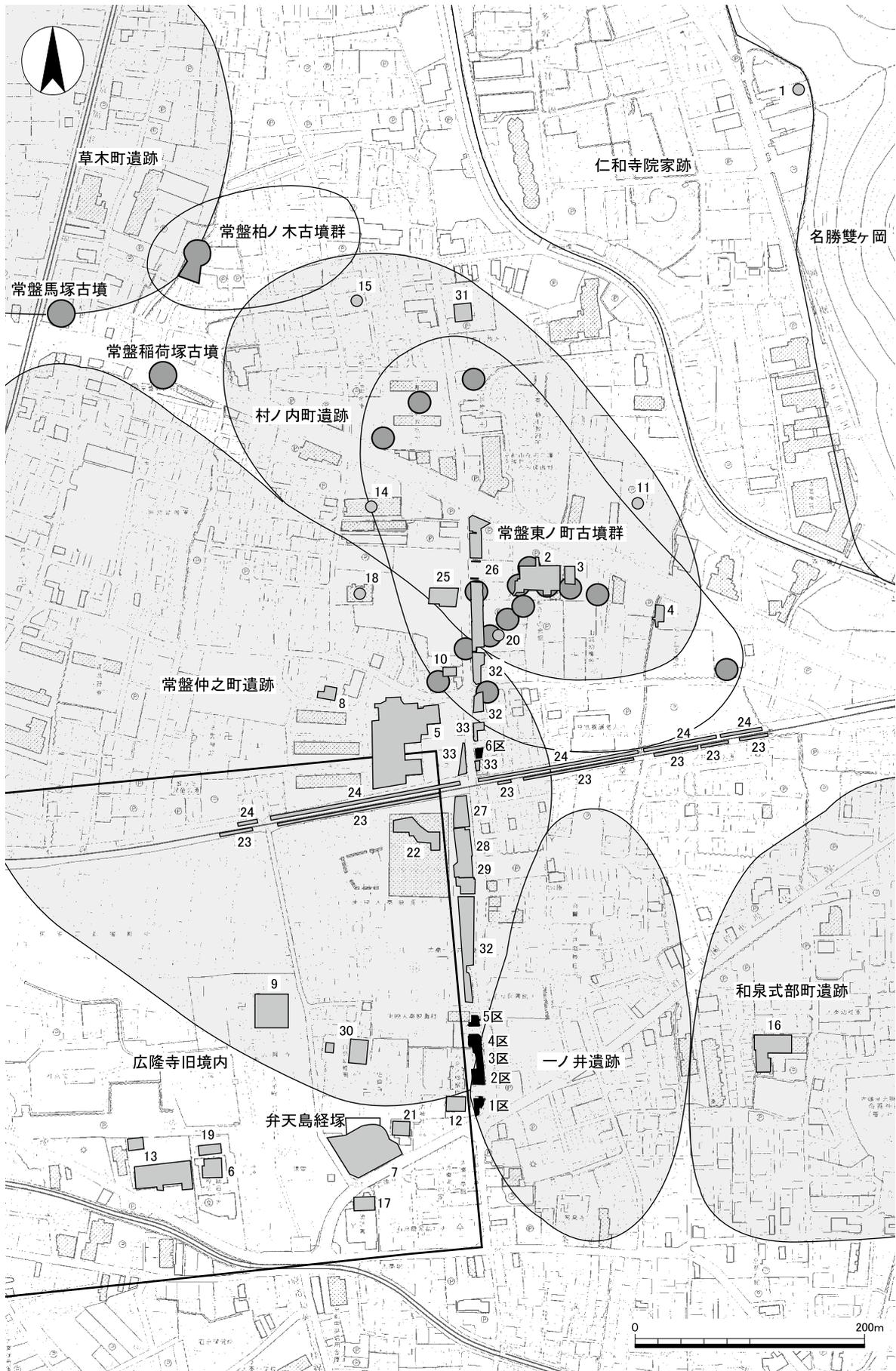


図11 調査地と周辺の遺跡 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の堅穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	弁天島経塚の調査。平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	『日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査』『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の堅穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の堅穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡 一右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘鋳造遺構	『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の堅穴住居、古墳前期の堅穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	『和泉式部町遺跡』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	『広隆寺旧境内1』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	『広隆寺旧境内2』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の堅穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	『広隆寺旧境内』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の堅穴住居4、平安～江戸の遺構など	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の堅穴住居、古墳～飛鳥の堅穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の堅穴住居、古墳後期～飛鳥の堅穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の堅穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘(1次)	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の堅穴住居、古墳後期の横穴式石室ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘(2次)	2009.01.20～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込みほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘(3次)	2009.12.14～ 2010.03.12	飛鳥の堅穴住居、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
29	2009	発掘(4次)	2009.12.14～ 2010.02.02	飛鳥の堅穴住居、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
30	2010	発掘	2010.05.06～ 2010.06.22	平安中期～後期の土坑・溝・柱列、中世の土坑・溝など	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
31	2010	発掘	2010.05.06～ 2010.06.10	縄文中期の土坑、古墳後期～飛鳥の堅穴住居・土坑、中世の建物・柱列・土坑など	『村ノ内町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
32	2011	発掘(5次)	2010.11.22～ 2011.03.11	飛鳥の堅穴住居・土坑・溝、平安中期の建物・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町の土坑・溝・集石遺構など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-15 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
33	2011	発掘(6次)	2010.11.28～ 2012.01.26	古墳以降の溝・土坑・落込、平安の溝、鎌倉～室町の柱穴・溝・土坑・土坑墓・門跡など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年

※ No.は図11の調査地点の数字と対応

群は、同時期の集落遺跡である常盤仲之町遺跡の北東部で重複しており、これまでに少なくとも円墳16基を確認している（調査2・3・10・26）。それ以外にも古墳の周溝を検出している（調査32）。また、周溝の可能性が考えられる溝やその周辺から古墳の副葬品などが出土しており（調査33）、広隆寺旧境内においても後期の埴輪が採取されており、古墳が壊され埋没している可能性が考えられる（調査9）。

飛鳥時代 調査例が少なく、その実態は明らかではないが、当期に創建された広隆寺がある。同じ葛野郡内にやや先行して建てられた北野廃寺（北区北野白梅町）とともに、文献にみえる「広隆寺」の前身とされる「蜂岡寺」や「葛野秦寺」との関連が指摘されている。広隆寺旧境内の北東部は常盤仲之町遺跡に含まれており、現境内の調査（調査9・12・22～24）においても古墳時代後期から飛鳥時代の堅穴住居が多数検出されており、寺院の建立との関連で注目される。当期の遺構は建物の基壇とみられる遺構（調査6）の他、溝・柱穴・土坑など（調査17・33）がある。

奈良時代以降 城北街道拡幅に伴う近年の調査により、中世の状況は徐々に明らかになりつつある。常盤仲之町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物（調査27）、平安時代の区画施設や建物・土坑・溝など（調査5・22・28・29）、また、鎌倉時代から室町時代の柱穴群や土壙墓群（調査27～29・32・33）が検出されている。その他、広隆寺の子院に関係するとみられる門跡（調査33）や、城北街道西側溝とみられる南北溝（調査27・29・32）などが注目される。また、広隆寺旧境内遺跡でも平安時代以降の遺構が多数検出されている（調査6・12・13・17・19・21・30）。特に、調査12では平安時代中期の建物跡、調査30では平安時代中期の区画溝や柵、儀式に使用されたと思われる遺物が多数検出されている。また、調査7では旧境内南東部にあった平安時代後期の「弁天島経塚」が調査された。一ノ井遺跡では、明確な遺構は検出されていないが、平安時代以降の遺物散布地として知られている。広隆寺を中心としたこの地域独特の遺構の広がりが認められる。

註

- 1) 田辺昭三・佐原 真「京都市梅ヶ畑出土の銅鐸」『日本考古学協会昭和39年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1964年
- 2) 仲野親王墓古墳は、中期末葉に位置付けられる全長75mの前方後円墳で、盾形の周濠・周堤を伴い、残存状況は良好である。仲野親王陵高阜墓に指定されており、宮内庁管理である。垂箕山古墳とも片平大塚古墳ともいわれる。
- 3) 1980年度に名勝公園として整備されるにあたり、発掘調査が実施された後、現地にて石室内に土嚢などを詰めて埋め戻され保護・保存されている。
『名勝双ヶ岡保存整備事業報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年

3. 遺 構

(1) 1区の遺構（図12、図版1-1・1-2）

調査区は植え込みや既存管などを避けたため、不定形で、北端は東西9.4m、南端は東西4m、南北約18mである。北端の現地表の標高は40.6m、南端では39.9mで、南側道路より一段高く盛り上がる。

基本層序は、北端は地表下0.25mまで現代盛土、南は地表下0.75mまで現代盛土、以下、10Y4/4褐色砂泥の近世層、10YR4/3にぶい黄褐色～5/6黄褐色砂泥の中世整地層、以下、7.5YR4/3褐色砂礫・10YR 7/3にぶい黄橙色粘質土の地山である。地山は砂礫層・粘質土層・シルト層が互層となる。遺構はほぼ地山面で検出した。

1区は、調査区西側で実施した調査（表1-調査12）では、古墳時代の竪穴住居や平安時代の柵列などを検出していたが、今回の調査では中世の南北溝・土坑・柱穴群、中世から近世の井戸を検出したのみである。

井戸1-1（図13） 調査区北東部で検出した。径1.2m、深さ2.0mの地山を基盤とする円形の素掘り井戸である。ほぼ垂直に掘られる。出土遺物は少量で、井戸の最下層からは平安時代の灰釉陶器片が出土するが、他は室町時代から江戸時代の遺物が大半である。

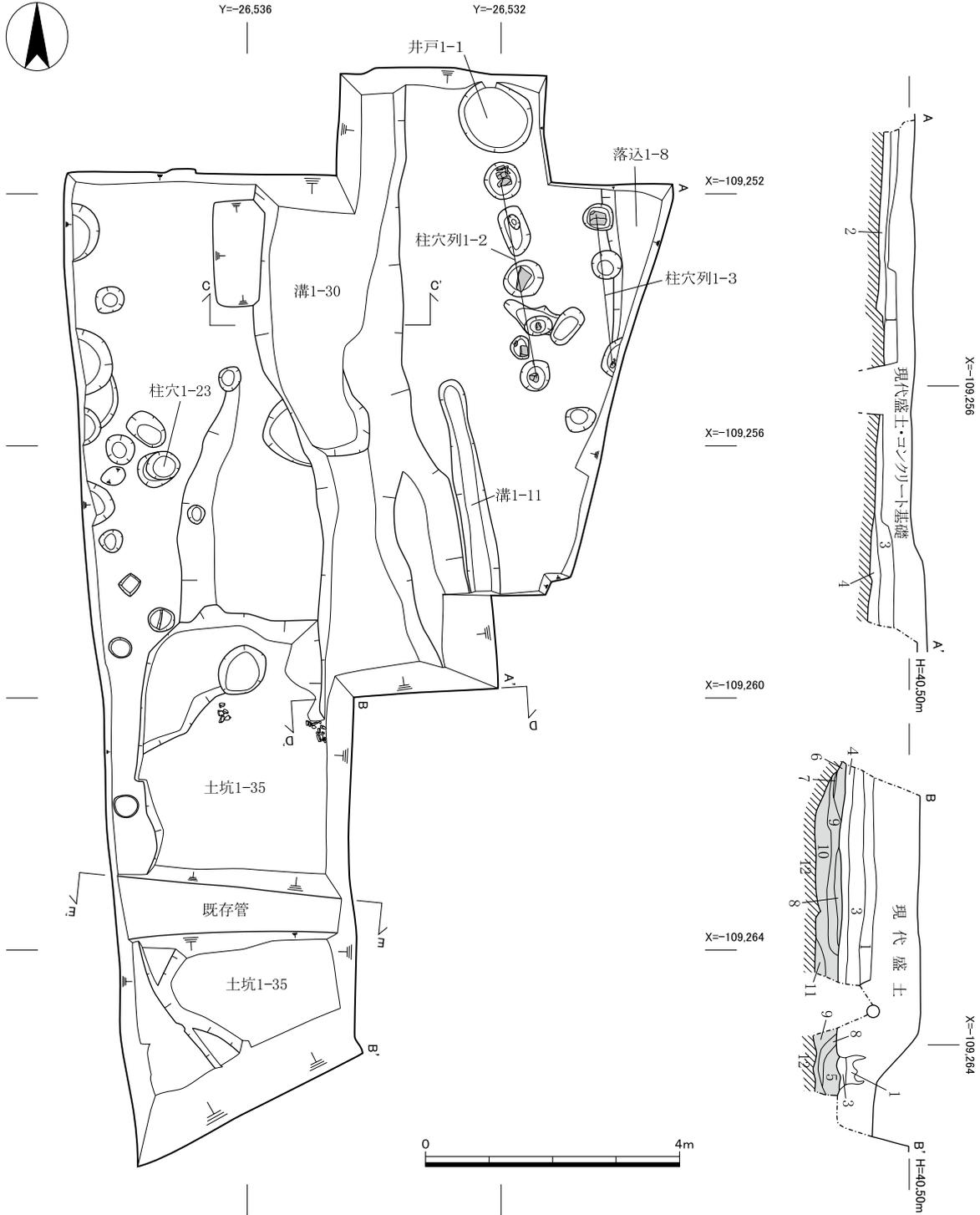
柱穴列1-2（図14、図版1-3） 調査区東部で検出した。柱穴1-2・1-4・1-9からなる。2間（3.4m）で、柱間は約1.7mである。方位は座標北で西へ約10.3度振れる。出土遺物が微量なため時期の確定はできない。溝1-30と城北街道の中間に位置する。いずれも柱穴の底に石を据えている。

柱穴列1-3（図14、図版1-3） 調査区東部で検出した。柱穴1-6・1-7・1-37からなる。2間（2.4m）分で、柱穴1-6・1-7は柱間約0.8m、柱穴1-7・1-37は柱間約1.7mである。方位は座標北で西へ6.1度振れる。南北ともに調査区外に延びる可能性がある。出土遺物が微量なため時期の確定はできない。柱穴列1-2とはほぼ並列し、さらに溝1-30とも平行する。柵列か築地になる可能性も考えられる。

溝1-11 溝1-30の東肩に平行して北から南方向に流れる。幅約0.5m、深さ0.05～0.1m、検

表2 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代	土坑、柱穴
鎌倉時代	土坑、溝、柱穴、井戸、整地層
室町時代	土坑、門、柱穴、柱穴列、小穴、落込、溝
江戸時代	井戸、土坑



- 1 10YR4/4 褐色砂泥
 - 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ4~8cm礫混(落込1-8)
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質(中世整地層)
 - 4 10YR5/6 黄褐色砂泥 少量の炭泥(中世整地層)
 - 5 10YR4/6 褐色砂泥 φ3~5cm礫少量混 10YR7/3 にぶい黄橙色 やや粘質混
 - 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 φ2~10cm礫多量混
 - 7 10YR5/6 黄褐色砂泥
 - 8 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 - 9 2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂 10YR6/8明黄褐色シルトまだらに混 炭泥
 - 10 10YR5/8 黄褐色砂泥 10YR7/8黄橙色シルトブロック混
 - 11 2.5Y7/4 浅黄色シルト
 - 12 10YR7/3 にぶい黄橙色 やや粘質(地山)
- 土坑1-35

図12 1区実測図 (1:100)

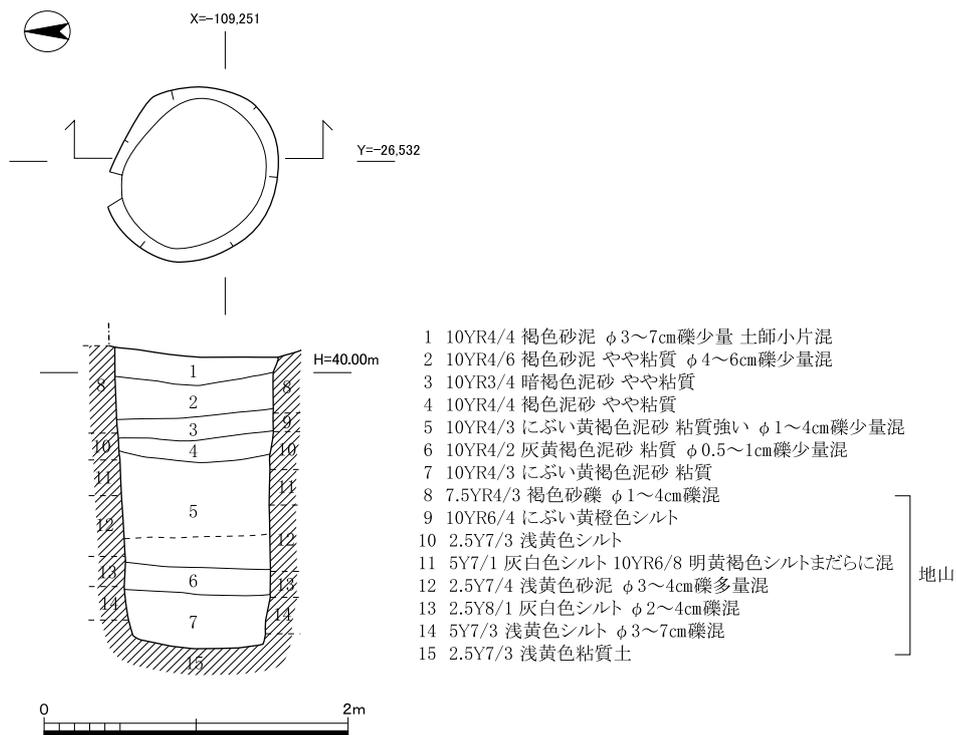


図13 井戸1-1実測図 (1:50)

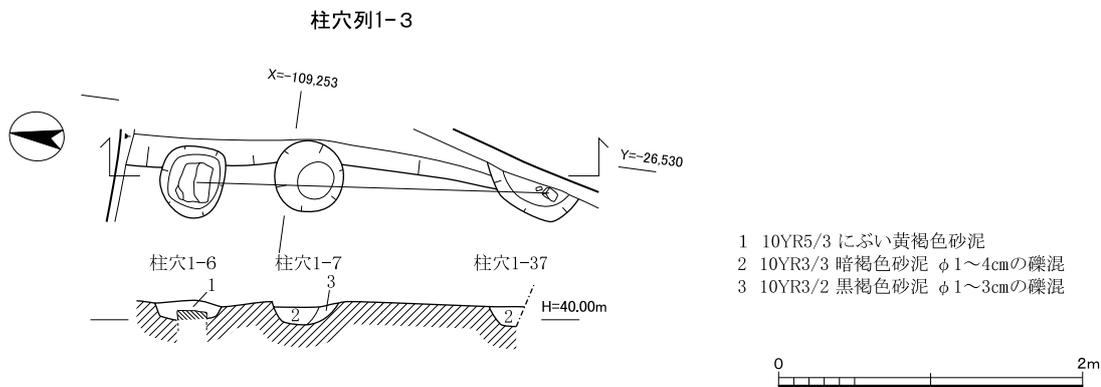
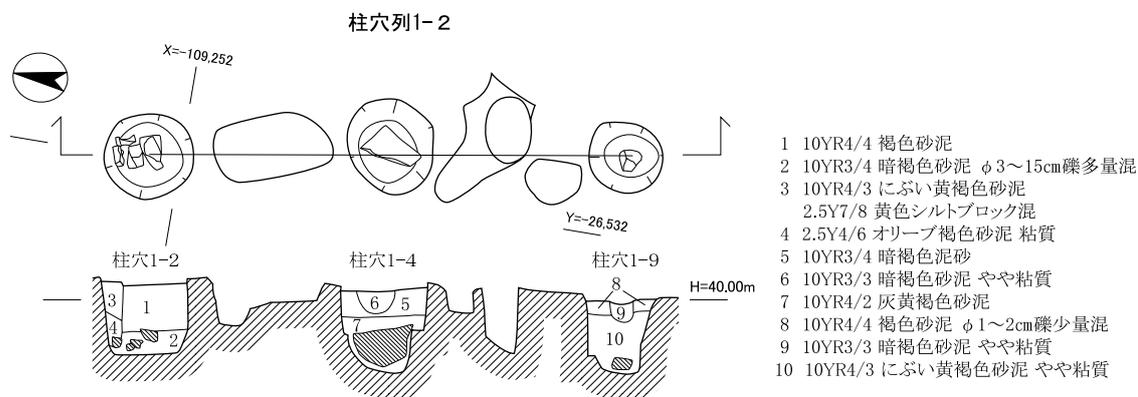


図14 柱穴列1-2・1-3実測図 (1:50)

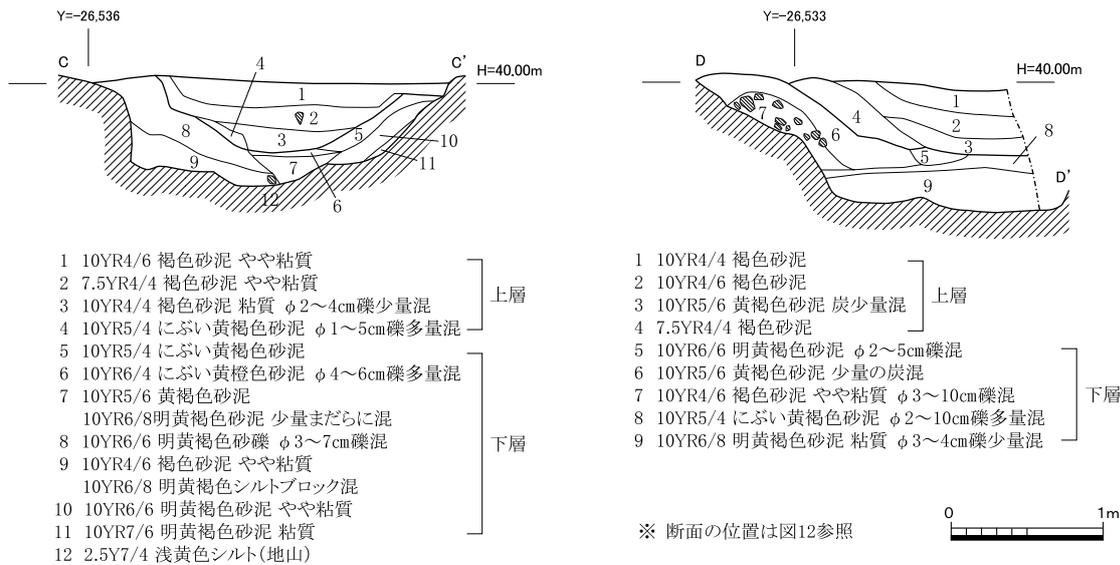


図15 溝1-30断面図(1:50)

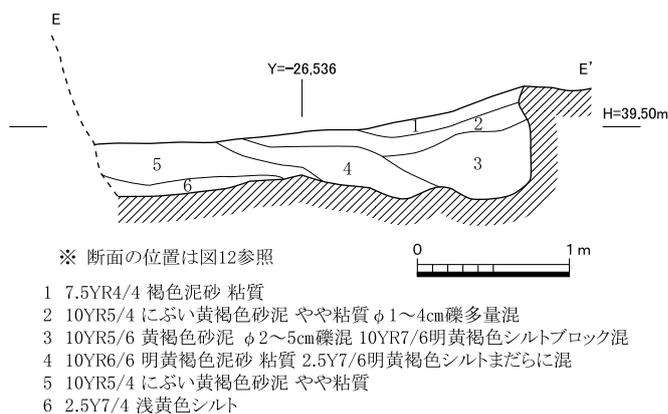


図16 土坑1-35断面図(1:50)

出長3.5mを確認した。南は調査区外へと延長する。溝1-30廃絶後の耕作に伴う溝の可能性ある。室町時代の遺物が少量出土した。

溝1-30(図15) 調査区中央で検出した、最大東西幅2.5m、検出長約9mで深さ0.7~0.8mの北北西から南南東方向の溝である。北と南は調査区外に延長する。2区の溝に延長する可能性がある。また、この遺構は溝として

掘削したが、東西両側が袋状に地山を抉る状態であることから、土取り土坑の可能性ある。とくに溝の北部は顕著である。出土遺物から室町時代後半である。

落込1-8 調査区北東部で検出した。東西幅1m以上、南北検出長約3m、西肩部のみの検出で、東へ緩やかに下がる。出土遺物は微量であるため時期の確定はできないが、柱穴列1-3はこの落込を整地したあとに造られている。

土坑1-35(図16) 調査区南部で検出した、東西3m以上、南北7m以上の不定形の大規模な土坑である。粘質土の地山から掘りこむことや形状などから土取り穴であると思われる。土坑の中央に既存管があるため、すべてを掘削できなかったが、出土遺物は平安時代から室町時代のものがある。

柱穴1-23 調査区西部で検出した、東西0.6m、南北0.5m、深さ0.34mのほぼ円形の柱穴である。平安時代の須恵器壺の底部が出土した。

(2) 2区の遺構

2区は3区画に分割した調査となった。調査区は東西約11m、南北14.2mの方形である。北半と南半では遺構の残存状態が大きく異なる。

基本層序は、地表下0.4mまで現代盛土、0.6mまで江戸時代の整地層、0.7mまで中世の整地層、それ以下、2.5Y6/4~5/6にぶい黄褐色粘質土の地山である。

北半はほぼ地山まで削平されており、すべての遺構を地山面で検出した。また、旧建物の基礎などによる攪乱も多い。それに対し南半は近世層がほぼ削平されていたが、中世の整地層が残存す



図17 2区第1面平面図 (1:100)

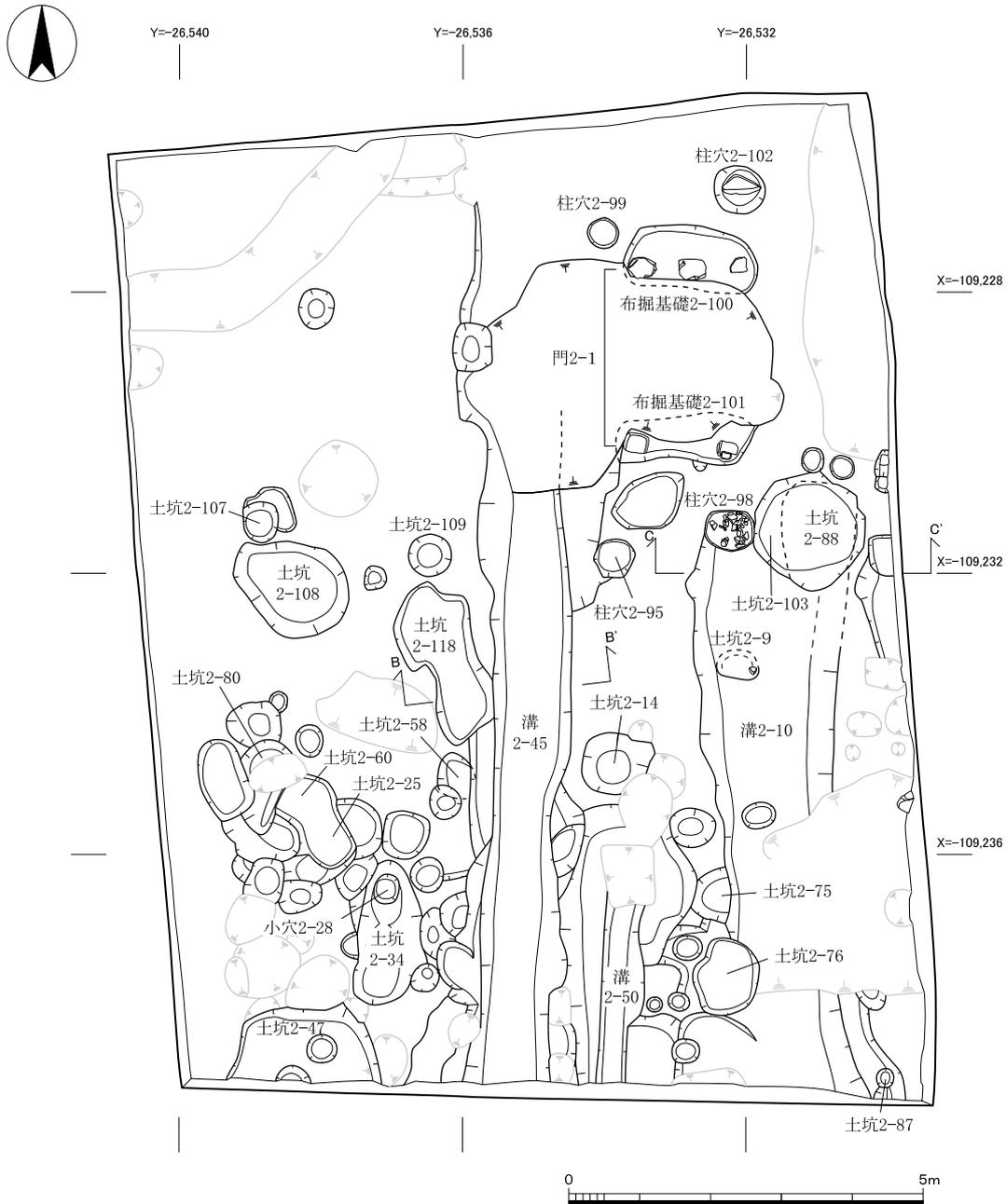


図18 2区第2面平面図 (1 : 100)

る。南半は中世の整地面を第1面、地山面を第2面として調査を行った。平安時代から鎌倉時代の遺物を含む遺構を若干検出したが、その中心は室町時代の遺構である。また整地層に平安時代の遺物の混入がみられることから、中世以降、平安時代の遺構が破壊されたと思われる。主な遺構は、北から連続する南北溝、門跡などで、城北街道に沿って築造されている。

1) 第1面 (図17、図版2-1)

第1面は近世・中世の整地層を除去した面で検出した、室町時代から江戸時代の遺構である。小規模な柱穴、小穴、土取り穴と思われる大小の土坑を多数、また南北方向の溝、門跡を検出した。柱穴は遺構が複数切りあった状況で、建物としては捉えられなかった。

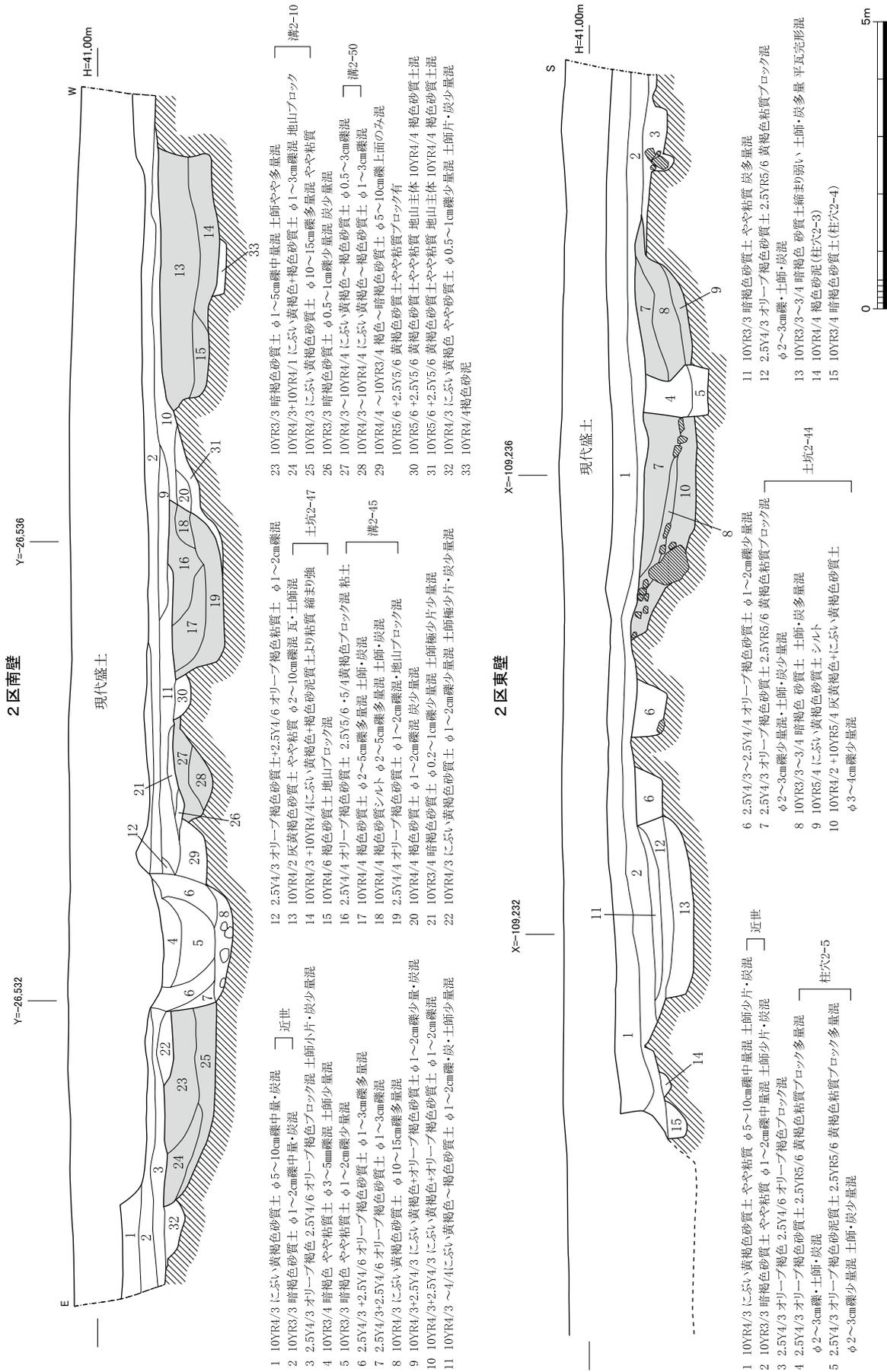
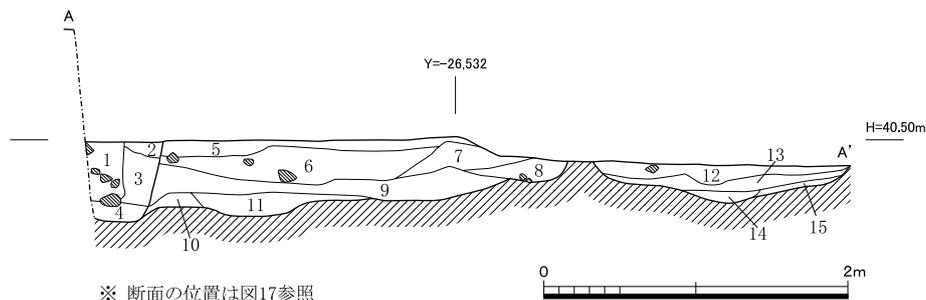


図19 2区南壁・東壁断面図 (1 : 50)

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 φ5~10cm礫中量・炭混
- 2 10YR3/3 暗褐色砂質土 φ1~2cm礫中量・炭混
- 3 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 φ1~2cm礫中量・炭混
- 4 10YR3/4 暗褐色 やや粘質土 φ3~5mm礫少量混
- 5 10YR3/3 暗褐色 やや粘質土 φ1~2cm礫少量混
- 6 2.5Y4/3 +2.5Y4/6 オリープ褐色砂質土 φ1~3cm礫多量混
- 7 2.5Y4/3 +2.5Y4/6 オリープ褐色砂質土 φ1~3cm礫混
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 φ10~15cm礫多量混
- 9 10YR4/3 +2.5Y4/3 にぶい黄褐色+オリープ褐色砂質土 φ1~2cm礫混
- 10 10YR4/3 +2.5Y4/3 にぶい黄褐色+オリープ褐色砂質土 φ1~2cm礫混
- 11 10YR4/3 ~4/4 にぶい黄褐色~褐色砂質土 φ1~2cm礫・炭・土師少量混
- 12 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 φ2.5Y5/6 オリープ褐色粘質土 φ1~2cm礫混
- 13 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 やや粘質 φ2~10cm礫混 瓦・土師混
- 14 10YR4/3 +10YR4/4 にぶい黄褐色+褐色砂質土 粘り強
- 15 10YR4/6 褐色砂質土 地山ブロック混
- 16 2.5Y4/4 オリープ褐色砂質土 2.5Y5/6 +5/4黄褐色ブロック混 粘土
- 17 10YR4/4 褐色砂質土 φ2~5cm礫多量混 土師・炭混
- 18 10YR4/4 褐色砂質シルト φ2~5cm礫多量混 土師・炭混
- 19 2.5Y4/4 オリープ褐色砂質土 φ1~2cm礫混 地山ブロック混
- 20 10YR4/4 褐色砂質土 φ1~2cm礫混 炭少量混
- 21 10YR3/4 暗褐色砂質土 φ0.2~1cm礫少量混 土師極少片少量混
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色~褐色砂質土 φ1~2cm礫少量混 土師極少片・炭少量混
- 23 10YR3/3 暗褐色砂質土 φ1~5cm礫中量混 土師やや多量混
- 24 10YR4/3 +10YR4/1 にぶい黄褐色+褐色砂質土 φ1~3cm礫混 地山ブロック
- 25 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 φ10~15cm礫多量混 やや粘質
- 26 10YR3/3 暗褐色砂質土 φ0.5~1cm礫少量混 炭少量混
- 27 10YR4/3 ~10YR4/4 にぶい黄褐色~褐色砂質土 φ0.5~3cm礫混
- 28 10YR4/3 ~10YR4/4 褐色~暗褐色砂質土 φ1~3cm礫混
- 29 10YR4/4 ~10YR3/4 褐色~暗褐色砂質土 φ5~10cm礫上面のみ混
- 30 10YR5/6 +2.5Y5/6 黄褐色砂質土 やや粘質 地山主体 10YR4/4 褐色砂質土混
- 31 10YR5/6 +2.5Y5/6 黄褐色砂質土 やや粘質 地山主体 10YR4/4 褐色砂質土混
- 32 10YR4/3 にぶい黄褐色 やや砂質土 φ0.5~1cm礫少量混 土師片・炭少量混
- 33 10YR4/4 褐色砂混

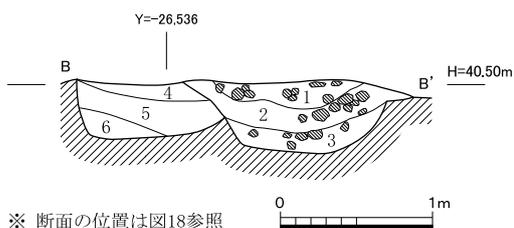
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 やや粘質 φ5~10cm礫中量混 土師少片・炭混
- 2 10YR3/3 暗褐色砂質土 やや粘質 φ1~2cm礫中量混 土師少片・炭混
- 3 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 2.5YR5/6 黄褐色粘質ブロック混 φ2~3cm礫・土師・炭混
- 4 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 2.5YR5/6 黄褐色粘質ブロック混 φ2~3cm礫・土師・炭混
- 5 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 2.5YR5/6 黄褐色粘質ブロック多量混 φ2~3cm礫・土師・炭混
- 6 2.5Y4/3 ~2.5Y4/4 オリープ褐色砂質土 φ1~2cm礫少量混
- 7 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 2.5YR5/6 黄褐色粘質ブロック混 φ2~3cm礫・土師・炭少量混
- 8 10YR3/3 ~3/4 暗褐色 砂質土 土師・炭多量混
- 9 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土シルト
- 10 10YR4/2 +10YR5/4 灰黄褐色+にぶい黄褐色砂質土 φ3~4cm礫少量混
- 11 10YR3/3 暗褐色砂質土 やや粘質 炭多量混
- 12 2.5Y4/3 オリープ褐色砂質土 2.5YR5/6 黄褐色粘質ブロック混 φ2~3cm礫・土師・炭混
- 13 10YR3/3 ~3/4 暗褐色 砂質土 粘り強、土師・炭多量 平瓦形混
- 14 10YR4/4 褐色砂混 (柱穴2-3)
- 15 10YR3/4 暗褐色砂質土 (柱穴2-4)



※ 断面の位置は図17参照

- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 10YR5/3粘質土 ブロック少量混
- 2 10YR6/4+3/4 にぶい黄橙粘質土+暗褐色砂質土
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 10YR5/6 黄褐色粘質土(地山?)ブロック状混入
- 4 10YR3/4 褐色砂泥
- 5 10YR4/6 褐色砂質土
- 6 10YR4/6 褐色砂質土
- 7 10YR6/8明黄褐色粘質土+2.5Y7/6 明黄褐色粘質土 ブロック多数 φ3~5cm礫少量混
- 8 10YR4/4 褐色砂質土
- 9 10YR6/8明黄褐色粘質土+2.5Y7/6 明黄褐色粘質土 ブロック5より少量 φ5~20cm礫多量混
- 10 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 12 7.5YR4/3 褐色砂泥 炭含むφ1~2cm礫少量混
- 13 10YR4/4 褐色砂泥
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 15 10YR4/4 褐色砂泥
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 10YR6/6明黄褐色砂泥ブロック混
- 17 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 18 10YR4/4 褐色砂泥
- 19 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 20 10YR5/5 にぶい黄褐色砂泥 10YR6/6明黄褐色砂泥ブロック混

図20 土坑2-44断面図 (1:50)



※ 断面の位置は図18参照

- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土 2.5Y5/6・4/5黄褐色ブロック混 粘質
- 2 10YR4/4 褐色砂質土 φ2~5cm礫多量混 土師・炭少量混
- 3 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土 φ1~2cm礫多量混 地山ブロック少量混
- 4 10YR4/4~4/6 褐色砂質土 φ2~3cm礫中量混 炭少量混
- 5 10YR4/3 ~4/4にぶい黄褐色~褐色砂質土 φ1~2cm礫多量混
- 6 5に地山ブロック多量混 φ2~5cm礫中量混 土師器片混

図21 溝2-45断面図 (1:50)

土坑2-44 (図20) 調査区南東部で検出した。東は調査区外となる。東西2.7m以上、南北3.4m、深さ0.5mを確認した。不定形な土坑で、土取り穴と思われる。埋土には炭5~20cm大の礫、ブロック状の地山層などを含む。南肩部から室町時代のほぼ完形品の丸瓦が5個体出土した。その他には室町時代の土師器、輸入陶磁器などが出土

した。平安時代の土器も含まれるが、下層遺構の混入品と思われる。遺構の時期は室町時代後半と考えられる。

溝2-45 (図21) 調査区中央部で検出した南北方向の溝である。最大幅1.5m、南北12.5m以上、深さ0.4~0.5mの規模で、北部では攪乱されているため、西肩部のみの検出である。下層の遺構の一部を削平するため、出土遺物には鎌倉時代から室町時代後半のものが混入する。南北ともに調査区外へと延長される。この溝の西部と東部では遺構の様相に違いがあることから、この溝は区画溝と思われる。室町時代後半に埋没した遺構である。

整地層2-77 調査区東部中央で検出した。土取り土坑などを埋め、整地したものと思われる。緑釉陶器壺の破片が1点出土したが混入品と思われる。

整地層2-78 調査区西部で検出した。土取り土坑などを埋め、整地したものと思われる。室町時代の土器が出土した。

2) 第2面 (図18、図版2-2)

第2面は地山上面で遺構検出を行い、平安時代から鎌倉時代の土坑、溝を検出した。南北方向の溝で大半の遺構が削平されている。その他の土坑は多数が小規模な土取り穴と思われる。

門2-1 (図22、図版2-3) 調査区北東部で検出した。東西に3石の礎石をもつ布掘基礎2-100と2石が残存する布掘基礎2-101、柱穴2-102・98で構成される。検出規模は布掘基礎2-100が東西長1.9m、幅0.9m以上、深さ0.2m、南辺は現代攪乱により削平される。布掘基礎2-101は東西長1.8m以上、幅0.4m、深さ0.2mで、西辺と北辺を削平され、中央の礎石を欠く。ともに

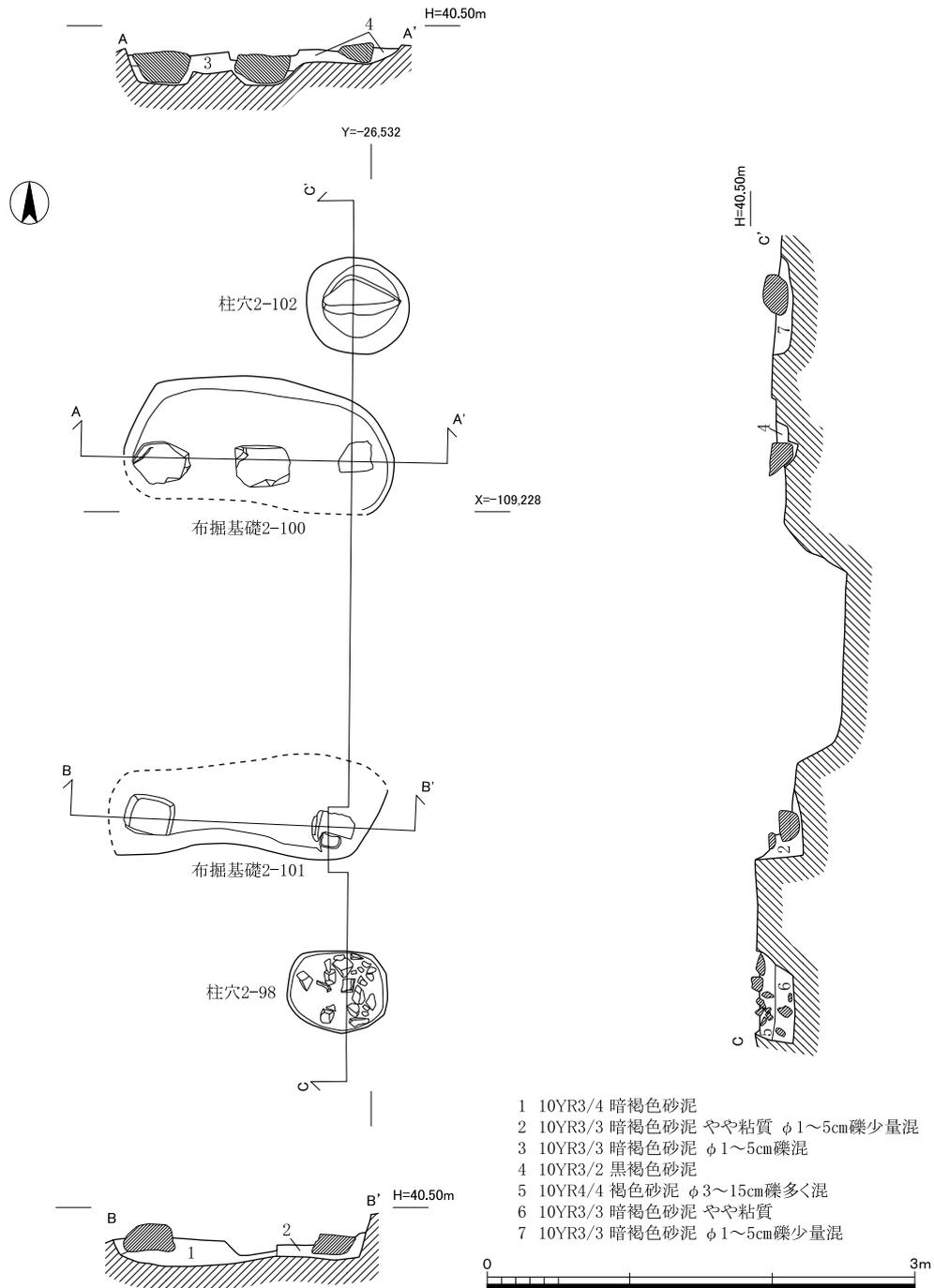


図22 門2-1 実測図 (1:50)

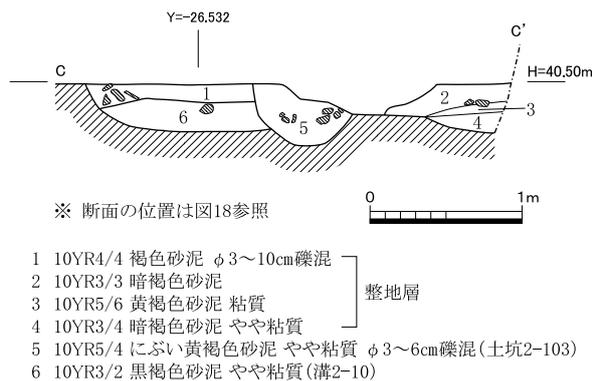


図23 溝2-10断面図(1:50)

地山を掘り込んでいる。中央の礎石が親柱で、前後が控え柱の礎石となる。いずれも東端の礎石が小さい。柱間は約2.6mで門跡とみられる。出土遺物は小片であるため、出土遺物からは時期の判断は困難であるが、布掘り基礎による柱穴が室町時代に見られる特徴であることから、その時期のものと思われる。

溝2-10(図23) 調査区東部で検出した

南北方向の溝で、東西幅1.8m、南北長7.5m以上、深さ0.2mの規模で、南は調査区外へ延長される。北端は門2-1の南側で検出されるが、上部は後世の遺構に削平されているため、詳細は不明である。

土坑2-14 調査区中央西寄りで検出した、東西0.9m、南北0.8m、深さ0.2mのやや不定形な土坑である。上部は後世の遺構に削平されている。平安時代の遺物を含む。

土坑2-34 調査区南西部で検出した東西1.0m、南北2.2mの不定形な土坑である。上面は5~20cm大の礫を多数含む土層で、下層には小規模な土取り土坑が重複する。鎌倉時代の遺物が出土した。

土坑2-47 調査区南西部で検出した。東西2.1m、南北1.2m以上、深さ0.5mの規模である。南部は調査区外となる。断面の形状は下層部で地山を抉りこむ。埋土は土層の締まりがなく、下層では地山ブロックを含む。土取り穴と思われる。鎌倉時代の遺物が出土した。

土坑2-58 調査区中央寄りで検出した。大半を後世の遺構により削平されており、東西0.5m、南北0.8m、深さ0.15mを確認したにとどまる。平安時代末期から鎌倉時代の土師器皿が積み重なった状態で出土した。

土坑2-60 調査区南西部で検出した。東西0.8m、南北0.6m、深さ0.24mの楕円形の土坑である。鎌倉時代中頃の土器が出土した。

土坑2-25 調査区南西部で検出した。東西0.6m、南北0.8m、深さ0.38mの楕円形の土坑である。ここからは飛鳥時代の軒丸瓦片が出土した。

土坑2-76 調査区南東部で検出した。東西0.95m、南北1.1m、深さ0.1mの不定形な土坑で、上部は後世の遺構に削平されている。鎌倉時代前半の遺物が出土した。

土坑2-80 調査区南西部で検出した。上部は後世の遺構に削平されているため、遺構の規模は不明である。鎌倉時代前半の土師器がまとまって出土した。

土坑2-75 調査区南東部で検出した。南北0.75m、東西は溝2-10に削平される。平安時代中期前半の土師器が出土した。

土坑2-108 調査区西部で検出した。長形1.7m、短径1.3m、深さ0.1mの浅い土坑である。砥石が出土した。

(3) 3区南の遺構 (図24、図版3-1)

3区は北と南に分割して調査した。3区南は東西約6m、南北約9m、方形の調査区である。

基本層序は現地表面の標高は41.2m前後であり、北から南になだらかに低くなる。東壁では、上面よりコンクリート舗装、盛土が約0.2m、近世の層が約0.1m、中世から近世層が約0.05m、以下地山となる。地山は、調査区南東部では黄褐色砂泥、その他は砂礫層である。この面で遺構を検出した。遺構面の標高は、40.7~40.9mである。

中世から江戸時代の遺構を検出した。なかでも北から連続し、西へ流れを変える溝、礎石をもつ柱穴を多数検出したが、建物としては捉えられなかった。また、江戸時代の井戸を検出した。

井戸3-15 (図25) 調査区北部中央で検出した。規模は径約1.0m、深さ約2.2m、ほぼ円形の素掘り井戸である。埋土は深さ約0.8mまでに粘質層、粘土層、瓦層、礫層、瓦と粘質層が西から東へ傾斜して堆積している。上層には沈下防止のためと考えられる粘土層が厚さ最大約0.3mあり、固く締まっている。以下、深さ約1.6mまでが礫が多く混じる粘質層やシルト層、深さ約2.0mまで

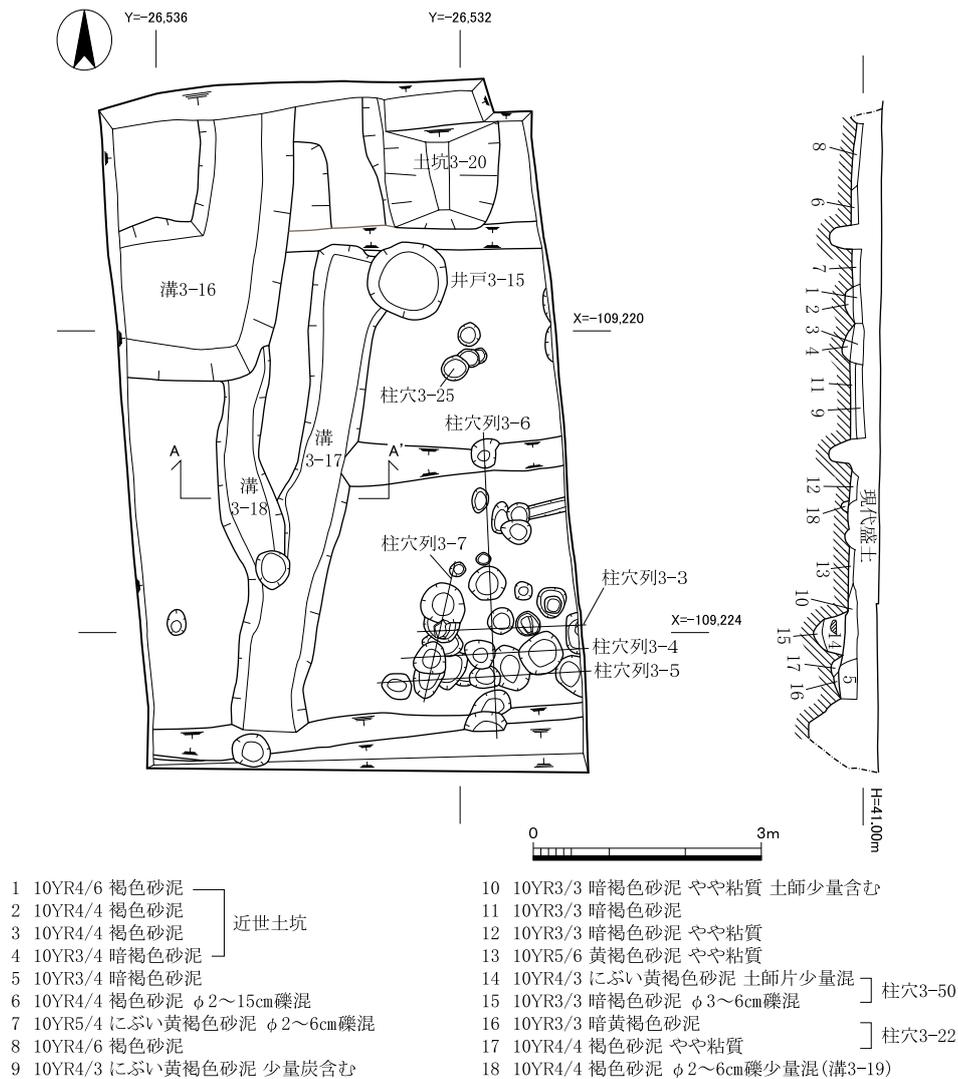


図24 3区南実測図 (1:100)

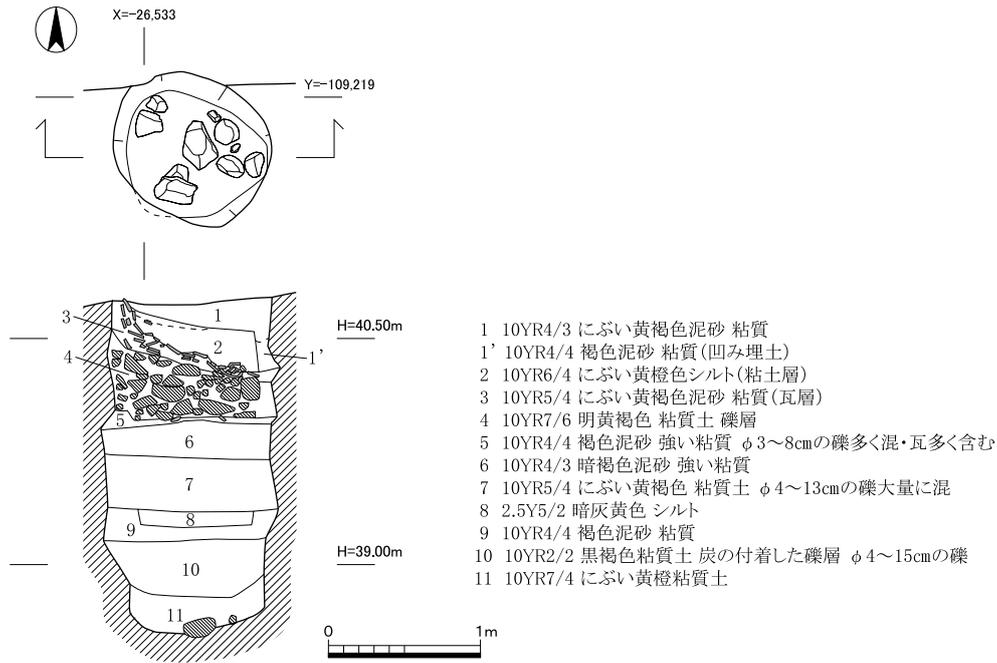


図25 井戸3-15実測図 (1:50)

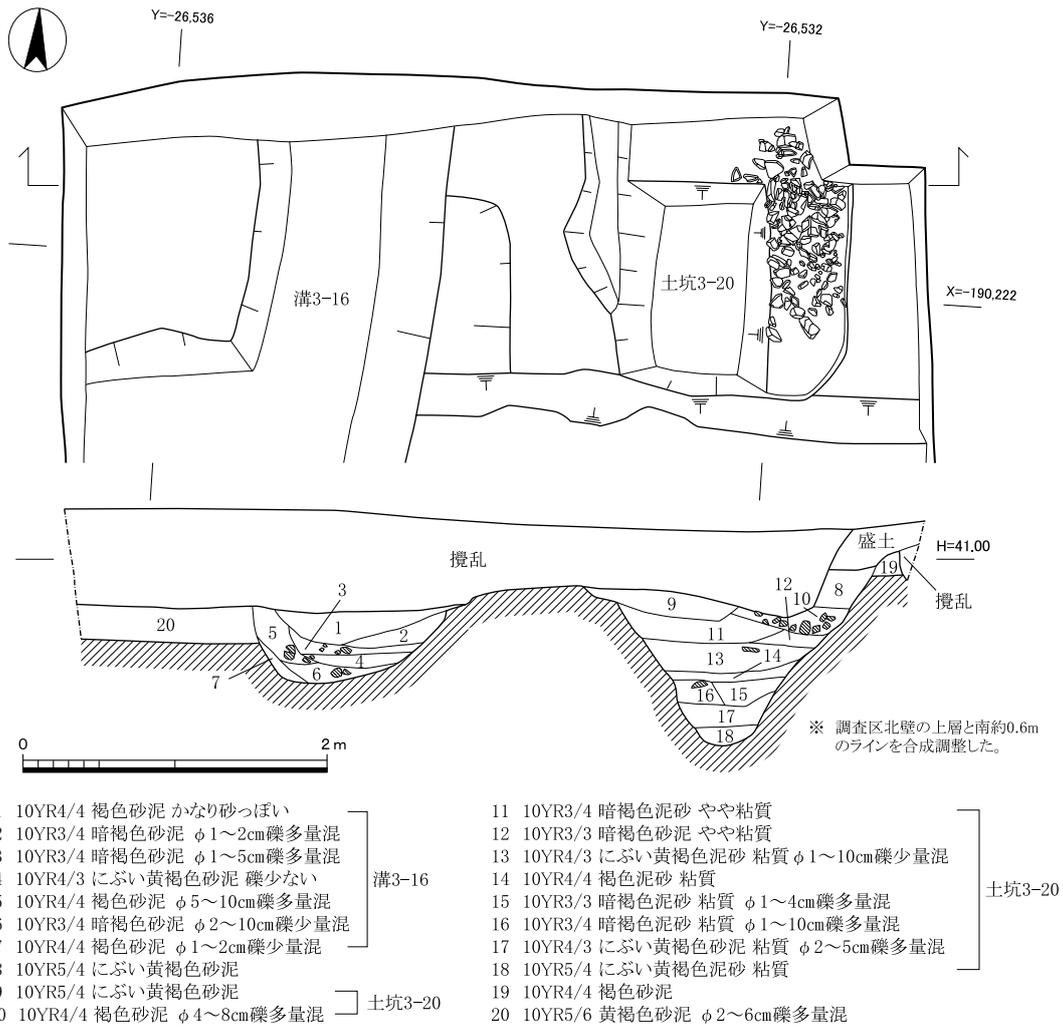


図26 溝3-16・土坑3-20実測図 (1:50)

が炭の付着した径0.1m前後の礫層、深さ約2.2mまでが粘質層であり、最下層では径0.05～0.15mの礫が散在する状態で検出された。さらに下を断ち割ったところ、深さ約2.6mまでは地山の灰褐色粘土層が続いている。出土遺物から廃棄年代は江戸時代前期である。

土坑3-20 (図26) 調査区北部東側で検出した。南は井戸3-15直前で止まり、北は調査区外に延びるため、土坑としたが溝あるいは堀の可能性はある。検出規模は東西1.5～1.8m、南北1.7m以上、深さ約1.2m、断面形はV字状である。東側の土層には径0.1m前後の礫層(図26)を検出したが性格は不明である。埋土は上層が砂泥層、下層が粘質の泥砂層である。時期は出土遺物から室町時代後期である。

溝3-16 (図26) 調査区西側で検出した。南北方向から、座標X=-109,220付近ではほぼ直角に西へ折れ、調査区外の北と西へ延びる。検出規模は南北約3.5m、東西約2m、幅は南北が約1.3m、東西が約2.2m、深さは0.5～0.6mであり、断面形は幅広いU字状である。底面の標高は、北端で40.18m、屈曲部で40.16m、西端で40.14mであり、北から西へ僅かに低くなる。埋土は主に礫まじりの砂泥層である。時期は出土遺物から室町時代後期である。

溝3-17 (図27) 調査区中央部で検出した。井戸3-15の西が北端、座標X=-108,223付近で溝18と合流する南北溝である。検出規模は長さ約4.2m、幅0.7～1.0m、深さ0.1～0.2mである。

溝3-18 (図27) 調査区中央部で検出した南北溝である。北は溝3-16により攪乱されている。検出規模は長さ約2.4m、幅0.6～0.8m、深さ0.05～0.25mである。溝3-18と合流した溝は調査区外に延び、2区溝2-45に続くと思われる。両溝の合流部から南は長さ2.3m以上、幅約2m、深さ0.2m前後である。両溝の断面形は幅広いU字状であり、埋土は主に礫混じりの砂泥である。時期は出土遺物から室町時代後期である。

柱穴列3-6 (図28) 調査区南東部で検出した南北柱穴列である。方位は座標北より西へ約2.6度振れ、現城北街道とはほぼ並行する。南北2間、柱間は1.7～1.8mであり、南に延びると考えられる。柱穴の規模は径0.4～0.6m、深さ0.3～0.4mの楕円形である。南端の2基は重複しており、造り替えの可能性はある。時期は出土遺物から室町時代と想定できる。

柱穴列3-7 (図28) 調査区南東部で検出した南北柱穴列である。方位は座標北より東へ約12度振れる。南北2間、柱間約0.6mであり、南へ延びると考えられ、前述した門2-1に連続する柱列の可能性はある。柱穴の規模は径0.4～0.6m、深さ0.1～0.3mの楕円形である。柱穴の作り変えにより複数が切り合う。時期は出土遺物から室町時代後期である。

柱穴列3-3 (図28) 調査区南東部で検出した東西柱穴列である。方位は座標東より北へ約

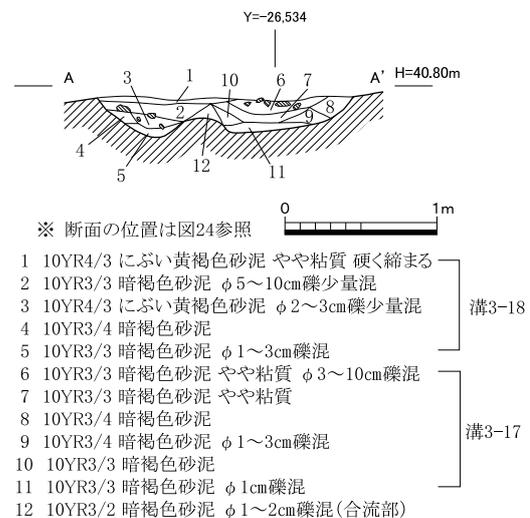
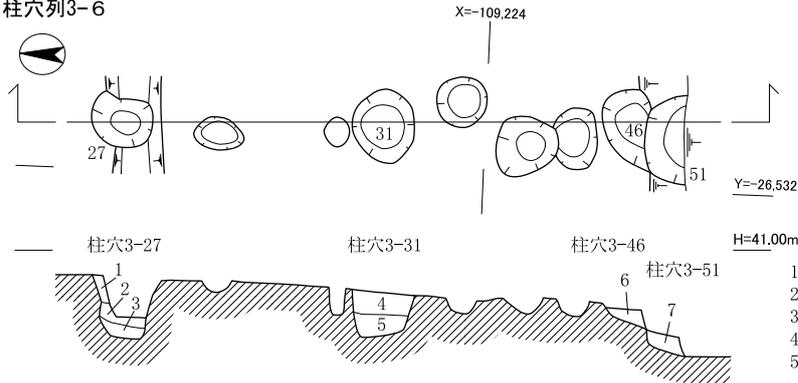


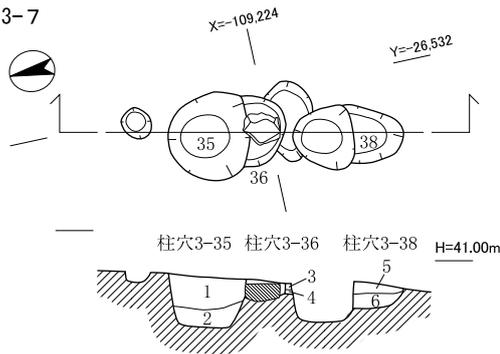
図27 溝3-17・3-18断面図 (1:50)

柱穴列3-6

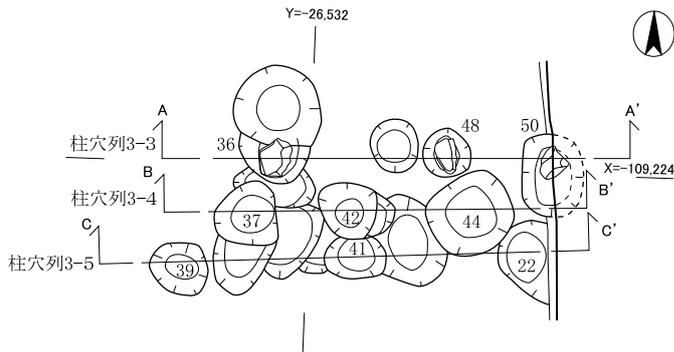


- 1 10YR7/4 にぶい黄橙砂泥 少量の炭混
- 2 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 少量の炭混
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ2~4cmの礫混
- 4 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質
- 5 10YR3/4 にぶい黄褐色 φ3~12cmの礫多量混
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ3~4cmの礫混
- 7 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥

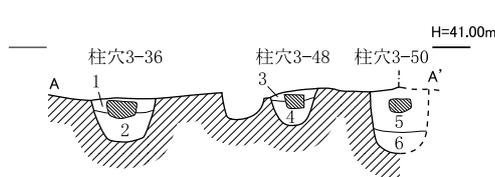
柱穴列3-7



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量混
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫混
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量混



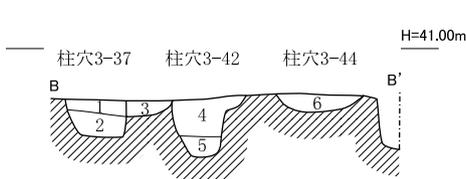
柱穴列3-3



柱穴列3-3

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ20cmの石混
- 2 10YR4/4 褐色砂泥
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ13cmの石混
- 4 10YR4/4 褐色砂泥 φ2~4cmの礫混
- 5 10YR3/3 にぶい黄褐色砂泥 粘質 土師片少量含
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ3~6cmの礫混

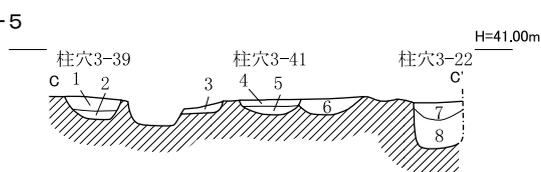
柱穴列3-4



柱穴列3-4

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質 φ1~3cmの礫少量混
- 3 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ3~5cmの礫少量混
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫多く混

柱穴列3-5



柱穴列3-5

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ3~5cmの礫混
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量混
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 8 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質



図28 柱穴列3-3~3-7実測図 (1:50)

2.1度振れ、柱穴列3-6とほぼ直交する。東西2間、柱間は東から約0.7m・1.1mである。東へ延びると考えられる。柱穴の規模は径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mの楕円形である。3基の柱穴には径0.1~0.25mの礎石が据わる。時期は出土遺物から室町時代後期である。

柱穴列3-4 (図28) 調査区南東部で検出した東西柱穴列である。方位は座標東より北へ約3.1度振れ、柱穴列3-6とほぼ直交する。東西2間、柱間は約0.7mである。東へ延びると考えられる。柱穴の規模は径0.4~0.6m、深さ0.2~0.4mの楕円形である。時期は出土遺物より室町時代後期である。

柱穴列3-5 (図28) 調査区南東部で検出した東西柱穴列である。方位は座標東より北へ約3.8度振れ、柱穴列3-6とほぼ直交する。東西2間を検出し、柱間は約1.2mである。東へ延びると考えられる。柱穴の規模は径0.4~0.6m、深さ0.1~0.3mの楕円形である。時期は検出状況から室町時代であろう。

柱穴3-25 調査区中央部東側で検出した柱穴である。規模は径約0.35m、深さ約0.25mである。この柱穴から遺物が出土し、時期は遺物から平安時代中期である。

(4) 3区北・4区の遺構

3区北と4区は検出した遺構の状況から、ここでは一つの調査区として扱う。あわせた調査区は、東西約11m、南北約13m、南西隅を大きく欠く。

基本層序は現地表面の標高は42.0m前後であり、西から東になだらかに低くなる。4区北壁西側では、上面より盛土が0.55m前後、中世~近世層が約0.6m、中世層が約0.7m、以下地山となる。地山は4区北西部隅では黄褐色砂泥、その他は砂礫層である。この面で遺構を検出した。遺構面の標高は、41.4~41.5mである。溝3-1と溝4-1より東側は整地層(厚さ0.1~0.3m)が堆積しているため、東側の地山は一段低くなり、標高は41.0m前後である。

3区北は南半が南北約8mのコンクリート基礎であり、遺構は攪乱されていたが、北半の南北約3mは遺構が残存しており、南北から西へ屈曲する溝を検出した。4区は遺構の残存状態は良好で、調査区東部で、3区北から延びる南北溝、溝から西側では柱穴、布掘基礎、集石などを検出した。両区の遺構は、溝で区画されており、一連の遺構であろう。それらの遺構を切合い関係から、第1面と第2面に分けた。

1) 第1面 (図29)

溝3-1・3-2、溝4-1 (図32、図版3-2) 調査区東側で北から南へ延び、座標X=-109,207辺りでほぼ直角に折れて西へ延びる溝である。北は5区の溝5-20に続く。幅は2~2.5m、深さは1.1~1.3mであり、断面形はV字状である。埋土の上層は礫混じりの砂泥層である。中層には粘質層があり、下層は礫や砂が混じり、締まりがある。中層から下層の堆積状況から滞水期と流水期があったと考えられる。また底面の標高が、4区北端で約40.35m、中程で約40.25m、屈曲部で約40.1m、3区北の中程で約40.1m、3区北の西壁で40.05mであり、北から南、東から西へ緩やかに低くなっている。また東西溝3-2の底部は、北壁に沿って一段低く掘り下げられてい

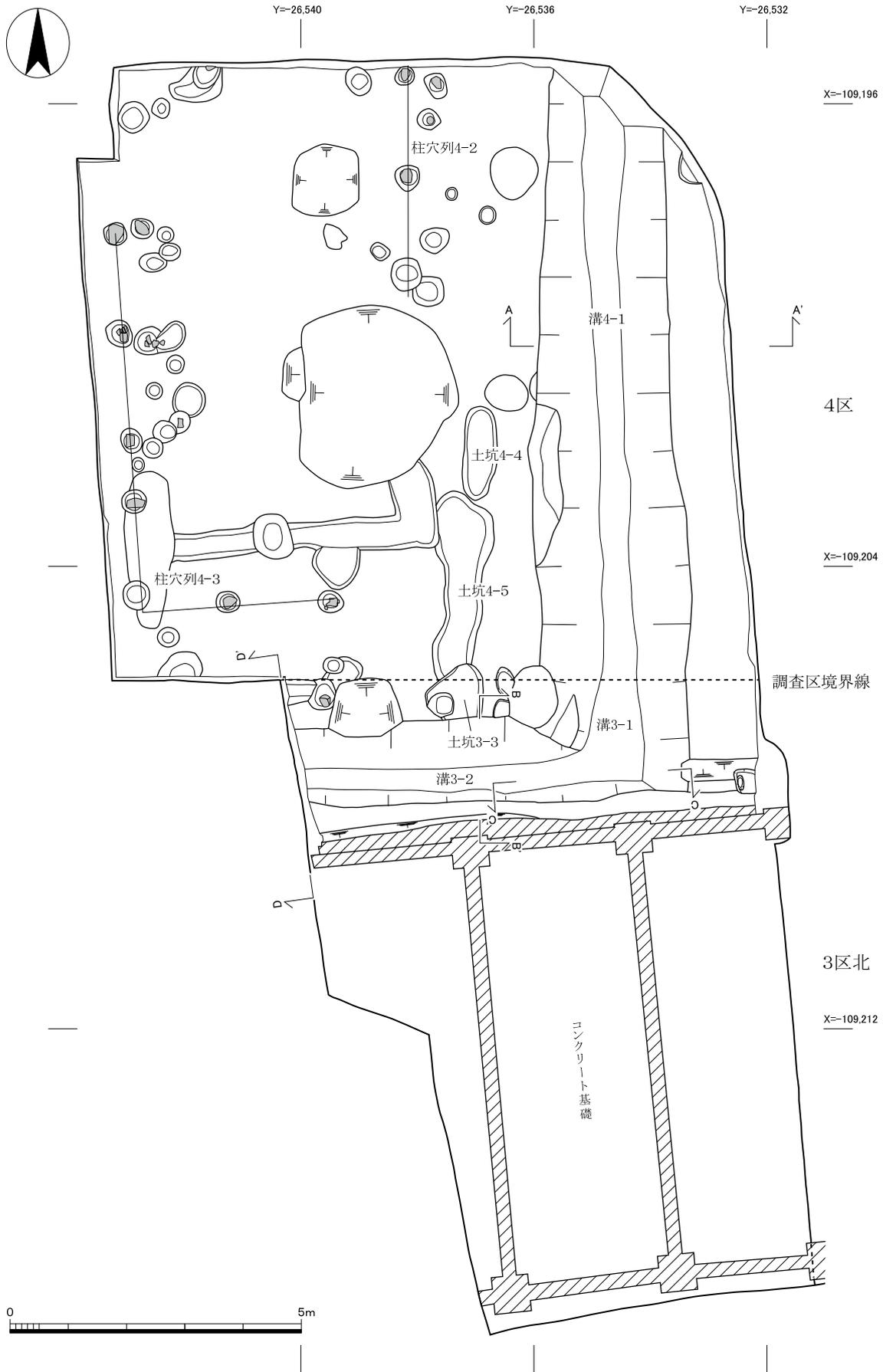


図29 3区北・4区第1面平面図 (1:100)

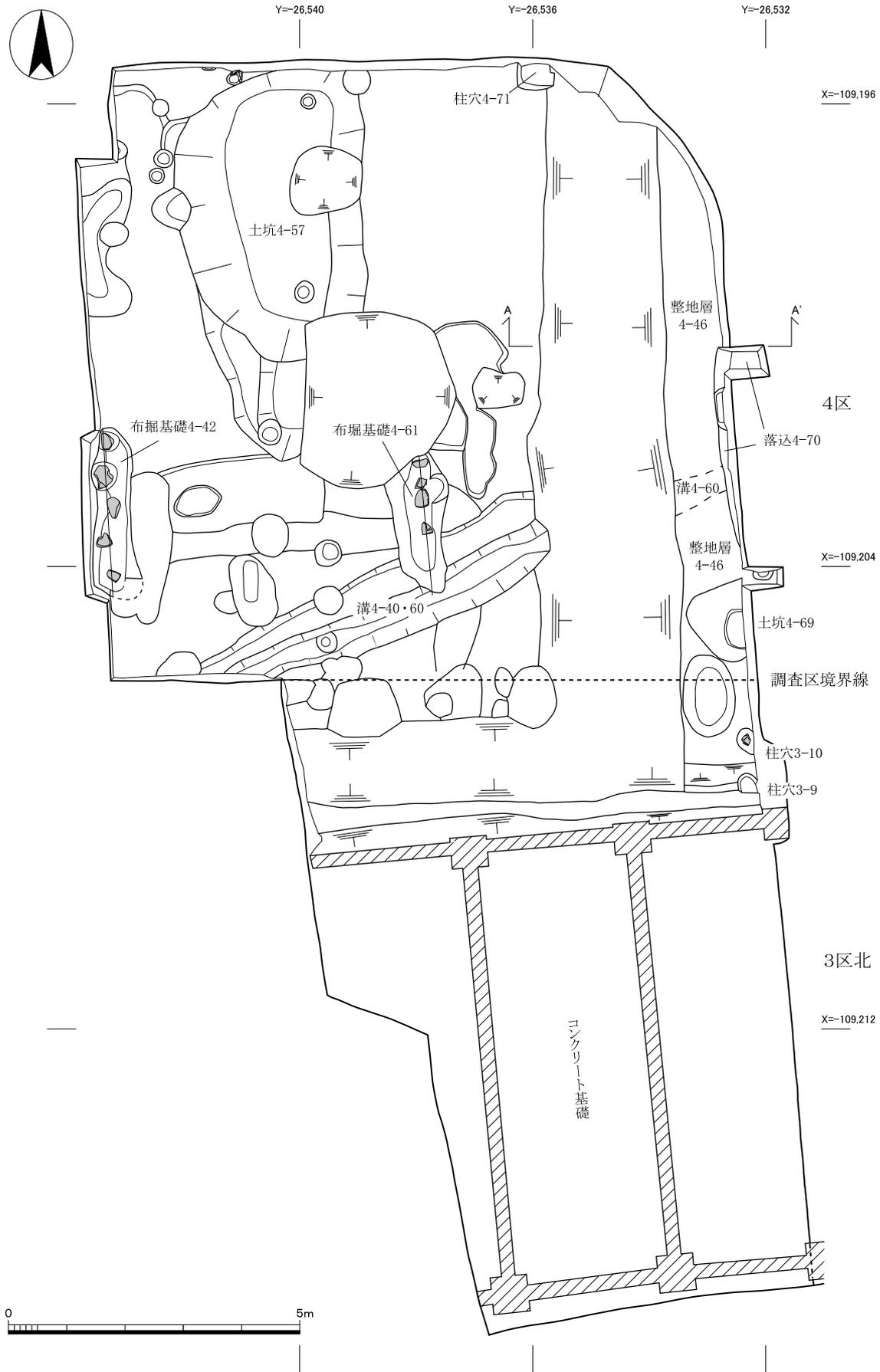


図30 3区北・4区第2面平面図 (1:100)

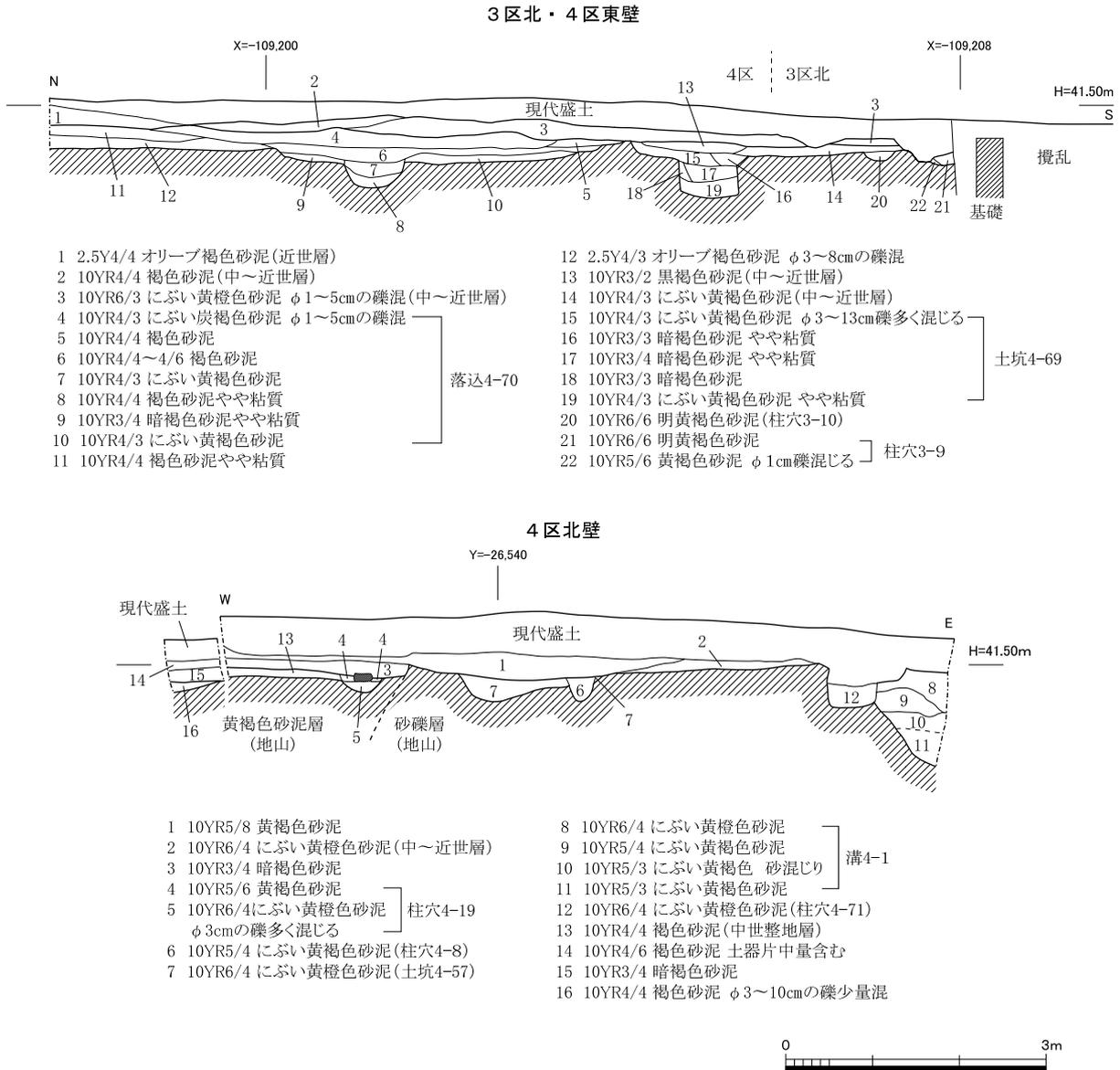


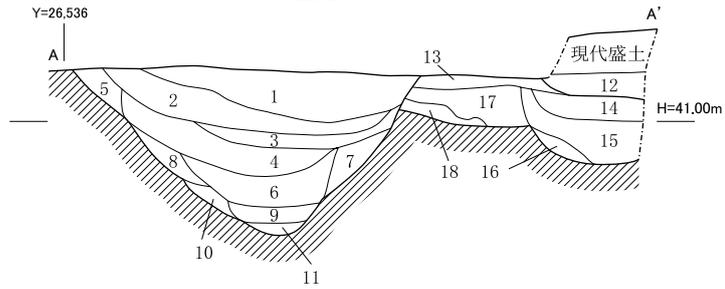
図31 3区北・4区東壁・北壁断面図 (1:80)

る。溝の再掘削の可能性がある。溝より北西部では遺構がまとまって検出されたことから、この溝は区画施設と考えられる。時期は出土遺物から室町時代後期である。この溝は第2面とした時期も存在していた可能性がある。

柱穴列4-2 (図33) 調査区北部中央で検出した南北柱穴列である。方位はほぼ真北である。南北2間を検出し、柱間は約1.8mである。北に延びると考えられる。柱穴の規模は径0.3~0.5m、深さ0.4~0.6mの楕円形である。北側の2基には底部に礎石が据えられている。礎石の大きさは径0.15~0.25mである。柵列と考えられる。時期は検出状況から室町時代であろう。

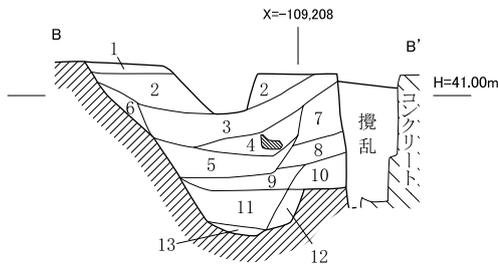
柱穴列4-3 (図33) 調査区西側で検出したL字状の柱穴列である。南北方位は座標北より西へ約4度振れ、現城北街道とほぼ並行する。規模は、南北4間(約6.3m)、東西2間(約3.3m)を検出し、柱間は南北が北から、約1.8m・1.8m・1.1m・1.6m、東西は西から約1.5m・1.8mである。柱穴の規模は径0.4m前後、深さ0.1~0.4mの円形である。南西隅を除く全ての柱穴には礎石

溝4-1、整地層4-46セクション



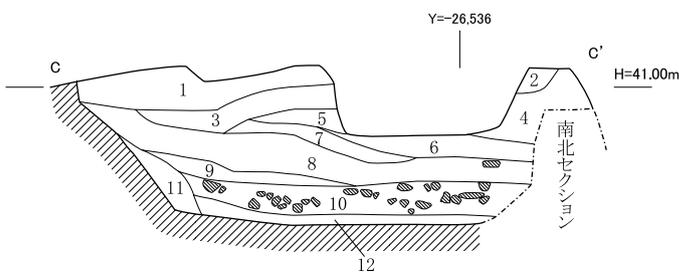
- | | | | | |
|------------------------------|------|-------------------------------|--------|--|
| 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ3~5cmの礫中量混 | 溝4-1 | 12 10YR4/4 褐色砂泥 | 落込4-70 | |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 φ5cmの礫少量混 | | 13 10YR5/6 黄褐色砂泥混 | | |
| 3 10YR4/4 褐色砂泥 | | 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫混 | | |
| 4 7.5YR4/3 褐色砂泥 φ3~8cmの礫中量混 | | 15 10YR4/4~4/6 褐色砂泥 | | |
| 5 10YR5/6 黄褐色砂泥 φ1~10cmの礫多量混 | | 16 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 | | |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 | | 17 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 | | |
| 7 10YR3/4 暗褐色砂泥 | | 18 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | | |
| 8 10YR4/4 褐色砂泥 | | | | |
| 9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 φ5cmの礫中量混 | | | | |
| 10 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ10cmの礫多量混 | | | | |
| 11 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 φ3cmの礫少量混 | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |

溝3-2 南北セクション



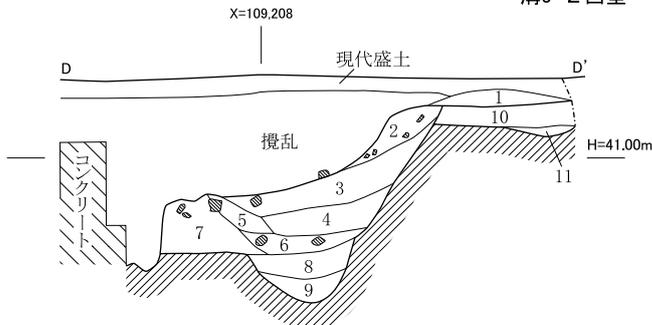
- | | |
|---|------|
| 1 10YR5/6 黄褐色砂礫 φ2~4cmの礫混 | 溝3-2 |
| 2 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 φ2~5cmの礫混 | |
| 3 7.5YR4/3 褐色砂泥 φ1~4cmの礫混 | |
| 4 10YR4/4 褐色砂泥 φ3~15cmの礫少量混 | |
| 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 | |
| 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫 φ1~4cmの礫混 | |
| 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 粘質 | |
| 8 10YR4/4 褐色泥砂 粘質 φ3~4cmの礫少量混 | |
| 9 10YR4/3 褐色泥砂 粘質 | |
| 10 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 粘質 φ3~5cmの礫多く混 | |
| 11 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質 φ2~4cmの礫少量混 少量の炭含む | |
| 12 10YR4/6 褐色砂泥 | |
| 13 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 φ3~5cmの礫多く混 | |

溝3-1・3-2 合流部東西セクション



- | | |
|-------------------------------------|----------|
| 1 10YR4/4 褐色砂泥 φ2~4cmの礫混 | 溝3-1・3-2 |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ2~5cmの礫多く混 | |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ3~6cmの礫多く混 | |
| 4 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質 φ0.5~3cmの礫混 | |
| 5 10YR4/4 褐色砂泥 粘質 φ3~5cmの礫混 | |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色 やや粘質 黄褐色ブロック混 | |
| 7 10YR6/3 にぶい黄褐色 シルト | |
| 8 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~10cmの礫多く混 | |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 粘質 φ2~4cmの礫混 | |
| 10 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 粘質 φ3~10cmの礫多く混 | |
| 11 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 | |
| 12 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト φ1~2cmの礫混 | |

溝3-2 西壁



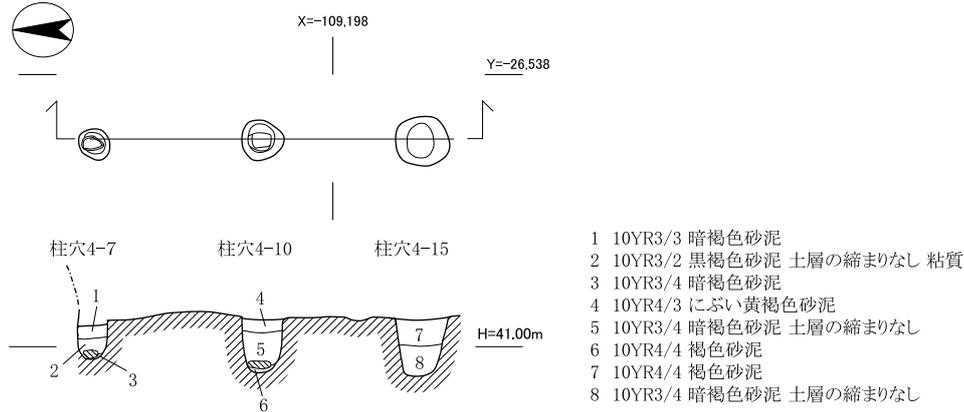
- | | |
|-------------------------------------|------|
| 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質(中~近世層) | 溝3-2 |
| 2 10YR4/4 褐色砂泥 φ2~4cmの礫少量混 | |
| 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 | |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 | |
| 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 | |
| 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~10cmの礫少量混 | |
| 7 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量混 | |
| 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 | |
| 9 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ2~3cmの礫混 粘性あり 砂混じり | |
| 10 10YR3/3 暗褐色砂泥(中世層) | |
| 11 10YR3/4 暗褐色砂泥(土坑埋土) | |

※ 断面の位置は図29参照



図32 溝3-1・3-2・4-1、整地層4-46、落込4-70断面図 (1:50)

柱穴列4-2



柱穴列4-3

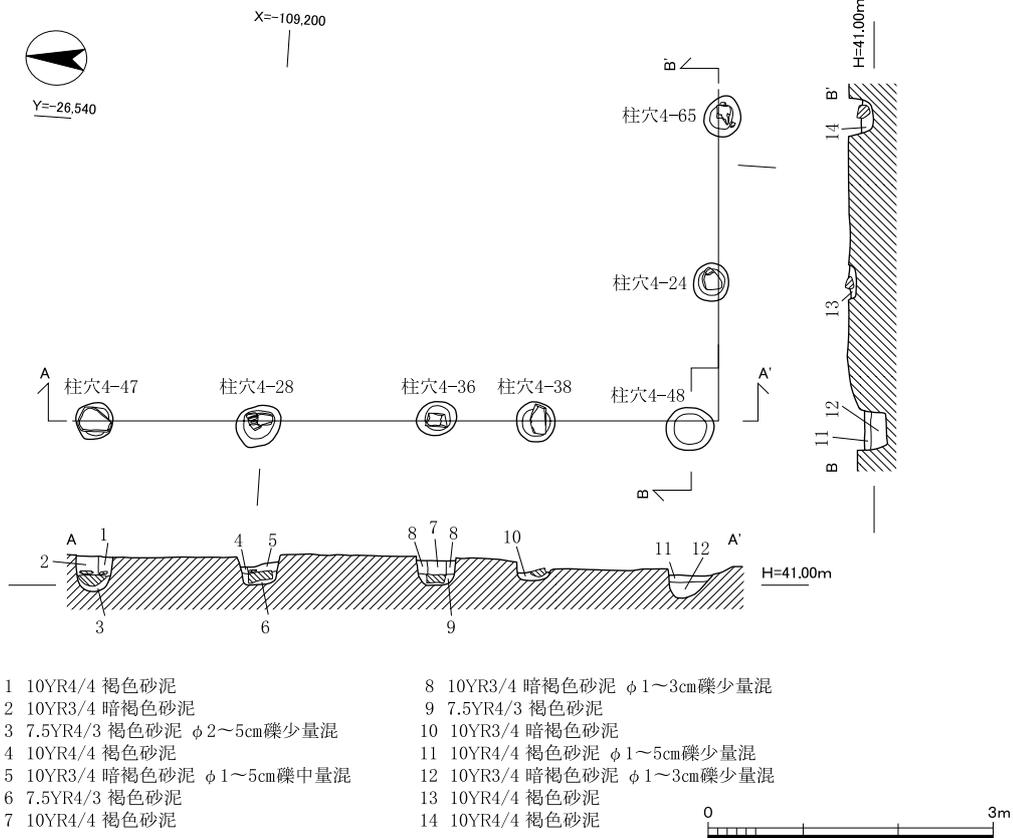
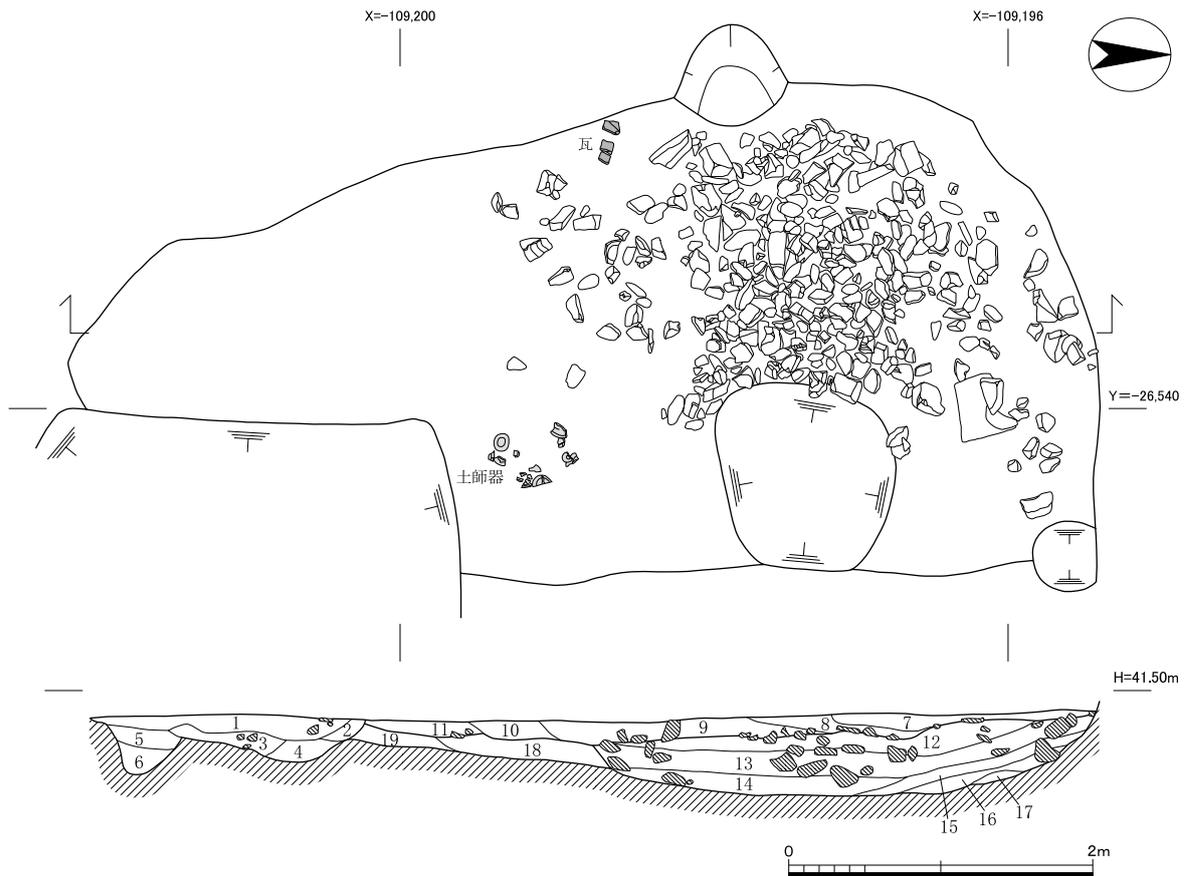


図33 柱穴列4-2・4-3実測図(1:80)

が据えられている。礎石の大きさは径0.15~0.4mであり、大小ある。この柱穴列は塀と考えられる。時期は検出状況から室町時代であろう。

2) 第2面(図30、図版3-3)

土坑4-57(図34) 調査区北部西側で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約7m、東西約3.3m、深さ約0.5mである。土坑の中央には径0.1~0.5mの大小の石が、厚さ約0.4mにわたって不規則に分布していた。土坑の南寄りからは完形の土師器皿数点が出土し、埋土には破片も多く混じっていた。南端はやや締まる埋土である。この遺構は近辺のものを廃棄した土坑と考えられる。



- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 11 7.5YR4/3 褐色砂泥 |
| 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 | 12 7.5YR4/3 褐色砂泥 |
| 3 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 | 13 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 |
| 4 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 土器片少量含む | 14 10YR2/3 黒褐色砂泥 土器片混 |
| 5 10YR4/4 褐色砂泥 | 15 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 6 10YR3/4 暗褐色砂泥 柱穴4-43 | 16 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 7 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 17 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 8 10YR5/6 黄褐色砂泥 | 18 10YR4/4 褐色砂泥 炭・土器片混 シルト |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 19 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 土器片混 シルト |
| 10 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 | |

図34 土坑4-57検出状況実測図（1：50）

出土遺物から室町時代後期である。

布掘基礎4-42（図35、図版4-1） 調査区中央部東側で検出した。方位は座標北より西へ約4度振れる。平面形は南北に細長い楕円形であり、規模は南北約3m、東西約0.7m、深さ0.5～0.7mである。底部には径0.2～0.4mの礎石が5石、南北に約0.6m間隔で並ぶが一直線にはならない。堀などの基礎と考えられる。時期は検出状況から室町時代であろう。

布掘基礎4-61（図36） 調査区中央部で検出した。方位は座標北より西へ約5.5度振れる。北は攪乱されているが平面形は南北に細長い楕円形である。規模は南北2.5m以上、東西約1m、深さ約0.4mであり、底部には径0.1～0.3mの礎石が4石、直線上に並ぶ。石1・石2・石4の間隔は約0.55mであり、石2と石3の間隔は約0.25m、石3と石4の間隔は約0.3mである。堀などの基礎と考えられる。時期は検出状況から室町時代であろう。

布掘基礎4-61は同4-42より東へ約5.4mに位置する。方位は少し異なるがほぼ並行する。これら2基はその検出状況から、同時期のものと考えられ、あるいは組み合せて建物などの一

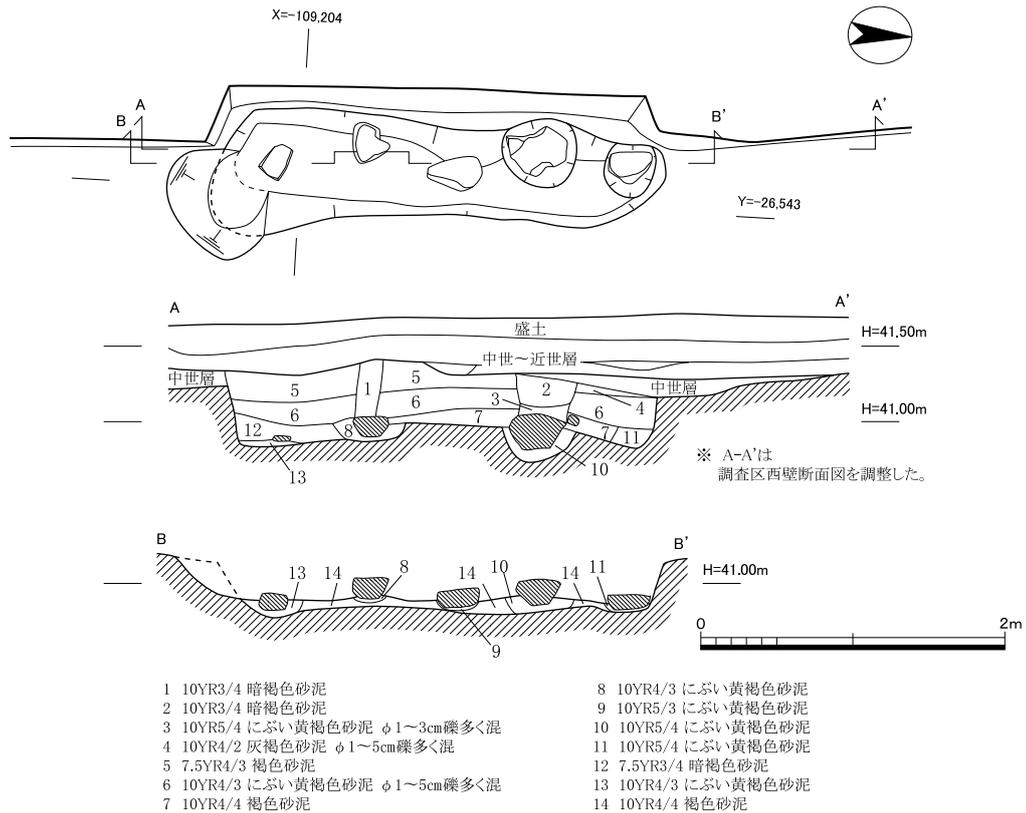


図35 布掘基礎4-42実測図 (1:50)

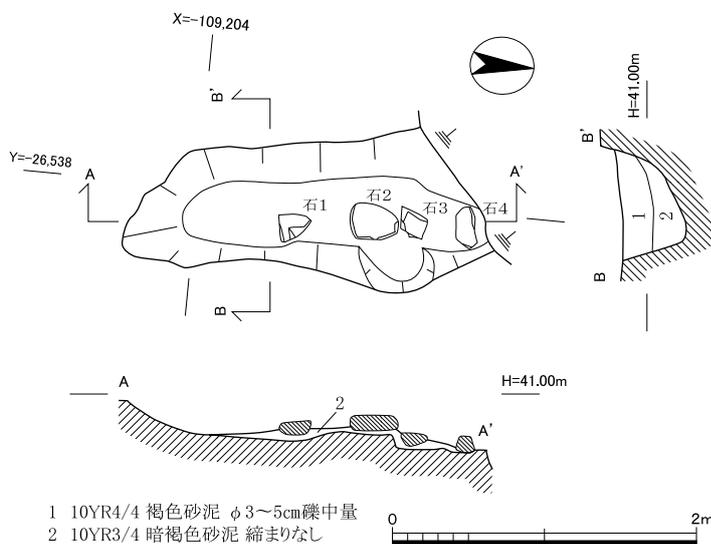


図36 布掘基礎4-61実測図 (1:50)

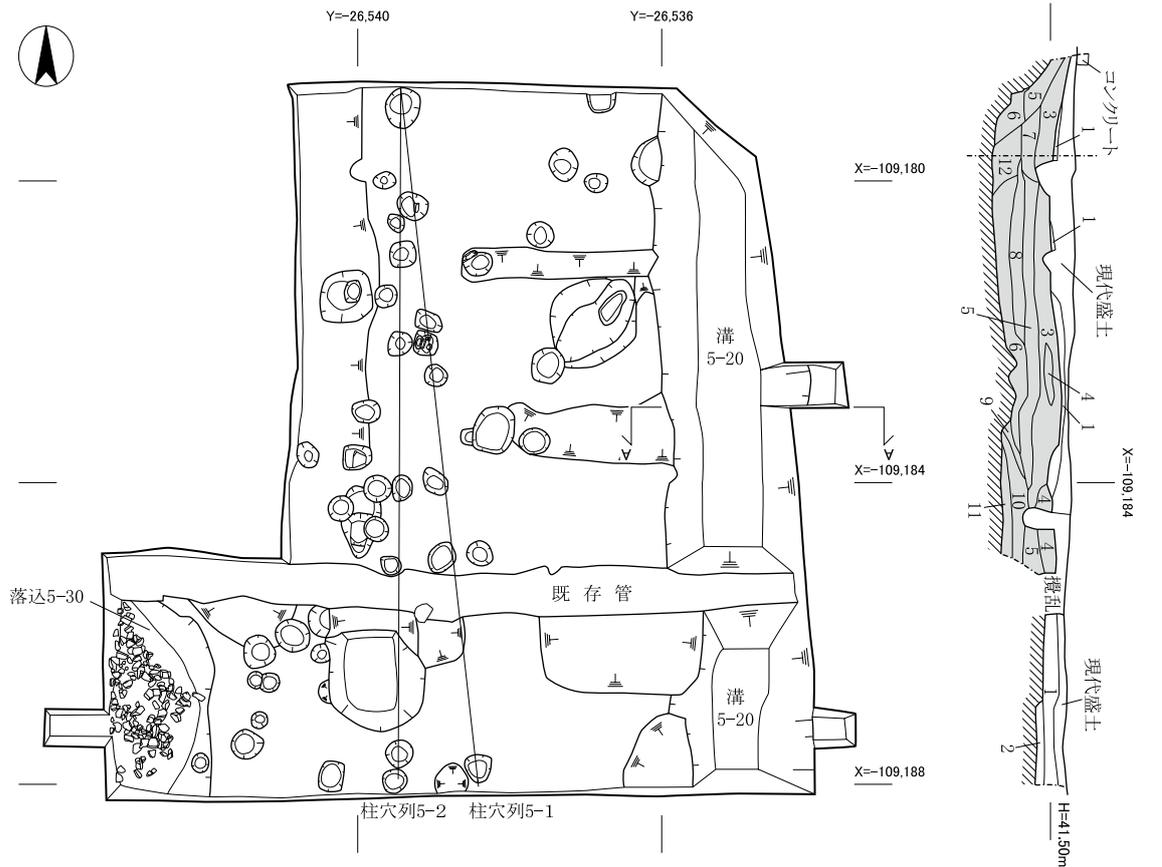
部を形成する可能性がある。

整地層4-46 調査区東端、溝4-1より東で検出した。調査区外の南北と東に広がる。検出規模は南北11m以上、東西1.2m以上、厚さ0.1~0.3mあり、南が薄くなる。遺構が掘り込む下層と全体に広がる上層に分かれる。時期は出土遺物より室町時代後期である。

土坑4-69 調査区中央部東側の整地層下層で検出した。検出規模は南北約1.5m、東西1m以上、深さ

0.2~0.7m、平面形は隅丸方形で、東は調査区外に広がる。中央は一段下がり、平面形は径約0.7mの円形と考えられる。壁は垂直に近く、深さ約0.4mを測る。何らかの貯蔵施設とも考えられる。時期は検出状況から室町時代であろう。

落込4-70 (図32) 調査区中央部東壁の整地層の下で検出した。検出規模は南北4m以上、東西0.7m以上、深さ0.2~0.7m、平面形は不明で、南北に細長く、東は調査区外に広がる。北寄りに一段下がる部分があり、その平面形は径約0.7mの円形と考えられる。深さ約0.3mを測る。性



南壁

- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 硬く締まる φ1~3cm礫中量混 土師少片多量混(近世層)
- 2 10YR4/4+10YR4/6 褐色砂質土 φ1~2cm 土師少片混
- 3 10YR4/4+10YR3/4 褐色+暗褐色砂質土 φ1~2cm礫少量・φ5~8cm礫多量混
10YR7/3 にぶい黄褐色粘土少量混
- 4 10YR3/4 暗褐色砂質土 やや粘質締まりなし 土質均一密 φ~1cm礫少量混
- 5 10YR3/4 +10YR5/4 暗褐色+にぶい黄褐色砂質土 6より粗い φ1~2cm礫少量混
- 6 10YR3/4 +10YR5/4 暗褐色+にぶい黄褐色砂質土 やや粘質 φ1~5cm礫少量混 5より密
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 φ2~3cm礫多量混
- 8 7.5YR4/3 褐色砂泥 やや粘質
- 9 7.5YR4/4 褐色砂泥 粘質
- 10 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質
- 11 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 φ2~3cm礫混
- 12 7.5YR4/2 褐色粘質土 土師小片混
- 13 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 土師小片混
- 14 10YR3/4 暗褐色砂泥 粘質土 土師小片混
- 15 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 土師小片混
- 16 7.5YR4/4 褐色砂泥 粘質土 土師小片混
- 17 2.5Y6/4+2.5Y5/6 にぶい黄褐色+黄褐色砂質シルト φ0.5~1cm礫多量混(地山)

溝5-20

落込5-30

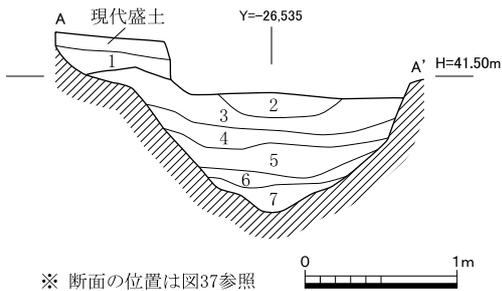
東壁

- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥硬く締まる φ1~3cm礫中量混 土師小片多量混(近世層)
- 2 10YR4/4+10YR4/6 褐色砂質土 φ1~2cm礫混 土師少片混
- 3 10YR4/4+10YR4/6 褐色+暗褐色砂質土 φ1~2cm礫少量 φ5~8cm礫多量混 10YR7/3 にぶい黄褐色粘土少量混
- 4 10YR8/1 灰白色粘土
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質土 やや粘質締まりなし 土質均一密 φ~1cm礫少量混
- 6 10YR3/4 +10YR5/4 暗褐色+にぶい黄褐色砂質土 5より粗い φ1~2cm礫少量混
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 8 7.5YR4/3 褐色砂泥 φ1~6cm礫少量混
- 9 10YR4/4 褐色粘質土
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 φ3~12cm礫少量混
- 11 10YR3/3 にぶい黄褐色粘質土
- 12 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 φ2~6cm礫混

溝5-20



図37 5区実測図 (1:100)



- ※ 断面の位置は図37参照
- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 硬く締まる φ1~3cm礫中量混(近世層)
 - 2 7.5Y8/1 灰白色砂泥+10YR8/2 灰白色砂泥
+10YR6/6 明黄褐色砂泥+5YR3/4 暗赤褐色 焼土
 - 3 10YR4/4+10YR3/4 褐色+暗褐色砂質土 φ1~2cm礫少量混
φ5~8cm礫多量混 10YR7/3 にぶい黄褐色 粘土少量混
 - 4 10YR3/4 暗褐色砂質土 やや粘質締まりなし 土質均一密
φ~1cm礫少量混
 - 5 10Y3/4+10YR5/4 暗褐色+にぶい黄褐色砂質土 4より粗い
φ1~2cm礫少量混
 - 6 10YR4/4 褐色砂泥 粘質
 - 7 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土+10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質
φ3~5cm礫多量混

図38 溝5-20断面図(1:50)

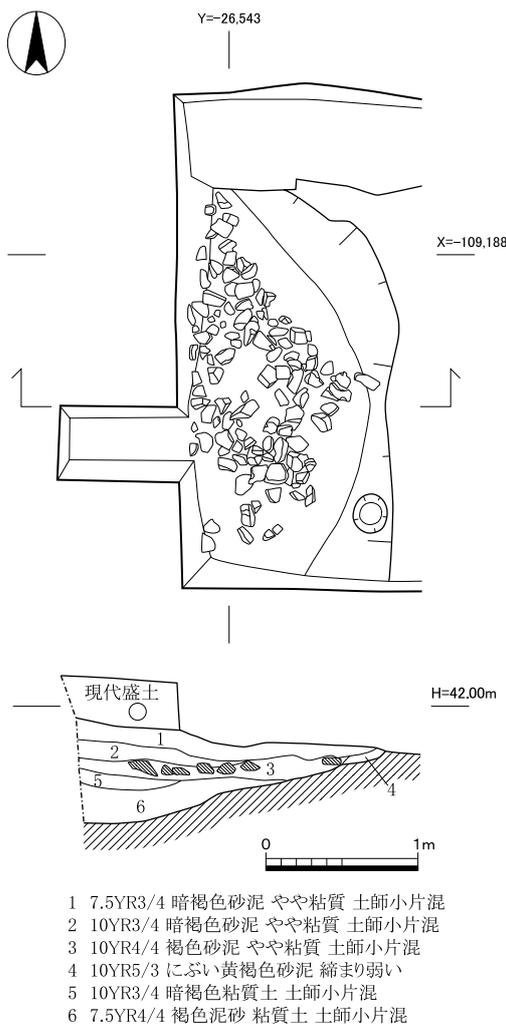


図39 落込5-30実測図(1:50)

格は不明である。時期は出土遺物から室町時代後期である。

溝4-40・4-60 調査区中央部で検出した南西から北東方向の溝であり、上層を溝40、下層を溝60として掘削した。規模は幅1.2m前後、深さは0.2~0.4mで、底面の標高は西端で41.06m、中央付近で40.98m、東端で40.97mであり、東へ緩やかに低くなる。また整地層4-46の下からわずかな凹みを検出したがこの溝の延長部であろう。溝の断面形は上層が幅広く、下層は幅0.5~0.9mの広いU字状で、南側に偏り一段深くなる。これは溝が再掘削されたものと考えられる。他の遺構との切合い関係から、この溝は調査区内ではもっとも古いもので、出土遺物から室町時代に想定できる。

(5) 5区の遺構(図37、図版4-2)

調査区の形状は南側で西へ張り出す逆L字型で、東西は北端が約6m、南端が9m、南北9mである。南部は、西から東へ緩やかに傾斜する。

基本層序は、北部では地表下0.1mまで現代盛土、0.3mまで江戸の整地層、以下、10YR 5/6黄褐色砂泥混礫の地山となる。

遺構は地山面で検出した。調査区東側には南北溝があり、溝の規模を確認するため、2箇所では拡張区を設定した。また、調査区西端でも遺構の規模を確認するため1箇所、拡張区を設定した。この調査区では室町時代の土師器を多量に含む落込、南北方向の溝、柱穴列などを検出した。

溝5-20(図38) 調査区東端で検出した。南北方向の溝で、東肩部は調査区外となるが、2箇所では拡張区を設定し東肩部を確認した。中央付近での幅1.9m、南部でも1.9mである。北・南ともに調査区外へと広がり、南は溝4-1に延長すると思われる。深さは北端・南端ともに約0.8m

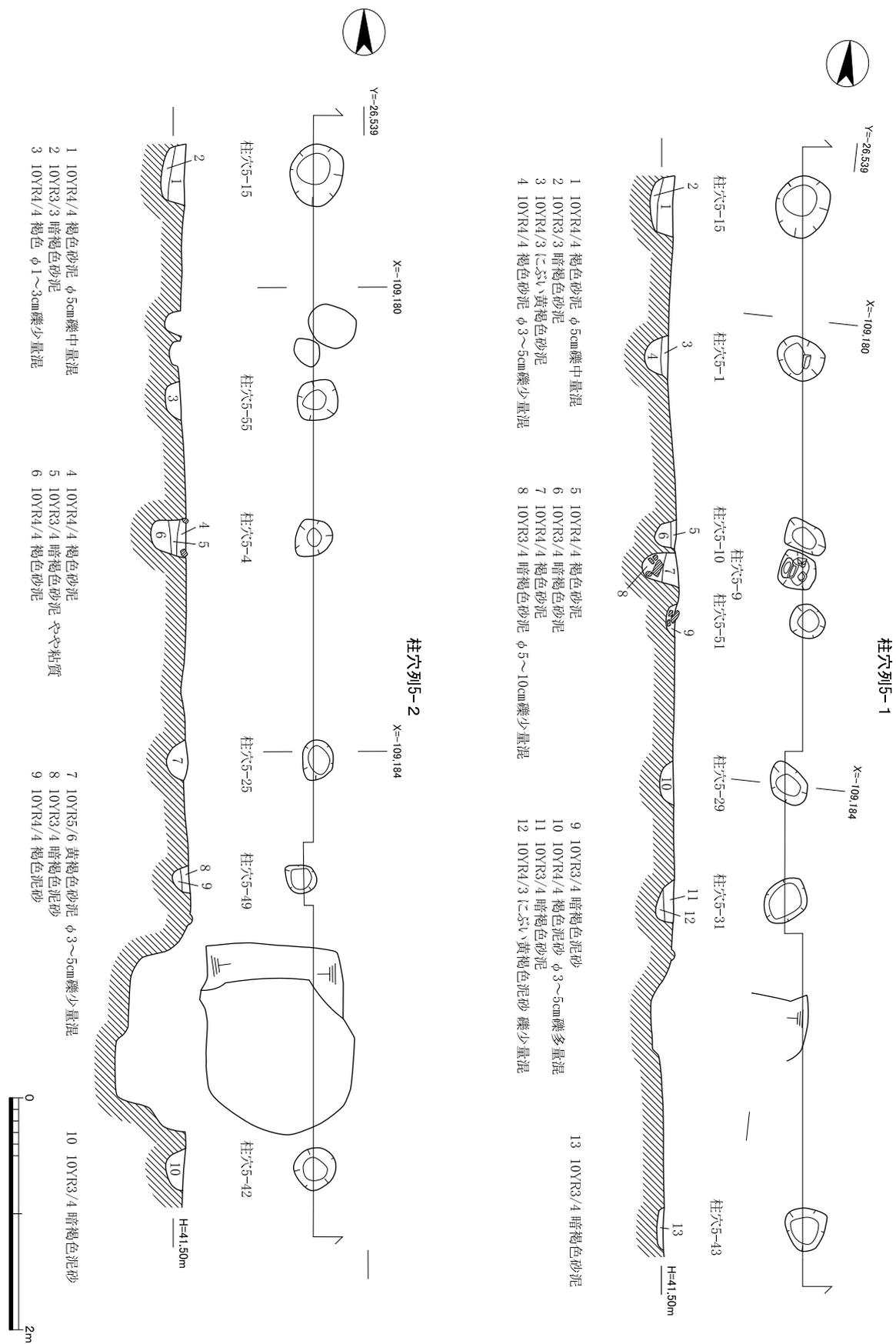


图40 柱穴列5-1・5-2实测图 (1:50)

で、底部の標高は北端部で40.75 m、南端部で40.55 mとなり、北から南方向へ下がる。断面形はV字状である。埋土の上層は礫を多量に含み、中層に灰白色粘土層が堆積する。下層は粘質土の層が堆積する。遺物は上層から江戸時代の土器が出土した。また、中層の粘土層の上部から宋銭が15枚まとまって出土した。出土遺物から室町時代の溝と思われるが、上層は江戸時代に整地される。

落込5-30(図39) 調査区南西端で検出した。東肩部付近の検出のみで、緩やかに西へ下がる。東西幅1.4 m以上、南北2.5 m以上を確認した。一部拡張区を設定し、さらに西へ下がり状況を確認したが、西肩部は検出できなかった。最深部は約0.7 mである。上層からは5~10 cm大の礫とともに土師器が多量に出土した。遺構の性格は不明であるが、室町時代後半の遺構である。

柱穴列5-1(図40) 調査区中央付近で検出した。方位は座標北より西へ6.3度振れる。柱間は北から1.3 m・1.9 m・1.9 m・1.1 m・2.9 mとなる。柵列と考えられる。出土遺物がないため、時期は確定できないが、他の遺構と同様に地山で検出した。

柱穴列5-2(図40) 調査区中央付近で検出した。方位はほぼ真北となる。柱間は北から2.0 m・1.2 m・1.9 m・1.1 m・2.5 mとなる。柵列と考えられる。出土遺物がないため、時期は確定できないが、他の遺構と同様に地山で検出した。

(6) 6区の遺構

6区は遺跡範囲が一ノ井遺跡からはずれ、常盤仲之町遺跡の北東に位置する。北端が東西長約7 m、南端が約5 m、南北長約8 mの台形の調査区である。

基本層序は、地表下0.3 mまで現代盛土、0.4 mまで江戸の整地層、0.6 mまで中世の整地層、以下、10YR5/6黄褐色砂泥の地山となる。

調査区中央から南部にかけて中世の整地層が残存し、北部は地山面まで削平されている。中世面を第1面、地山面を第2面として調査を行った。ここでは平安時代の土坑、鎌倉時代の井戸、その他柱穴群などを検出した。また土取り土坑を多数検出した。

1) 第1面(図41)

土坑6-33 調査区南東部で検出した。東西1.45 m、南北1.1 m、深さ0.11 mの土坑である。上部は削平されている。時期は出土遺物から室町時代後半である。

土坑6-45 調査区中央西端で検出した。東西2.25 m、南北2.05 m、深さ0.18 mの不定形の土坑で、土取り穴と思われる。時期は出土遺物から室町時代後半である。

柱穴6-47 調査区中央付近で検出した。径約0.3 mの円形で、深さ0.34 mである。室町時代後半の土器が出土した。

土坑6-44(図43) 調査区南東部で検出した。東西1.8 m、南北1.4 m、深さ0.67 mの規模で平面形は楕円である。出土遺物は少量であるが、室町時代と推定される。1点であるが、鎌倉時代の山茶碗皿がほぼ完全な形で出土した。混入品であると思われる。

柱穴列6-1(図43) 調査区東部で検出した。南北方向の柱列で方位は座標北より西へ約7.9度振れる。柱間は北から1.4 m・0.9 m・1.4 mとなる。

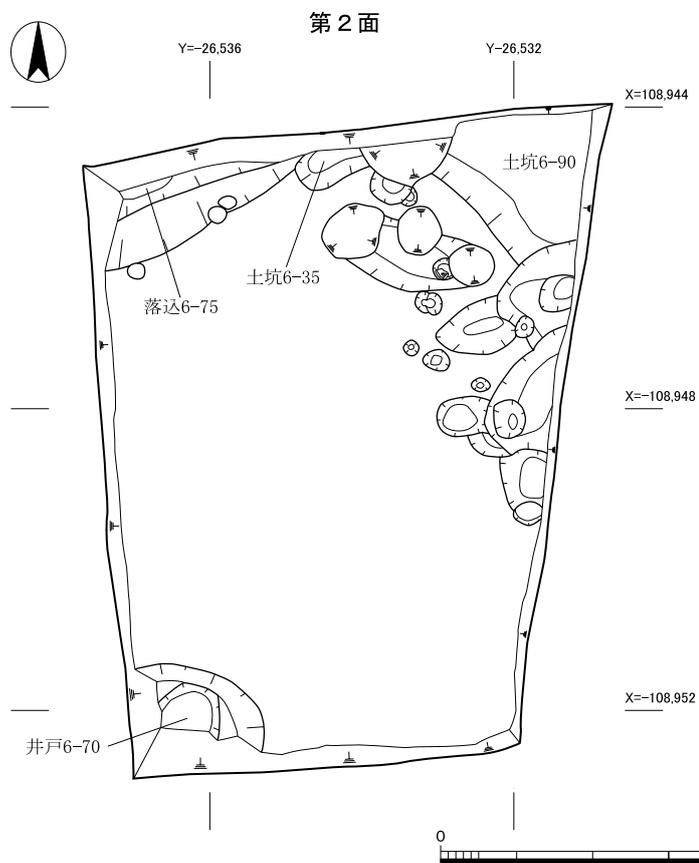
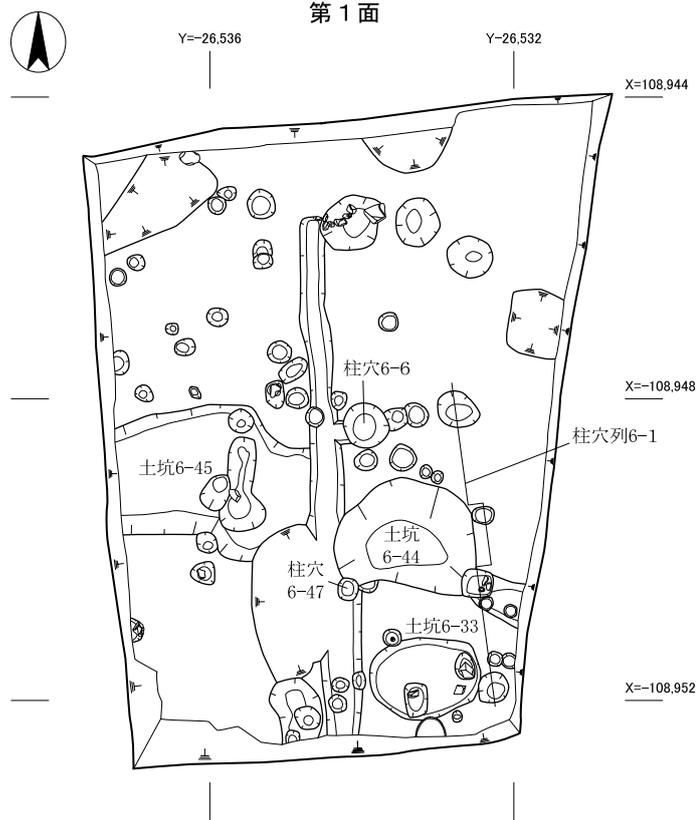


图41 6区平面图 (1 : 100)

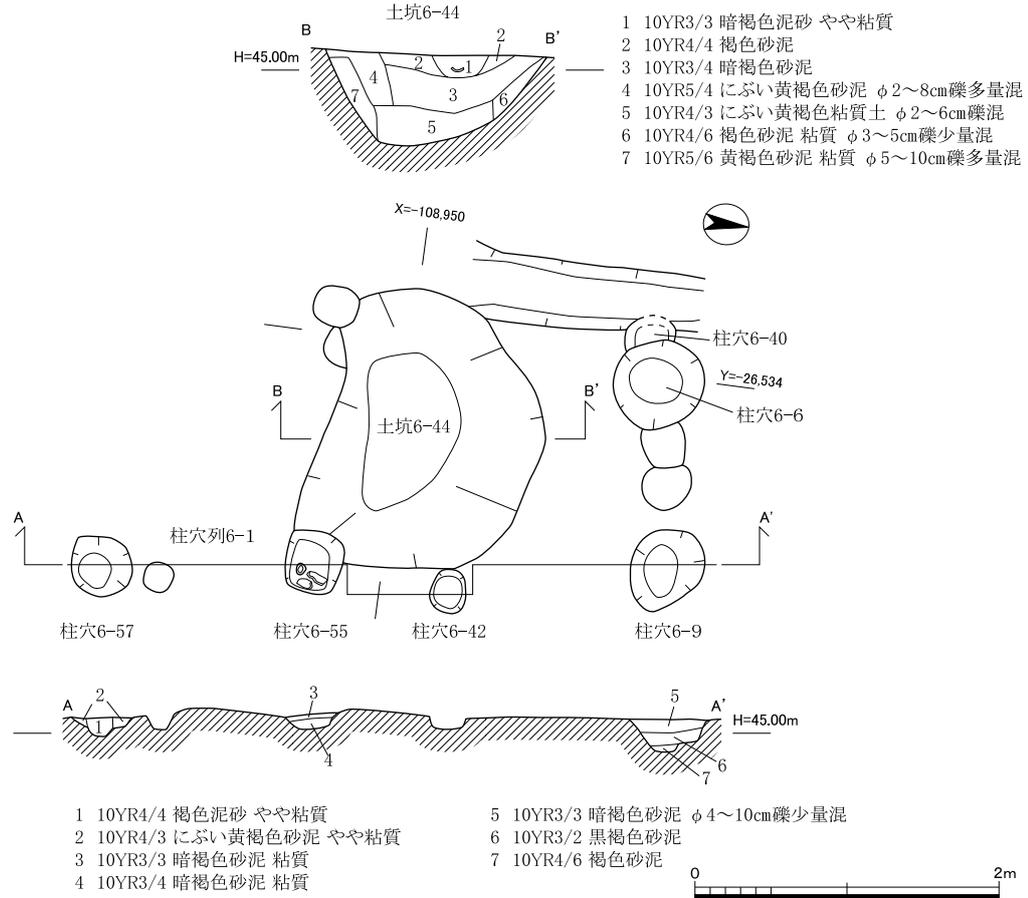


図43 土坑6-44・柱穴列6-1実測図(1:50)

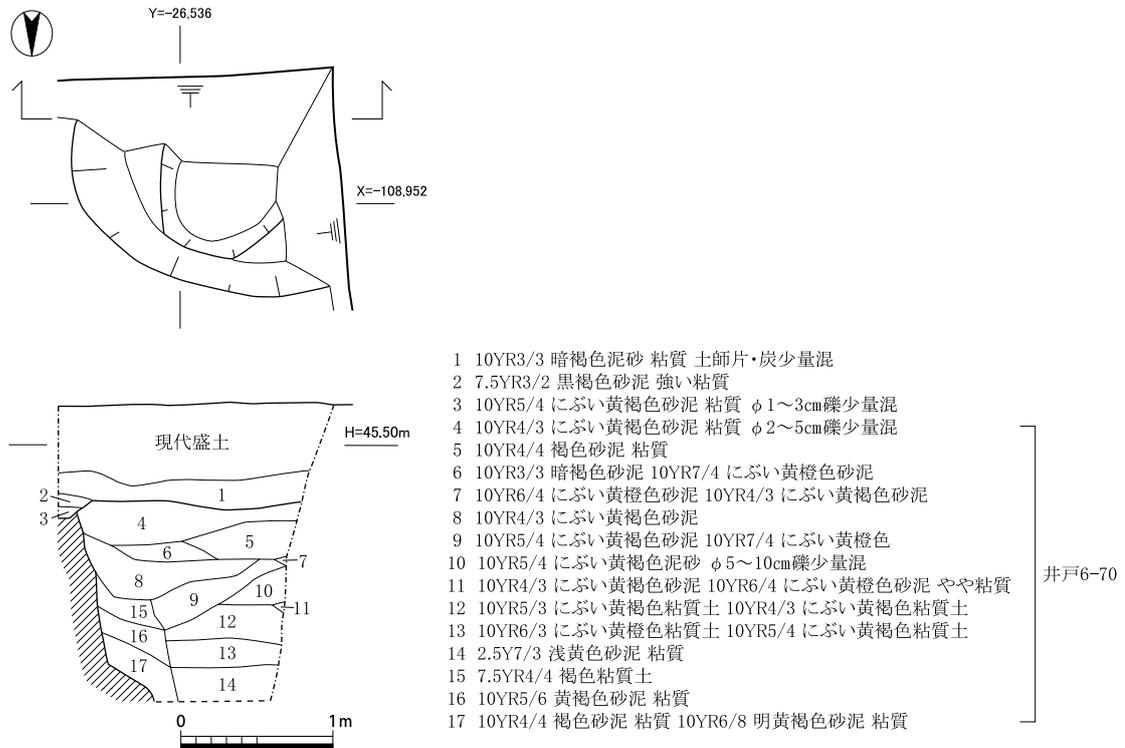


図44 井戸6-70実測図(1:50)

柱穴6-6 調査区中央で検出した。柱穴列6-1に関連する可能性があり、柱穴6-9との柱間は1.2mとなる。さらに西へ延長する可能性もあるが、該当する柱穴は検出できなかった。柱穴列6-1と関連するとすれば、建物になると考えられる。

2) 第2面 (図41、図版4-3)

井戸6-70 (図44) 調査区の南西角で検出した。南・西側は調査区外となるが形状は円形と推察される。掘形の検出長は1.3mである。井戸上層では井戸枠の構造物は検出できなかった。湧水が著しく、また壁際であるため崩落の危険もあり、深さ1.3mまで確認したが底部は検出していない。遺構の時期は出土遺物から鎌倉時代後半である。

落込6-75 調査区北西端で検出した。北東から南西方向の落込みの南肩部である。東西長約2.8mのみの検出で調査区外の北と東・西へ展開する。調査地での最大深度は0.9mである。断面の形状はV字状で、埋土から溝の可能性が高い。遺物が微量なため時期の確定はできないが、中世の整地以前の遺構である。昨年調査で検出した飛鳥時代の落込(溝)との関連が考えられる。

土坑6-90および土坑群 調査区北東部で検出した。大小の規模があるが、土取り土坑と思われる。これらの土坑を埋めた後に整地されている。

土坑6-35 調査区北壁付近で検出した。東は攪乱により削平され、北は調査区外になるため、東西1.1m、南北0.5m以上、深さ0.2mを確認し、土坑の形状は不明である。平安時代前期の土師器が出土した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱で53箱、内訳は、土器・瓦類が52箱、金属製品が1箱である。土器類には土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。その他、瓦類、金属製品、石製品がある。

1区の出土遺物の時期は平安時代から江戸時代までである。土器類、瓦類、金属製品、石製品などがあるが、大半が土器類で、室町時代の遺物が主体である。

2区の出土遺物の時期は飛鳥時代から江戸時代までで、時期別にみると室町時代のものが大多数を占め、次いで鎌倉時代のものである。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがあるが、大半が土器類である。

3区南の出土遺物の時期は平安時代から江戸時代までである。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。井戸3-15から出土した瓦類が半数を占める。

3区北・4区の出土遺物の時期は平安時代から江戸時代までである。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。土坑4-57から出土した土師器が半数を占める。

5区の出土遺物の時期は平安時代から江戸時代までである。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。落込5-30から出土した土器類が半数を占める。

6区の出土遺物の時期は平安時代から江戸時代までである。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代	瓦		瓦1点		
平安時代	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、瓦		土師器5点、緑釉陶器3点、灰釉陶器3点、須恵器2点、山茶碗2点、瓦7点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、山茶碗、瓦		土師器37点、須恵器1点、瓦器5点、輸入陶磁器6点、山茶碗1点、瓦10点		
室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、石製品、瓦		土師器53点、瓦器4点、施釉陶器2点、輸入陶磁器7点、焼締陶器7点、瓦6点、金属製品4点、石製品5点		
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、金属製品、土製品、瓦		土師器6点、施釉陶器1点、染付4点、焼締陶器1点、土製品1点、瓦1点、石製品1点		
合計		64箱	186点(11箱)	1箱	52箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

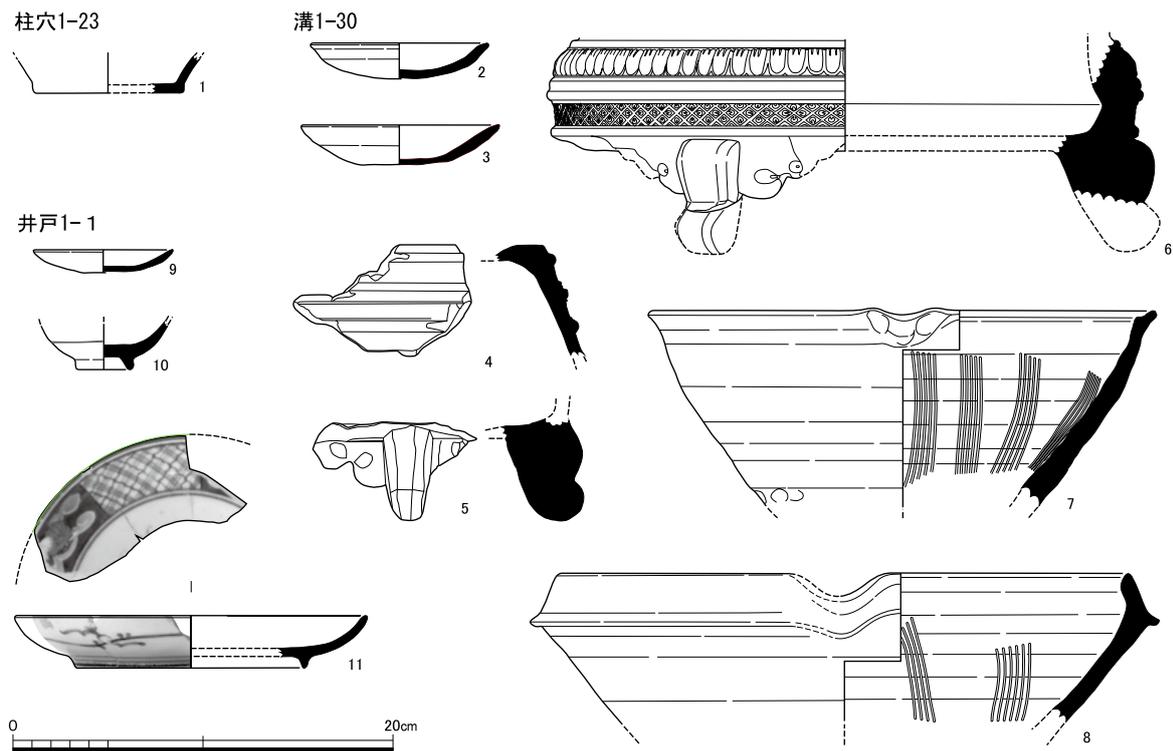


図45 1区出土土器実測図(1:4)

以下では、調査区別の遺構ごとに主要な出土遺物について概述する。

(2) 土器類

1) 1区出土土器(図45、図版5)

柱穴1-23(1) 1は須恵器壺の底部である。復元底径8.2cm、残存器高1.9cmで、平安時代に属する。

溝1-30(2~8) 2・3は土師器皿で、2は口径9.4cm、器高1.9cm、3は口径10.5cm、器高2.1cmである。ともに口縁端部に煤が付着するため、灯明皿である。4~6は瓦質火舎で4は口縁部、5は脚部の小片である。6は体部復元径28cm、残存高9.1cmで、風炉型火舎の下段である。蓮弁とスタンプ型の花菱文、その間を2条の突帯が巡り周囲を装飾する。6と接合する個体が2区の遺構検出中に出土した。7・8は焼締陶器の播鉢で、7は信楽、8は備前産、ともに口縁部の一端を引きだし片口とする。室町時代後半に属する。

井戸1-1(9~11) 9は土師器皿で、口径7.3cm、器高1.2cmである。10・11は染付の椀と皿である。井戸上層から出土した。江戸時代に属する。

2) 2区出土土器(図46、図版5)

土坑2-75(12・13) いわゆる「て」字状口縁をもつ土師器皿で、12は口径11.1cm、器高1.5cm、13は口径12.0cm、器高1.2cmである。器壁は薄く、口縁端部は内に丸くおさめる。平安時代中期に属する。

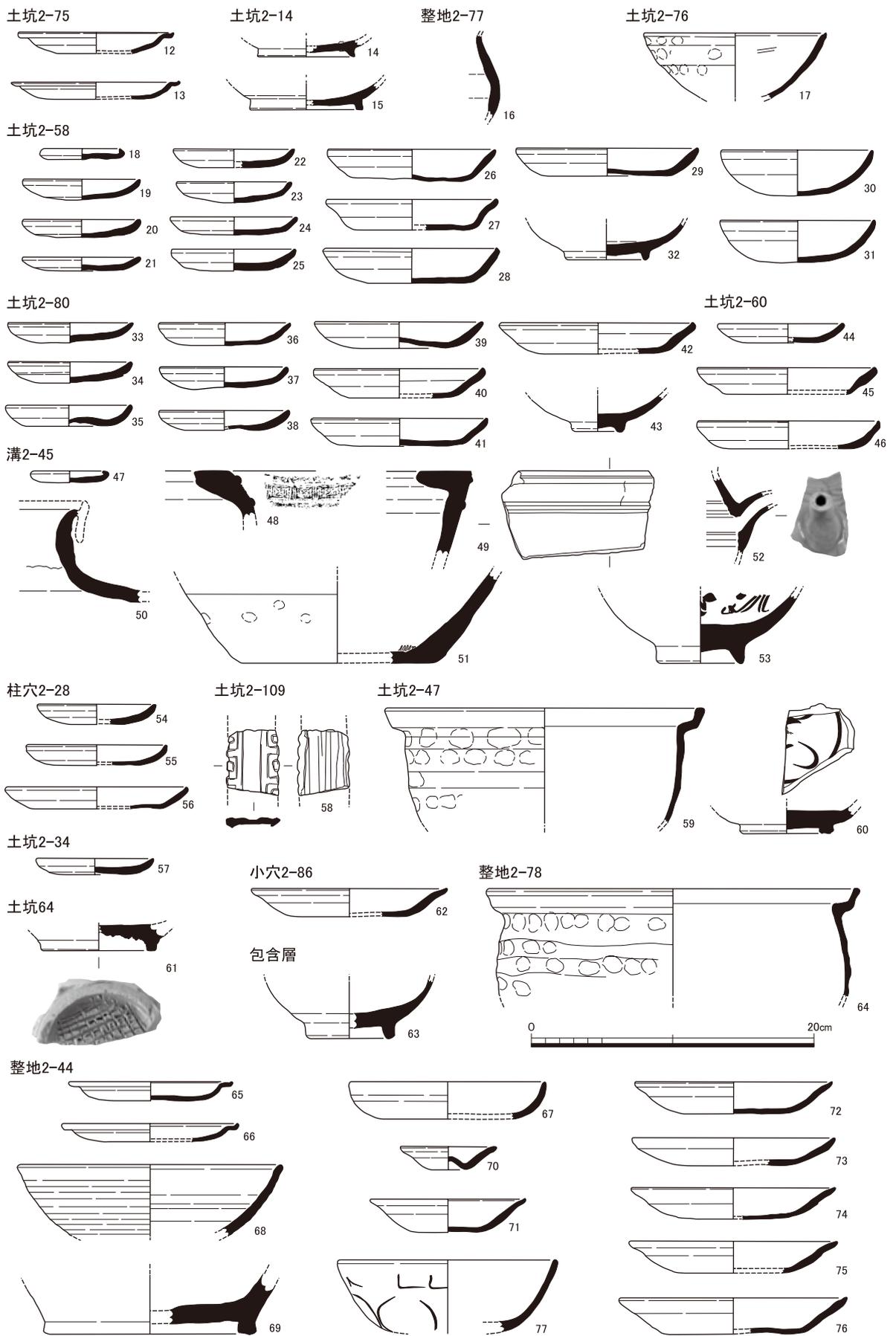


图46 2区出土土器实测图(1:4)

土坑2-14 (14・15) 緑釉陶器碗の底部で、いずれも貼付高台である。高台の形状は、14は断面三角形、15は逆台形である。14は全面施釉する。14は近江産、15は京都産で、平安時代に属する。

整地層2-77 (16) 緑釉陶器壺の体部の一部と思われる。内面に一部釉薬がかかる。平安時代に属する。

土坑2-76 (17) 楠葉産の瓦器碗で、底部は欠損する。口径13.0cm、残存高4.7cm、全体に磨滅しているため、調整は不明瞭であるが、体部の一部にミガキが確認できた。鎌倉時代に属する。

土坑2-58 (18~32) 平安時代末期から鎌倉時代の土器が一括出土した。18~31は土師器皿で、18は口径6.0cm・器高0.8cm、口縁部は屈曲し内傾する。19~25は口径8.2~9.0cm・器高1.0~1.5cm、26~29は口径12.0~13.0cm・器高2.2~2.5cm、30・31は白色系で口径10.9~11.0cm・器高3.0~3.3cmに分類できる。32は中国産白磁碗の底部で、貼付高台である。

土坑2-80 (33~43) 鎌倉時代前半の土器が一括出土した。33~42は土師器皿で、33~38は口径8.8~9.4cm・器高1.4~1.7cm、39~41は口径12.0~12.6cm・器高1.9~2.1cm、42は口径14.0cm、器高2.2cmに分類できる。43は中国産青磁碗である。削出高台で、高台から底部は露胎にする。龍泉窯か。

土坑2-60 (44~46) 土師器皿で口径8.0~13.0cm・器高1.4~2.0cmで、鎌倉時代中頃に属する。

溝2-45 (47~53) 47は土師器皿で口径5.0cm、器高0.85cmの小型、口縁部は屈曲し内傾する。48・49は瓦質火舎の口縁部である。ともに外面に突帯が巡る。50・51は焼締陶器で、50は常滑産の甕の口縁部、51は備前産の播鉢底部である。51は内面の磨滅が著しく掘り目の一部を確認したにとどまる。52・53は中国産青磁で、52は水注の注口部で外面に陰刻文がみられる。53は碗で内面に草花の陰刻文がみられる。鎌倉時代後半から室町時代に属する。

柱穴2-28 (54~56) 土師器皿で、口径8.2~12.7cm、器高1.35~1.55cm、56はやや大型の皿である。鎌倉時代前半に属する。

土坑2-34 (57) 口径8.2cm、器高1.15cmの土師器皿である。鎌倉時代前半に属する。

土坑2-109 (58) 中国産青白磁の琮形瓶(図47)の体部で、幅3.6cm、残存高4.7cm、小型の部類である。外面には中国の玉器である琮を模したとされる筋文が施される。内面には体部四面を筒状に接合する面が面取りされ、縦方向に丁寧にナデる。一方には継ぎ目が残る。日本では茶人が

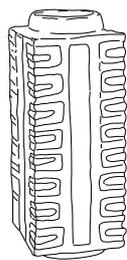


図47 琮形瓶模式図

四方の文様を易の算木にみたと、算木花生といわれる。現在まで知られるものはすべて青磁で、青白磁で小型のものは稀少である。鎌倉時代以降と思われる。

土坑2-47 (59・60) 59は瓦器鍋で底部は欠損する。口径22.4cm、残存高8.2cm、口縁部はほぼ直角に屈曲し立ち上がる。内面はナデ、外面には指のオサエ痕がつき、煤が付着する。鎌倉時代に属する。60は中国産青磁碗の底部で、断面方形の削出高台がつく。内面に不明瞭ながらも草花文が

描かれる。

土坑2-64 (61) 瀬戸産灰釉皿の底部で、底径8.0cmである。底部外面の高台内側におろし目が刻まれている。室町時代に属する。

小穴2-86 (62) 土師器皿で口径13.9cm、器高2.0cm、平底から体部が大きく開く大型の皿である。室町時代後半に属する。

包含層 (63) 中国産青磁椀の底部で、底径5.9cm、残存高4.2cm、削出高台である。高台は露胎する。龍泉窯産である。

整地層2-78 (64) 瓦器鍋で体部下半は欠損する。口径26.5cm、残存高7.7cmである。口縁部はほぼ直角に屈曲し立ち上がる。内面はナデ、外面には指のオサエ痕がつき、煤が付着する。室町時代に属する。

土坑2-44 (65~77) ここでは平安時代から室町時代の遺物が混在して出土した。65・66・68・69は平安時代である。65・66は中期の土師器皿で、いわゆる「て」字状口縁である。65は口径11.4cm、器高1.4cm、66は口径12.4cm、器高1.3cmである。器壁は薄く、口縁端部は内に丸くおさめる。68は須恵器椀で底部は欠損する。口径18.4cm、残存高5.1cmである。内外面ともに回転ナデ調整で仕上げる。69は灰釉陶器壺の底部である。底径15.0cm、断面方形の貼付高台が付く。67は鎌倉時代の土師器皿で、口径13.8cm、器高2.7cm、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は上方へつまみあげる。70~76は室町時代後半の土師器皿で、70は口径6.8cm、器高1.7cmで、底部中央は凹み、口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開く。71は口径11.0cm、器高2.4cmで、口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。72~76は口径14.0~16.2cm、器高2.0~2.5cmで、平坦な底部から体部が直線的に開き、底部内面の立ち上がり際にナデによる泥漿が顕著に残り、その外側は圏線となる。70・71より新段階の時期である。77は中国産青磁椀で、底部は欠損する。口径15.2cm、残存高5.1cm、体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面に簡略化した雷門と蓮弁が見られる。室町時代に属する。

3) 3区南出土土器 (図48、図版6)

柱穴3-25 (78) 灰釉陶器椀の底部で、底径8.1cm、残存高1.3cmで、貼付高台である。底部内面から体部に立ち上がる辺りに施釉がみられる。平安時代中期に属する。

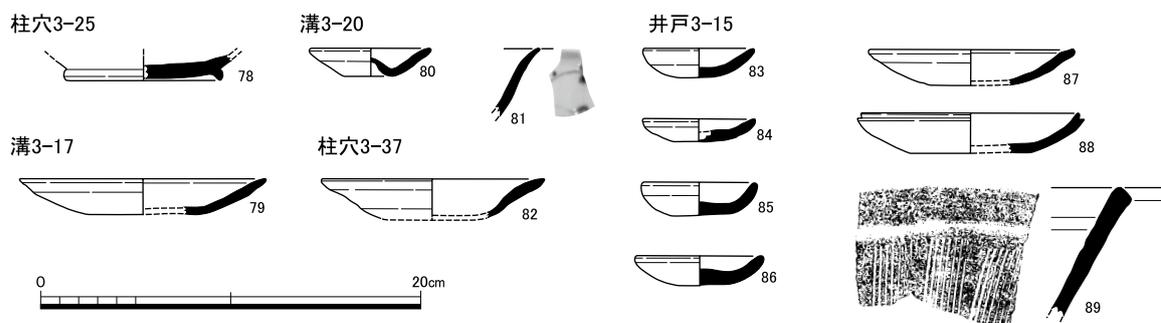


図48 3区南出土土器実測図 (1:4)

溝3-17(79) 土師器皿で口径13.0cm、器高1.9cmで、平坦な底部から体部が直線的に開く。室町時代後半に属する。

溝3-20(図80・81) 80は土師器皿で口径6.4cm・器高1.5cmで、底部中央が凹み、口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開く。81は中国明代の染付碗の口縁部小片である。器壁は薄く、胎土は乳白色を呈する。内外面に文様が見られる。室町時代後半に属する。

柱穴3-37(82) 土師器皿で、口径11.8cm、器高2.1cm、平底から体部が外反気味に開く。室町時代後半に属する。

井戸3-15(83~89) 83~87は土師器皿で、83~86は口径5.6~6.8cm・器高1.3~1.8cm、小型で手ずくね、87は口径10.9cm、器高1.9cmである。88は軟質施釉陶器の灯明皿、89は丹波産の播鉢である。江戸時代前期に属する。

4) 3区北・4区出土土器(図49、図版6)

整地層4-46(90・91) とともに山茶碗で、90は口径15.7cm、器高4.8cm、91は口径16.2cm、器高5.4cmで、貼付高台である。底部内面に重ね焼き痕が残る。体部は緩やかに外上方に丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸くおさめ、端部を引き出し輪花を作る。平安時代後期に属する。

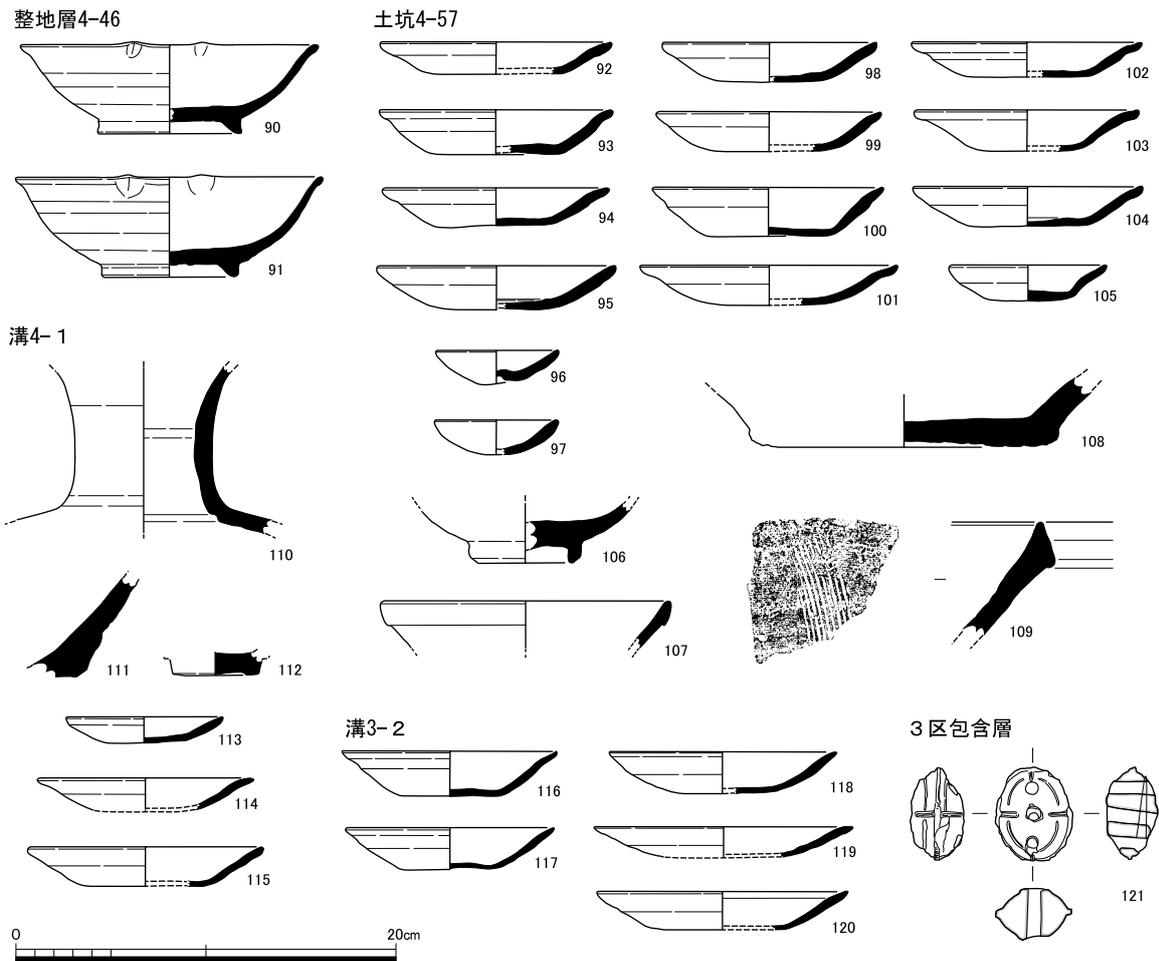


図49 3区北・4区出土土器実測図(1:4)

土坑4-57 (92~109) 92~105は土師器皿で、92~95・98~104は口径11.3~13.6cm、器高1.2~2.6cm、口径11.0~12.6cm、器高1.2~2.4cmである。平坦な底部から体部が直線的に開き、底部内面の立ち上がり際にナデによる泥漿が顕著に残る。96・97は口径6.5cm・器高1.8~1.9cmの小型で、96は底部中央は凹み、97は丸底である。105は口径8.3cm・器高1.9cm、平坦な底部から体部は屈曲して立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。106は中国産青磁碗の底部で、底径5.0cm、残存高2.5cmである。高台は露胎する。107は平安時代末期の中国産白磁碗の口縁部で、混入である。口径15.6cm、残存高2.5cmで、端部は折り曲げて玉縁状に仕上げる。108は焼締陶器の底部で底径16.0cmである。常滑産の甕と思われる。109は備前播鉢の口縁部である。室町時代後半に属する。

溝4-1 (110~115) 110は灰釉陶器壺の頸部から肩部にかけての部位である。頸部は直線的に立ち上り口縁部にかけて広がりをもせる。肩部に頸部をのせて接合し、回転ナデ調整で仕上げる。施釉は肩部に厚くかかり、頸部外面から内面にも薄く灰釉がかかる。平安時代に属する。111は焼締陶器播鉢の底部で、産地は不明である。112は天目碗の底部のみで、底径4.6cm、削出高台である。113~115は土師器皿で、口径8.3~12.4cm、器高1.4~2.1cm、平坦な底部から体部が直線的に開く。室町時代後半に属する。

溝4-2 (116~120) すべて土師器皿で、口径11.0~13.6cm、器高1.6~2.4cm、平坦な底部から体部が直線的に開き、底部内面の立ち上がり際にナデによる泥漿が顕著に残り圈線となる。室町時代後半に属する。

3区包含層 (121) 素焼の土製品で、形状は胡桃形である。最大径4.0cm、長さ4.9cm、中は空洞と思われるが3箇所穴は筒状に反対側に通る。玩具かと思われるが、用途は不明である。

5) 5区出土土器 (図50、図版6)

落込5-30 (122~135) ここからは室町時代後半の土師器皿を主体として一括出土した。122~127は口径6.4~8.8cm、器高1.4~1.8cmの小型の土師器皿で、底部中央が凹むものと平底がある。

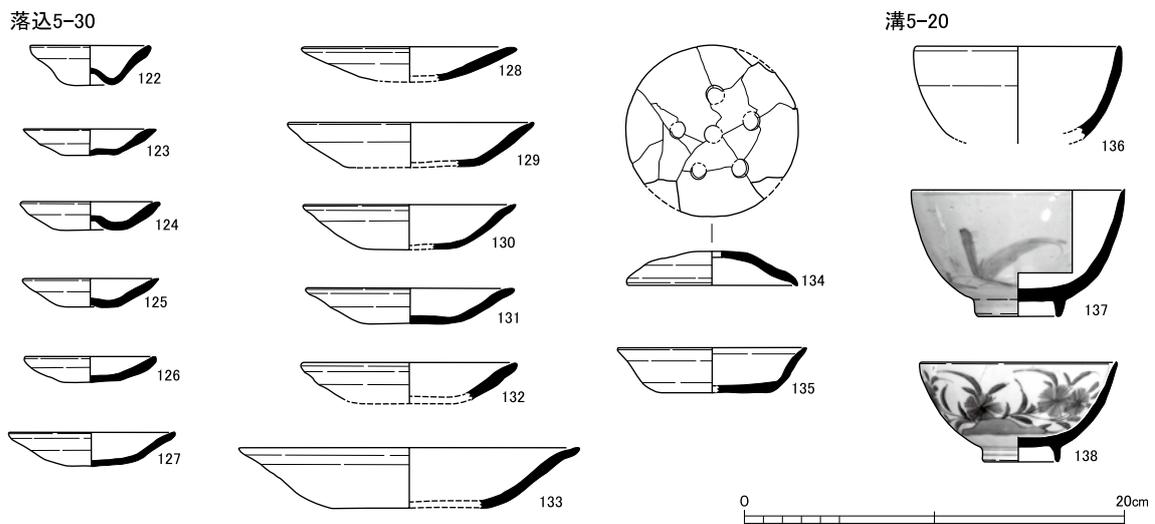


図50 5区出土土器実測図 (1:4)

128～132は口径11.0～13.6cm、器高1.8～2.4cmの中型、133は口径18.0cm、器高3.2cm以上の大型の皿である。いずれも室町時代後半に属する。134は堅く焼き締まった土師質で、口径9.0cm、器高1.8cm、丸い天井部から緩やかに外反しながら開き、端部は丸くおさめる。天井部中心に1、周囲に5個の円形の孔が認められる。蓋状に上位に使用されたものと判断した。135は中国産白磁皿で、口径10.0cm、器高2.4cmである。平坦な底部からやや外反しながら立ち上がる。口縁端部は口剥である。鎌倉時代に属する。

溝5-20(136～138) 136は中国産青磁椀で底部は欠損する。口径11.0cm、残存高2.1cm、体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。137・138はともに染付椀で、137は口径11.2cm、器高6.7cm、体部外面に草花が描かれる。138は口径10.4cm、器高5.3cm、濃い発色の草花が描かれる。江戸時代に属する。これらは溝5-20上層から出土した。

6) 6区出土土器(図51、図版6)

土坑6-35(139) 土師器杯Bで口径20.0cm、器高4.7cm、底部に断面台形の低い高台がつく。体部は緩やかに外上方に開き、口縁端部は屈曲して内側に肥厚する。体部外面はオサエ成形後に粗いヘラケズリ調整、さらに粗いミガキ調整を施す。平安時代前期に属する。

土坑6-44(140) 須恵質の山茶椀皿で、口径8.6cm、器高1.9cm、平坦な底部から体部は緩やかに外上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。底部外面に糸切り痕がつく。鎌倉時代に属する。

井戸6-70(141～146) 141～144は土師器皿で、口径9.4～12.6cm、器高1.7～4.4cm以上。

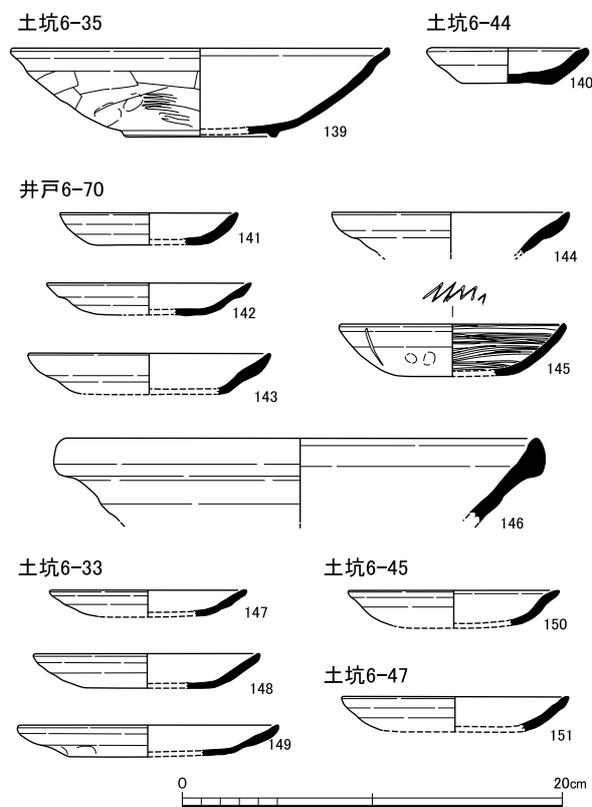


図51 6区出土土器実測図(1:4)

145は瓦器皿で、口径12.0cm、器高2.8cm、内面底部から体部にミガキ、体部外面に浅い輪花を作る。146は東播系須恵器鉢の口縁部で、口径26.0cm、口縁端部は肥厚して玉縁状になる。鎌倉時代後半に属する。

土坑6-33(147～149) 土師器皿で、口径10.4～13.8cm、器高1.7～1.8cm、平坦な底部から体部が直線的に開き、立ち上がる。器高は低い。室町時代後半に属する。

土坑6-45(150) 土師器皿で、口径11.0cm、器高1.9cm、緩やかに立ち上がり外反する。口縁端部は丸くおさめる。室町時代後半に属する。

土坑6-47(151) 土師器皿で、口径12.0cm、残存高1.8cm、口縁端部は丸くおさめる。室町時代後半に属する。

(3) 瓦類 (図52・53、図版7)

瓦は各調査区から出土したが、3区南の井戸から大量に平瓦が出土した以外は、ごく少量である。瓦の時期は飛鳥時代から江戸時代までである。ここでは、軒瓦を中心に掲載する。2区の土坑からは丸瓦が5枚出土した。状態の良いものを掲載した。瓦1は飛鳥時代中期、瓦8・9は平安時代、瓦12・14・15・17～19は平安時代末期から鎌倉時代、瓦2～5、10・11・13・16・21は鎌倉時代、瓦22～25は室町時代、瓦6・7・20は江戸時代に属する。

軒丸瓦 (瓦1) 単弁(素弁)八葉蓮華文と思われる。弁はやや肉厚で丸味をもつ。胎土に少量の砂粒含む。焼成は硬質で灰色である。表面は浅緑色で、二次的なものか判明しない。土坑2-25から出土した。

複弁四葉蓮華文軒丸瓦 (瓦2) 一段高い中房に「卍」を陽刻する。「卍」字のくずれ字か。内区に小振りの複弁を配する。花卉の輪郭線は互いに連結し、細い界線の内側に8個の殊文を配する。胎土はやや粗く、灰色で、焼成は硬質である。整地層3-46より出土した。

蓮華文軒丸瓦 (瓦3) 瓦当面の磨滅が著しいが蓮弁の中央に巴文を配し周縁にやや大粒の殊文を配する。胎土は少量の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。土坑4-58より出土した。

三巴文軒丸瓦 (瓦4) 左巻きの巴文を配する。頭部は離れる。胎土は砂粒を含み灰色である。焼成は硬質である。溝4-1より出土した。

三巴文軒丸瓦 (瓦5) 右巻きの巴文を配する。胎土は砂粒を含み灰色。焼成は硬質。溝1-30より出土。

軒丸瓦 (瓦6) 「仁和寺」銘を配する。瓦27に比べ「寺」字がやや太く明瞭である。瓦当成形は瓦当部裏面上端に粘土を付加して丸瓦に接合する。胎土は砂粒を多く含み、灰白色である。焼成はやや軟質である。井戸3-15より出土した。

軒丸瓦 (瓦7) 中央に「仁和寺」銘を配する。瓦当部裏面上端に丸瓦をあて粘土を付加して接合する。胎土は砂粒を多く含み、灰白色である。焼成はやや軟質である。瓦当面に離れ砂が付着している。井戸3-15より出土した。

唐草文軒平瓦 (瓦8) 左端半部の破片である。唐草は左から右へ偏行する。主葉は、大きく反転し、支葉は強く巻き込む。瓦当部は曲線顎で、瓦当部成形は折り曲げ技法である。平瓦部凹面に布目が強く残る。胎土は精良で焼成は軟質である。溝2-45より出土した。

唐草文軒平瓦 (瓦9) 細かい唐草文で外区に殊文を配する。瓦当部は段顎である。平瓦凹面に細かい布目跡が残る。胎土は砂粒を少量含み灰色である。焼成は軟質である。整地層2-77より出土した。

剣頭文軒平瓦 (瓦10) 文様は高く盛り上がり剣の先端は鋭い。瓦当成形は折り曲げ技法である。胎土は密で白色である。焼成は軟質である。井戸1-1より出土した。

剣頭文軒平瓦 (瓦11) 全体に磨滅が著しいが剣先はやや丸みをもつ。成形は折り曲げ技法である。胎土は1～5mmの砂粒を多く含み灰色である。焼成は硬質である。土坑2-103より出土した。

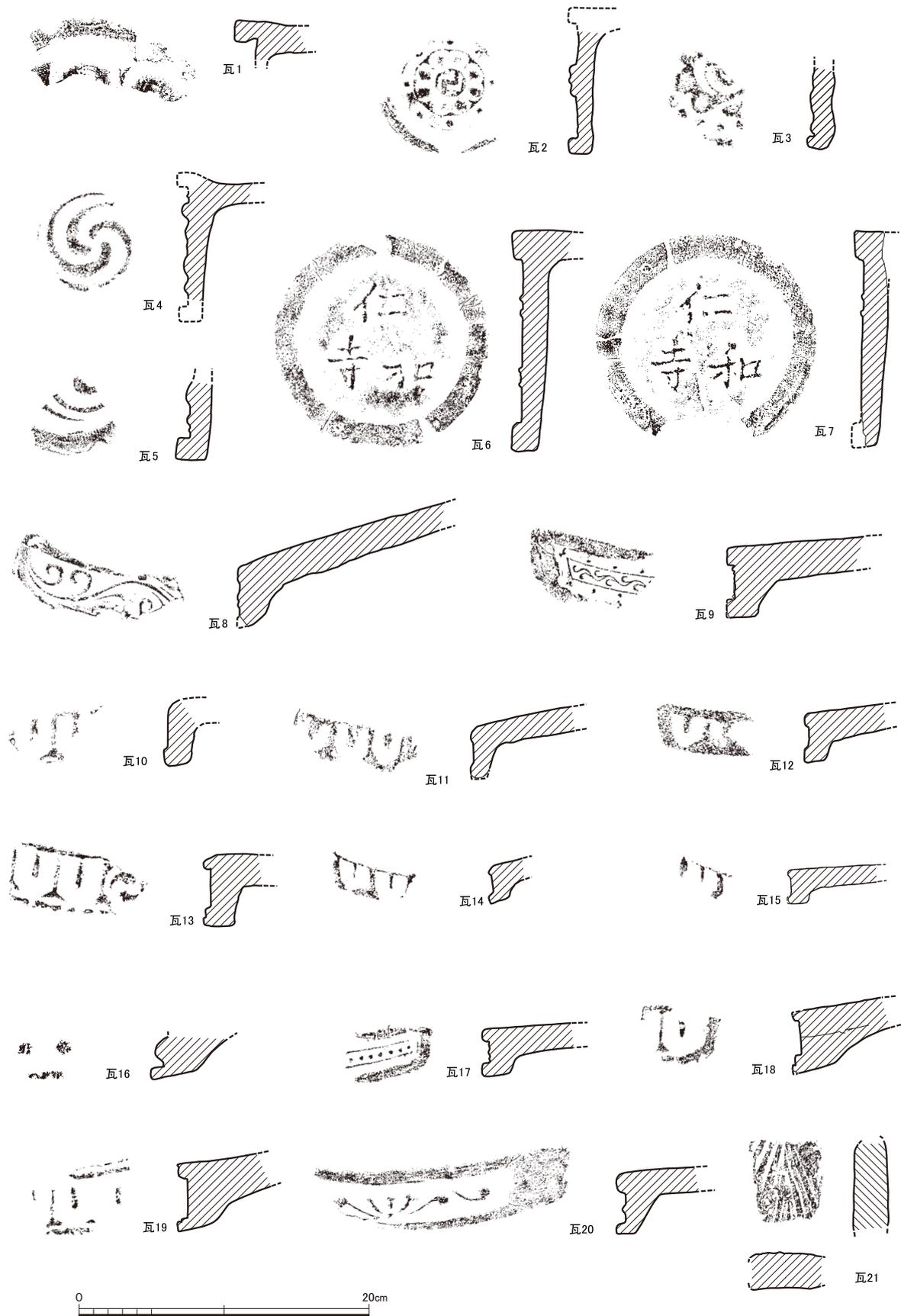


图52 軒瓦拓影·実測図 (1 : 4)

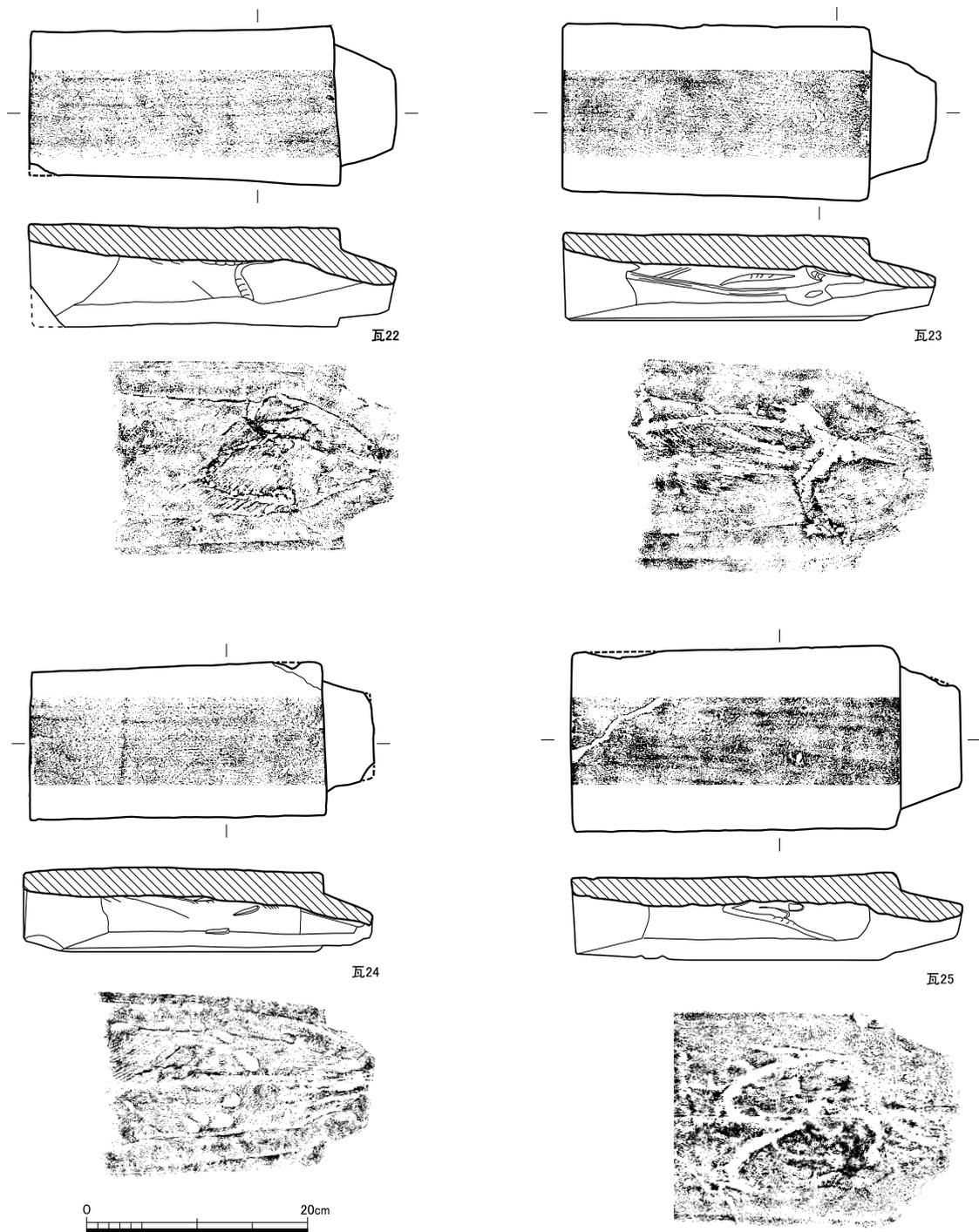


図53 丸瓦拓影・実測図（1：6）

剣頭文軒平瓦（瓦12） 瓦当部成形は、折り曲げ技法である。胎土は、砂粒を多く含み浅黄色で、焼成は軟質である。溝3-16より出土した。

剣頭文軒平瓦（瓦13） 中央に右回り二巴文を配する。瓦当部成形は折り曲げ技法である。胎土は精良で、灰白色である。焼成は硬質で表面は黒色化する。土坑4-58より出土した。

剣頭文軒平瓦（瓦14） 小型の瓦で瓦当部成形は折り曲げ技法である。胎土は精良で灰色である。焼成は硬質で表面は黒色化する。溝5-20より出土した。

剣頭文軒平瓦（瓦15） 瓦当部成形は折り曲げ技法。平瓦部凹面に布目痕が残る。胎土はやや砂粒を含み灰色である。焼成は硬質である。溝5-20より出土した。

連珠文軒平瓦（瓦16） 瓦当面の上部を欠損する。大型の殊文を配する。顎部凸部から平瓦部は丁寧なヨコナデ。胎土は砂粒を含み灰白色である。焼成は軟質である。柱穴4-49より出土した。

連珠文軒平瓦（瓦17） 小型で界線を有し小振りの殊文を密に配する。段顎。胎土は砂粒を多く含み焼成は硬質で灰色である。土坑4-58より出土した。

剣頭文軒平瓦（瓦18） 文様は高く盛り上がり、剣の先端は鋭い。瓦当部成形は、平瓦凸面に粘土を貼る。胎土は精良でやや砂粒を含み灰色である。焼成は硬質である。和泉産の可能性あり。土坑2-107より出土した。

剣頭文軒平瓦（瓦19） 文様は高く盛り上がり、剣の先頭は鋭い。瓦当部成形は、端部に粘土を補充して瓦当面を作ったものである。平瓦凹面に明瞭に布目痕が残る。胎土は精良で、淡灰色である。焼成は硬質である。土坑4-58より出土した。

唐草文軒平瓦（瓦20） 中心飾りは花文で唐草は二回反転する。成形は顎貼り付け技法である。胎土は砂粒を少量含む。焼成は硬質である。二次焼成を受けた痕跡がある。井戸3-15より出土した。

平瓦（瓦21） 外面は平行タタキ、内面には細かい布目を残す。落込5-30より出土した。

丸瓦（瓦22~25） 一部は欠損するがほぼ完形である。瓦22は、凹面に糸切り離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目痕が残る。凸面の調整は、瓦24には布目に指跡が残る。瓦22・23・25に抜き縄が付けられる。両側面、広縁部の内面はヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。胎土は、砂粒を含み青灰色である。焼成は硬質である。土坑2-44南肩口より出土した。

（4） 銭貨（図54）

銭貨は溝5-20で出土した。銭は7枚と8枚に分かれていたが麻紐の痕跡があり、緡銭であったと思われる。鏽などで密着していたため、種類の確認できたものは4枚であった。銭1は「元豊通寶」（北宋・初鑄1078年）、銭2は「開元通寶」（唐・初鑄845年）、銭3は「紹聖元寶」（北宋・初鑄1094年）、銭4は「至大通寶」（元・初鑄1310年）である。

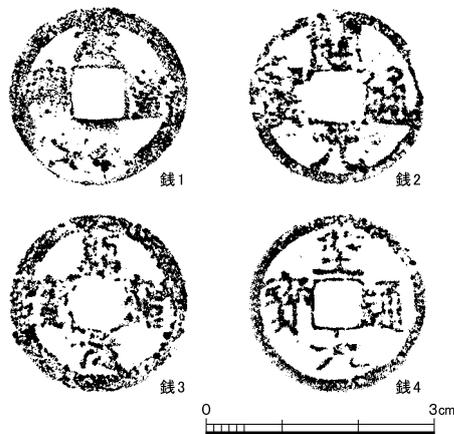


図54 銭貨拓影（1：1）

（5） 石製品（図55）

石製品には砥石、石臼、硯がある。

砥石（石1~4） 石1は滑石製鍋の体部の小片であるが、再利用するための加工痕がみられる。外面に多数の刃跡がみられ砥石に転用されたものか、もしくは温石の未製品の可能性もある。土坑2-80から出土した。石2~4は砥石で、石2は4面が滑らかで磨滅し

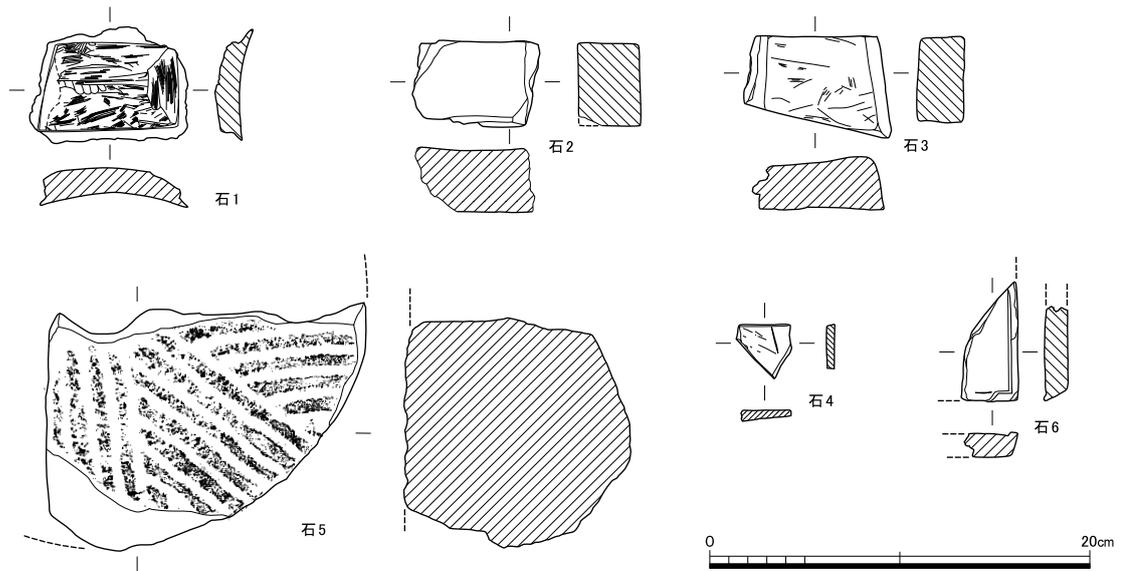


図55 石製品拓影・実測図（1：4）

ている。石材はやや赤味がかった黄白色の砂岩である。土坑2-108から出土した。石3は表面が滑らかで磨滅している。石材は灰色の砂岩である。2区遺構検出中に出土した。石4は剥片で、表面が滑らかで磨滅しており、石材はにぶい橙色の粘板岩である。柱穴4-39から出土した。

石臼（石5） 石材は花崗岩である。土坑4-58から大量の石とともに出土した。

硯（石6） 硯の陸部の一角で、側面は斜めに立ち上がる。石材は粘板岩である。井戸6-70から出土した。

5. まとめ

市道梅津太秦線（城北街道）の拡幅工事に伴う発掘調査としては、2008年度から継続して行っており、今回の調査は7次調査となる。調査地は遺跡の重複する地域で、古墳時代後期から飛鳥時代、平安時代から中世を中心とする集落跡である常盤仲之町遺跡の東端と南東部、奈良時代から平安時代の遺構散布地である一ノ井遺跡の西端に該当する。また、広隆寺旧境内の東端に隣接する。当初、周辺の調査成果から、本調査地点での遺構密度は希薄なものとの予想があったが、中世の遺構が良好に残存していた。

1区では室町時代以降の南北溝・土坑・井戸・柱穴などを検出した。南北溝1-30は他の調査区で検出した溝と一連のものである。この溝がそのまま2区の溝につながるか、もしくは西へ曲がる区画溝になる可能性も考えられる。それ以前には大規模な土取りが行われた状況を確認し、この土取り土坑を整地したのちに溝が造られている。このあたりは良好な粘土質の土層が堆積している箇所と砂礫層に覆われている箇所があり、西隣接地の調査（調査12）で検出された平安時代の遺構が確認できなかったのは、それらが鎌倉時代から室町時代にかけて掘りとられた際に破壊されたと考えられる。

2区では平安時代から鎌倉時代に至る土坑、室町時代の柱穴・土坑・南北溝・整地層など多数の遺構を検出した。ここでも室町時代以前の大小の土取り土坑を検出しており、少なくとも2時期の整地が行われた状況を確認した。とくに注目できる遺構としては、城北街道の西側に位置する門跡の発見がある。明治時代に測量された「山城国葛野郡太秦村 広隆寺境内内外区別実測図」と現況の地図を重ね合わせた場合（図61）、この門跡は広隆寺の旧寺院地東限付近に位置している。門は東面する城北街道に開いており、広隆寺もしくは子院に関連する遺構の可能性はある。門の西側で溝2-45、門の南側で溝2-10の2条の南北溝を検出したが、残念ながら門と溝の間が削平されており、出土遺物も微量なため、門と溝との関係が明確にはできなかった。門は土坑3-20と溝2-10との間に造られ、土坑3-20が溝とすると、門の両脇には塀などによる遮蔽物を造り、その先には堀を掘削していると想定できる。溝2-45は門の内側にあることから、内溝とみられ、橋などの施設があった可能性が考えられる。

3区南では平安時代から江戸時代の柱穴・溝・井戸などを検出した。室町時代後期の溝3-16は南北方向から直角に西に向きを変える溝で、区画溝と考えられる。この調査区の北端で検出した土坑3-20は前述のように溝の可能性が考えられるが、調査区北壁から1.7mの地点で立ち上がる。わずか0.5m南西の位置に溝3-17があり、この溝は溝3-18と合流する。この溝が溝2-45となる。溝3-16南東では重複して切り合う柱穴を多数検出した。溝と道路との間であるため居住域とは考えられず、これらは柵列の造り替えであろう。

3区北・4区では室町時代後半の区画溝を検出し、この溝の北西部では礎石を据えた柱穴を多数検出した。これらは柵列の可能性が考えられる。第2面は遺構の切り合い関係から室町時代後半の一時期古い面とした。その面でも区画溝の北西で大規模な整地・集石（土坑3-57・58・59）や

布掘基礎を検出した。遺構の分布状況から溝4-1は第2面の時期から機能していたと考えられる。また、この区画が5次調査（調査32）の3区でみられた空地と考えられる。この溝の東側ではわずかな範囲であるが整地した状況が確認できた。整地層の下層からは北東から南西方向の溝4-60を検出した。室町時代後半に頻繁な整地が行われていたことが窺われる。

5区では4区へと続く溝5-20を検出した。この調査区でも溝の西側で柵列と思われる多数の柱穴を検出した。また調査区西端の落込5-30からは室町時代後半の一括した土器が出土した。土坑4-57・58からの出土土器と同時期のもの、これも室町時代後半以降に整地された地域である。

6区では平安時代から室町時代の土坑・柱穴・井戸などを検出した。北側道路を挟んだ6次調査（調査33）では飛鳥時代の溝状遺構を検出しており、北端で検出した落込6-75が溝の南肩部になる可能性もある。同一の遺構とすると、幅5m以上の大規模な溝となる。

調査全般では室町時代後半の遺物が主流であるが、2区からは1点であるが、飛鳥時代の広隆寺に関連すると考えられる軒丸瓦が出土した。また土坑から出土した琮形瓶は、小型の青白磁製であることが特筆される。

以上の調査成果をふまえて、最後にこれまでの成果を総括しておく（図57～60）。

ここでは、各調査で検出した主要な遺構を時代別に図化した。城北街道を挟んだ東側の調査（北部）と、西側の調査（南部）とに分割した。西側は広隆寺旧境内となる。

古墳時代（図57） 1次調査（調査26）では横穴式石室を発見し、常盤東ノ町古墳群に新たな古墳を1基加えた。5次調査（調査32）で検出した溝は古墳の周溝の可能性が考えられる。また6次調査（調査33）でも周溝の可能性のある溝を検出している。調査区内で耳環や鉄製金具などの副葬品が出土しており、古墳の存在を示唆している。常盤東ノ町古墳群の範囲が南へ広がる可能性があ

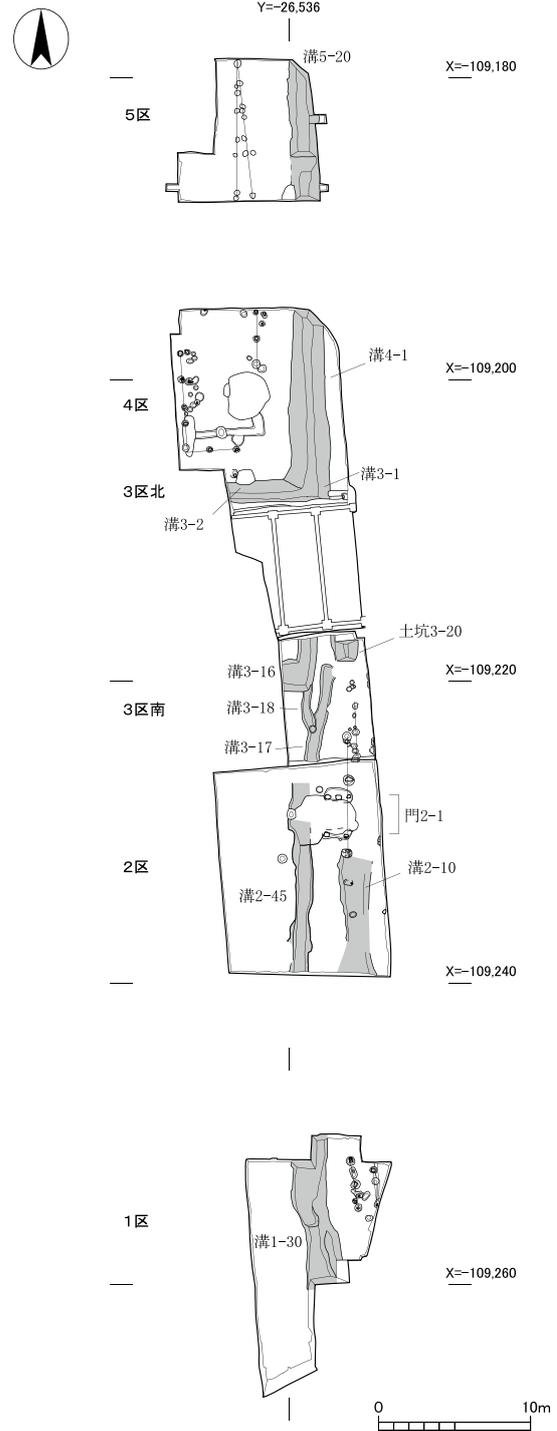


図56 遺構概略図（1：500）

古墳時代



図57 遺構変遷図 古墳時代 (1:1,500)

飛鳥時代から奈良時代

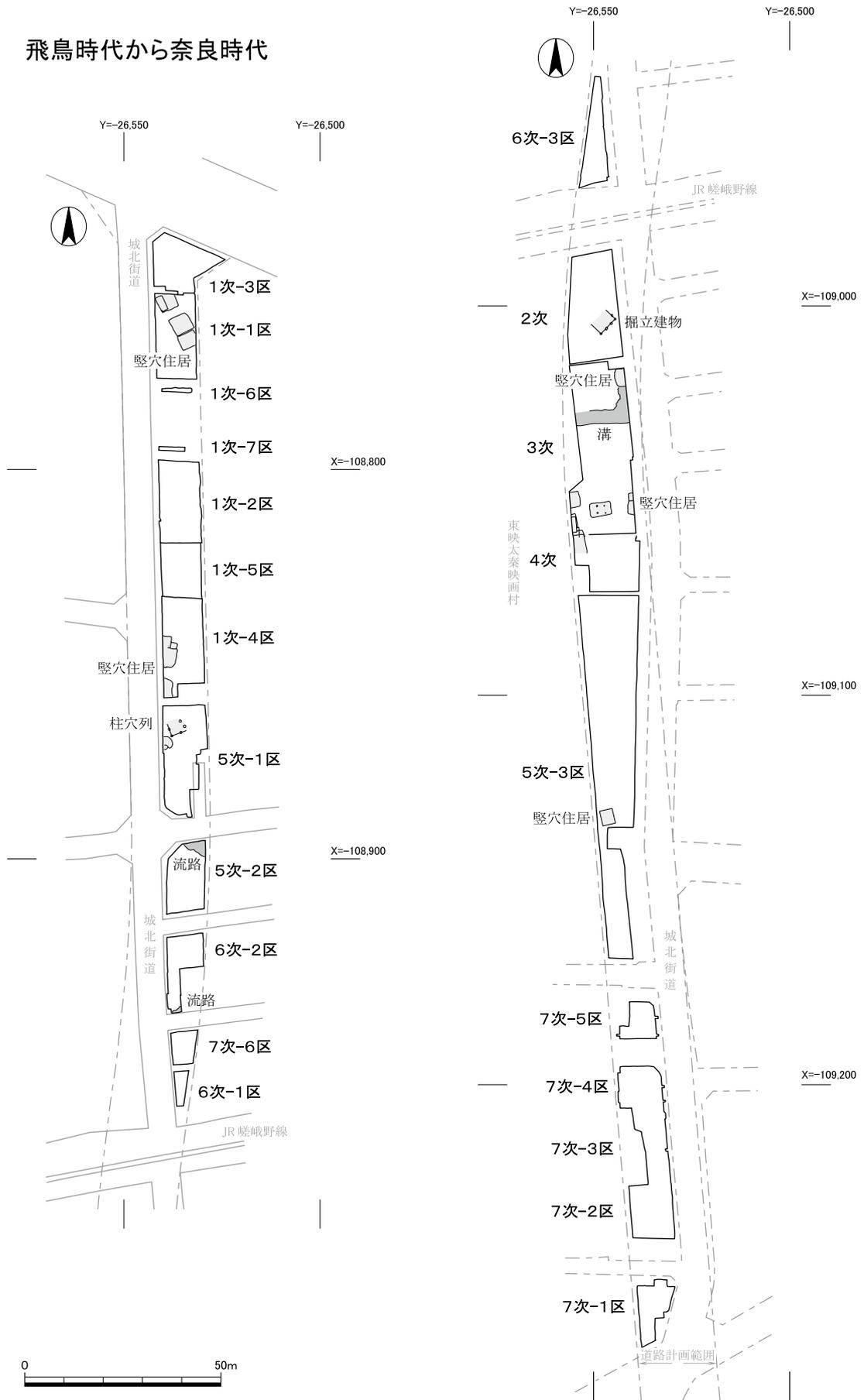


図58 遺構変遷図 飛鳥時代から奈良時代 (1 : 1,500)

平安時代



図59 遺構変遷図 平安時代 (1 : 1,500)

鎌倉時代から室町時代

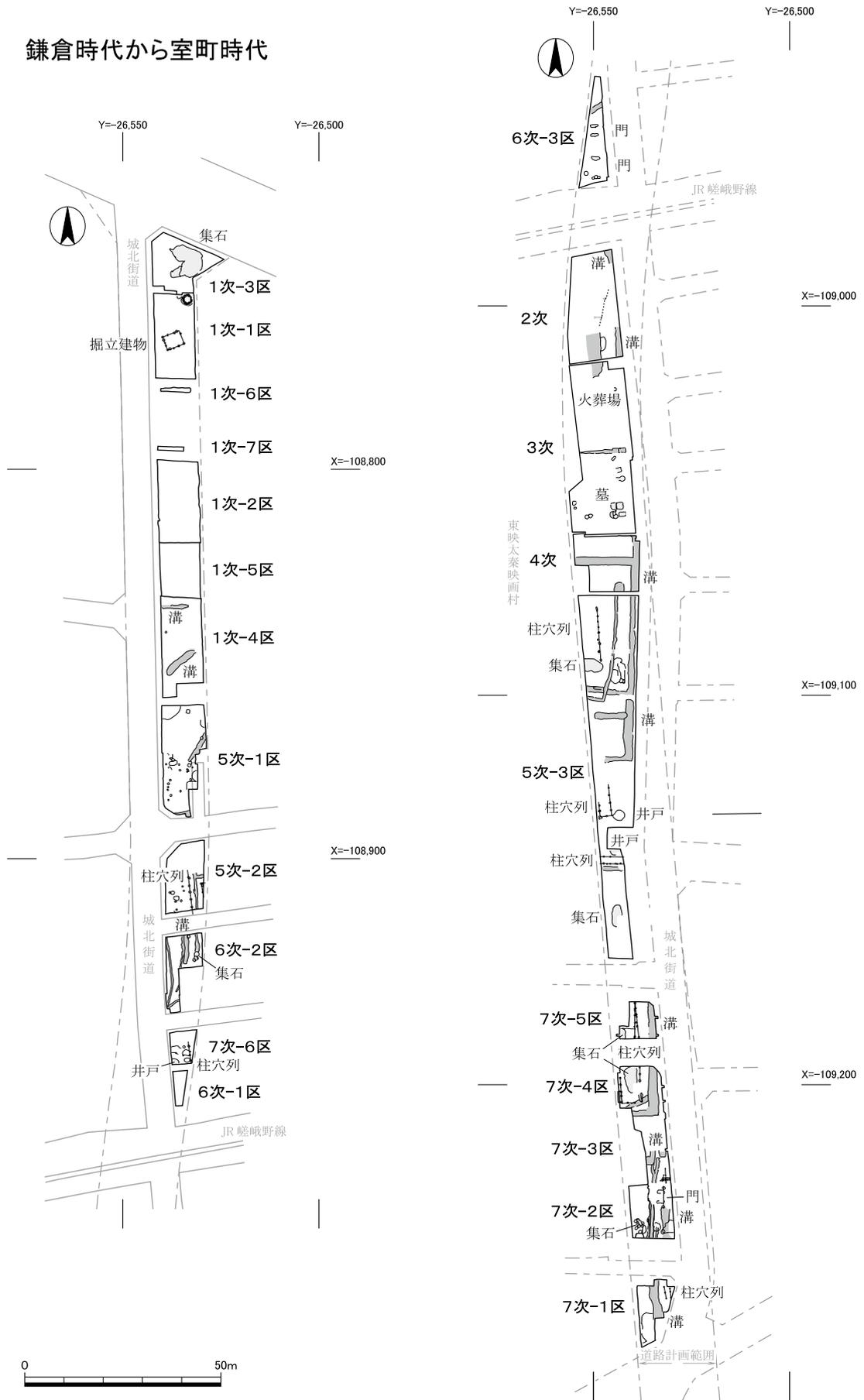


図60 遺構変遷図 鎌倉時代から室町時代 (1 : 1,500)

る。西側で古墳時代の遺構は検出されていないのは、広隆寺寺域内となるため、建立時か後世に削平されたものと推定される。

飛鳥時代 (図58) 1次調査で竪穴住居が7棟、3次調査(調査28)で竪穴住居10棟、4次調査(調査29)で竪穴住居1棟、5次調査1区では土坑・掘立柱建物、2区で溝・流路、3区で竪穴住居1棟、6次調査で落込(溝)などが検出されている。1977年の調査(調査5)では西側の常盤仲之町遺跡が居住域で、東側は墓域として区画されていると想定されていたが、1次調査の結果、東側でも住居を検出し、5次調査では掘立柱建物を検出している。城北街道の東側でこの時期の住居を確認できたのは、これらの調査のみであったが、古墳群に近接して居住域があったことが判明した。西側では多数の住居を検出しており、飛鳥時代の広隆寺創建との関係が重視される。また、4次調査では平安時代まで踏襲される東西溝を検出しており、造営当初からの寺域の北限とも考えられている。飛鳥時代の遺構は、広隆寺との関連からも重要な遺構であり、一連の調査でも大きな調査成果があげられた。

奈良時代 (図58) この時期の明確な遺構は2次調査(調査27)で掘立柱建物を検出したのみである。

平安時代 (図59) 東側では、1次調査で旧城北街道の可能性のある平安時代後期の道路遺構と東西両側溝を検出した。現道路心より約12m東に位置する。2008年の調査(調査24)でも鎌倉時代の旧城北街道関連と思われる溝を検出しており、一連のものかと考えられる。これらが旧城北街道であれば、平安時代後期まで遡る道路ということになる。

西側ではこれまで検出例が少なかった平安時代の遺構が多数検出された。4・5次調査では平安時代中期を中心とする建物群・井戸・土坑など、3次調査では中期から後期の築地状遺構となる高まりや路面など区画に関連する遺構を検出している。この高まりの下層からは前述の飛鳥時代まで遡る溝を検出しており、これらが広隆寺寺域北限となる可能性が考えられる。これより南では明確な遺構は少ないが、遺物が出土していることから生活域が展開していたと考えられる。

鎌倉時代から室町時代 (図60) 最も遺構密度の高い時期で、全域で遺構を検出している。城北街道および旧広隆寺境内に関連するものとしては、2・4・5・7次調査においての南北溝の検出がある。これらの溝は旧城北街道の西側溝であり、広隆寺寺域の東限となると考えられる。溝の一部は直交する東西溝と合わせて、土地の区画溝となる。3次調査では区画された地区の北部で火葬場を検出し、その南の地域は墓地となる。5次調査では区画された居住域や空地(不用品の捨て場)を検出した。出土した遺物は16世紀中頃までのものであるため、室町時代後半には埋没したものであると思われるが、すべての南北溝が一連のものであればおよそ280m分を確認したことになる。これらはすべて西側での調査結果で、旧城北街道は少なくともこの時期まで遡ることが判明した。6・7次調査では城北街道に面して門跡を検出した。広隆寺もしくは子院に関係するものであろう。

その他多数の土取り土坑や集石遺構を検出している。集石遺構は単に石の捨て場としてではなく、土取り土坑などの整地の際に、土器とともに大小の石をいれ、堅牢な整地としたものと考えら

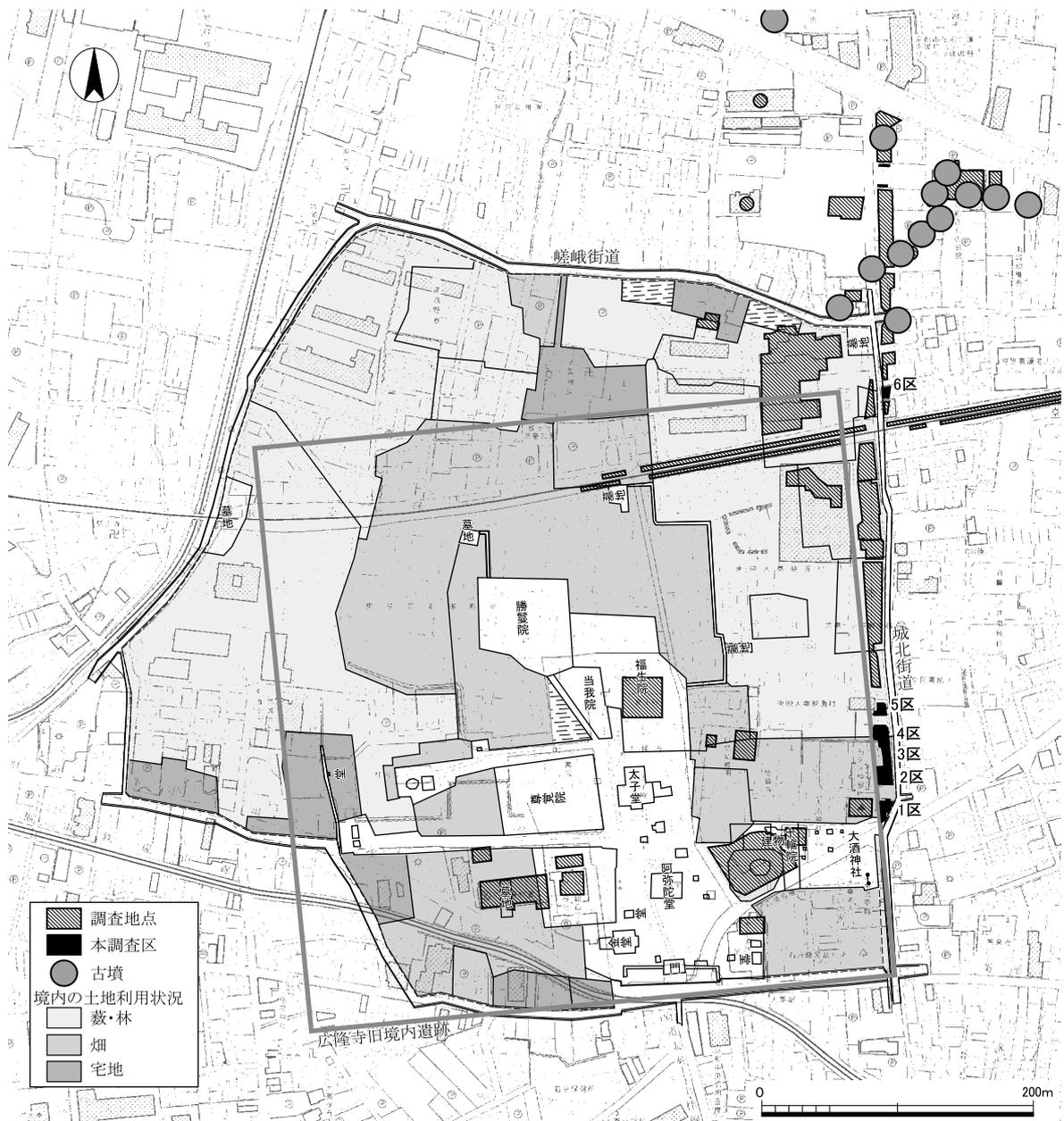


図61 広隆寺境内と内外区別実測図および周辺調査位置図（1：5,000）

れる。それほど、活発な土地活用がこの時期には行われている。

城北街道拡幅工事に伴う調査は、今回の7次調査で終了となり、この事業に伴うこれまでの総調査面積は4,380㎡になる。新たな古墳の発見に始まり、旧広隆寺の寺域を画する溝や城北街道が古道であることなど、新たな知見や今後の遺跡の範囲を考える資料を得られたことは大きな成果であった。

図 版



1 1区北部全景（北から）



2 1区南部全景（西から）



3 柱穴列1-2・1-3（北西から）



1 2区南部第1面全景（西から）



2 2区南部第2面全景（西から）



3 2区北東部全景（北から）



4 2区北西部全景（北から）



1 3区南全景（北から）



2 溝3-1・3-2（西から）



3 4区第2面全景（北西から）



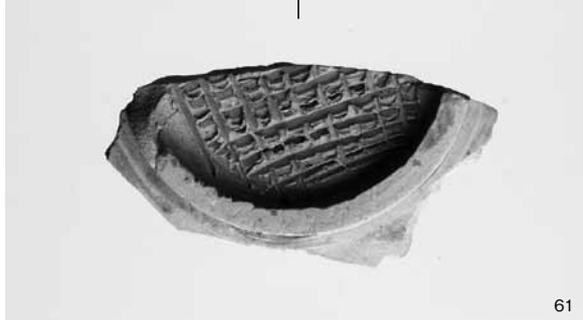
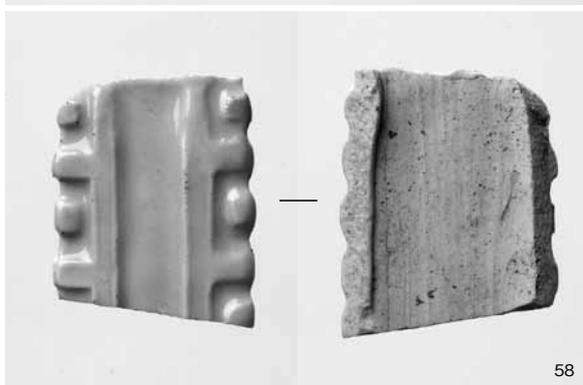
1 布掘基礎4-42 (北から)



2 5区全景 (北東から)



3 6区第2面全景 (東から)



1·2区出土遺物



3～6区出土遺物



瓦1



瓦2



瓦7



瓦8



瓦17



瓦9



瓦13



瓦14



瓦19



瓦22



瓦23

出土瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき・いちのいいせき							
書名	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-11							
編著者名	近藤章子・布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区	26100	908	35度	135度	2012年8月 13日～2012 年11月30日	約660㎡	立体交差 事業
いちのいいせき 一ノ井遺跡	うずまさひがしほちおかちょう 太秦東蜂岡町 ほか ちない 他 地内		913	00分 53秒	42分 33秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
常盤仲之町遺跡 一ノ井遺跡	集落跡 ・墓跡	飛鳥時代			瓦		室町時代の城北街道、区画に関連する溝、門跡を検出した。いずれも広隆寺の東隈に関する遺構の可能性がある。	
	散布地	平安時代	土坑、柱穴		土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、瓦			
		鎌倉時代	土坑、溝、柱穴、井戸、整地層		土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、山茶碗、瓦			
		室町時代	土坑、門、柱穴、柱穴列、小穴、落込、溝		土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、石製品、瓦			
		江戸時代	井戸、土坑		土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、金属製品、土製品、瓦			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-11

常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡

発行日 2013年1月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961